

賀茂神社太々神樂

一 伝承地

上野十二社の一社で、県内有数の古社として知られる式内社の賀茂神社は、桐生市広沢町の、賀茂沢入口に位置し、八王子丘陵をひかえて社叢うつそうとした神域は、あたかも神がおわします如くの森蔭なたずまいを呈し、豊かな自然綠地は、桐生市の自然保護地区に指定されている。

二 上演の時期及び場所

昭和二十年までは、四月十四日を春期例祭、十月十四、十五日の秋期例祭日に、常設神楽殿での上演が恒例であった。戦後は四月十四、十五日、および十月十五日頃の土・日曜日に改められて、奉納上演される。

神楽殿は、社殿に向かって左側の石垣上に切妻白木造り。三方開放で、造り出しあや勾欄がなく、古式が感じられる。舞面は二間四方の高床式で、地上高一五メートル。三方に注連縄を張り、紙垂を巡らせ、神紋二葉菱紋幕が張られる。中央奥に造り付けの神座を設けている。出幕は、神座の左右二カ所で、右側出幕前に囃子方、舞人は左出幕より入退場する。楽屋は後背部に二間四方が接続し、右側に数段の階段が取り付けられている。

行事の次第・構成・演目・芸能等

上演開始まで一時間三十分の準備を要することが、他に例を見ない特筆である。

締太鼓の調律には、一般的なボルト締めではなく、伝統の麻糸調律を継承している。材料麻を、神楽師が手で掏った麻糸を締結とし、直径三十七センチの丸太を利用しての締めつけ（調律）で、伝統の温存は柔軟な響きにある。低・中・高音の、全音域部の響きが確実に、神庭に届くことであり、そのことによって、舞人の演技を補い、よりリアルな背景効果音が期待できる。

三十分の神事に統いて、昭和十五年より続く、莊重典雅な「浦安舞」約十分が終

了と同時に、社殿からは太鼓が打ち鳴らされ、神庭に重く響き「宮比神樂」の奉納上演が開始となる。

まず、伝統の五種子演奏から始まる。八丁目・昇殿・鎌倉・四丁目・仁羽・雅樂。以上五曲が神樂上演前に囃される。祭り参加者・観衆に、神樂殿への注視を意図した、軽やかで心浮き立つ曲調に構成され、景気付けとも言われている。演奏にあたっては、天候、観客、宵祭り、本祭り、時間等の状況に応じて、演奏時間が五五二十分に自在な組曲として調節ができる。

初座舞として「白翁」「黒翁」の連演が、舞台淨め・神庭淨めの嚴肅な式舞で、

両面ともに切頭で古式が感じられる。「猿田彦」が二座舞で、道開けと称し、神々の登場を意味している。これ以降は状況に応じて、演目を選んでの上演が許されているが、「岩戸」「種舞」の五座までが、伝統としての上演次第で、以後は、氏子の要望に応じて、近年は、前述の「淨め」「道開け」を重視している。

式舞（表舞）十二座。狂舞（裏舞）興舞とはしない）十二座。合わせて二十四座で構成され、伝承されている演目には、前出の式舞五座の他に、「大蛇退治」「姫子」「赤女退治」狂舞には、「扇紙三番」「子守」「狐釣り」「とろろこぼし」「姫子」「種薄」があり、式舞の「悪鬼退治」「金山彦」「善惡」「おだまき」狂舞の「弥次喜多」「安珍清姫」「葛の葉」「桃太郎」「きょうや」が明治末期から昭和初期に廃絶した。狂舞の一座は早期に廃絶した様で現在伝承されていない。

廃絶演目のなかで、式舞の「おだまき」は女舞の「芋環」ではないとされ、織姫物が暗示される演目である。当社の神樂中興は、文化十二年であり、この時、多くの著名な織物関係者が奉加している。明治十五年宮比講社創立時も桐生織物躍進期であつた。地域性色濃い演目が廃絶したことは、織部桐生にとつて惜しまれてならない。小道具の「糸巻」おだまき等が残されているのみで、舞い振り、お囃子が未詳では復活も望めない。

全国に類例のない「屑紙拾い三番叟」が伝承されている。平成元年には国劇立案で上演されるなど、貴重演目もあり、それらは観覽の機会も多く、諸書に紹介されている。多くの民俗芸能は、公的機關の出演依頼による「発表の場」が与えられ、伝承の実を揚げている。しかし時間的な制約から、代表演目の「サワリ」部分しか

観覧の機会がないのが現状である。祭りの現場での終日参觀でなければ全容を観ることができない。そのため、当、宮比神樂は「台詞がまったくない」と、諸書に紹介されている。しかし、実体は、一部の式舞が「黙劇」にすぎない。祭礼と一体の奉納上演は、連演が通例で、台詞を多用した舞人など、その演技をよりリアルに表現する確かな背景効果音は、観客が神秘的な眼差しで舞台を凝視し、描寫する確かな背景効果音は、日本人の琴線とともに洗練されて来たものであり、伝統芸能の抱腹絶倒する様は、日本人の琴線とともに洗練されて来たものであり、伝統芸能の真髓が伺える。伝承演目のなかでも、もっとも長時間を要するため、精進稽古しても、披露発表する機会の少ない「姫子の舞」が、今調査に協力する保存会員によって、秋期例祭の宵祭りに奉納上演された。別項に詳述したい。

四 組織

江戸系里神樂の、宮比神樂としては、「敬神宮比講社」を明治十五年に創立し、「神導教会宮比講社廣沢連中」と称して、これまでの神職の本務として組織された「桐生座」の神楽連に代わって、氏子中の旧社家を中心とした長男有志が神樂師を務め、奉納上演と依頼奉納の伝承活動を続けて来たが、神樂師の高齢化と若手後繼者難のため、昭和四十八年に神樂保存会を組織して、一般にも門戸を広げた結果、地域の青年も伝承者として加入されている。昭和四十九年には、桐生市より、重要無形民俗文化財として指定を受け「賀茂神社太々神樂保存会」が、その保存継承団体として、真摯な精進稽古により、後世への継承が約束されている。

五 由来及び付近の類似芸能

神樂に関する古い社伝が存在する。康平元年（一〇五八）八幡太郎源義家は、奥州平定（清原武衡）のおり、当社に昇殿参社して戦勝祈願の神樂を奉奏し、凱旋の帰路には、社前に円台（舞台）を築いて舞樂を奉奏した。この時、正神主は飯塚氏。舞樂を務めた周東・阿久沢の兩氏。神子（巫女）役は岡子田氏の四家が古社家で、その後も当社に奉事したと伝えられている。降つて江戸時代、文化十二年（一八一五）神職・飯塚伊豆正が発起して、氏子や著名な織物関係者など、近郷の有力崇替者百四十人（拜殿奉納掲額）から、奉加を募り、神樂道具一式を整え、そ

の剰余金で上田一反二畝歩も求めて「神樂免」として、ここから挙がる小作料を恒久的な神樂維持費に充てた。この時の神樂は、桐生地方の神職が本務の一つとした「桐生座」の神樂連であった。

明治維新後に一時途絶えたが、前述のことく明治十五年「敬神宮比講社」を創立して、氏子中の長男によって演じられるようになつた。宮比神樂は、江戸系里神樂であるが、筑波・真壁・佐野・足利・板倉・大泉方面にも存在する。当社は「佐野から指導を受けた」ものであり「神導教会宮比講社廣沢連中」と称しているが、伝承の「佐野丸」は、あきらかに大神樂系であり、その芸態を異にしている。むしろ、佐野鐘錠の宮比講神樂の演目・舞い振り・曲調に類似が認められる。

六 特色・所見

上演にあたつての演出上、伝承演目の多くは、式舞と狂舞の連演に構成して、嚴かな式舞を、比較的短時間の演出にまとめ、観客が抱腹絶倒する狂舞に長時間を充て、時には、観客の中の人気者の名前をアドリブで挿入させながら、爆笑を誘うなど、絶妙な話芸と演技力は、支持され続けて来た奥義で、磨き抜かれた伝統の重みに感服させられる。このことは、桐生の地域性と市民感覚を熟知した、市民による神樂師なればこそである。

古くから、織物を中心として、経済基盤が整った桐生が、都市機能の一つとして、必要とした文化（芸能）に他ならない。織物生産には、多くの従事者、特に年季奉公の機械娘（織姫——女工）を必要とした。高級綿織物の陰には、女工哀史的苛酷な労働条件に泣いた、織姫の心情を忘れてはならない。

いやだいやだよ機屋の年季／朝は四時起き夜十時

桐生機織り後ろから見れば／ヒヨットコ踊りの真似をする

唄を歌つて勇んでいるが／いつも苦労は絶えやせぬ

辛苦に耐え抜きながらも、少ない物日（祭礼休日）を心待ちにしながら、みことなまでの綾錠を立派に纏り上げて、心浮き立ちながら鎮守の社で観た、道化の「舞い振り」を「機械唄・作業唄」に採り入れ、眠気を醒ましながら、自らを慰めたのが神樂であった。

多くの民俗芸能が消え行くながで、賀茂神社の神楽師は「神様に奉納する」「神様に觀てもらうために統けている」——神楽師の真摯な氣概のみに、甘んじて居るだけで良いのであるか。神楽師も現在を生きる市民県民である。極寒の稽古場では、素面の額から飛び散る汗で、濡れた體が冷たい光を発する凜まじい情景を目撃した実感は、神楽師の精神的苦勞が報われてほしい。たゞわざかであつても、報われた実感を持つていただけることが重要である。文化財の保護活用にとって、第三者的に唯一有効な手法は、披露發表の機会に、より多くの參觀者が、惜しみない声援を贈ることが不可欠と信じる。そのことによって、必ずや、統けて来てよかつた。これからも精進しよう。後継者を養成しよう。

伝統が後世に繼承されるためには、直接たゞさわる神楽師の真摯な意識と意欲のみが頼りである。

—— 真摯な意識と意欲のみが頼りである。

(平塚 貞作)

装束・採り物・他。
冠り物。 恵比須^ム烏帽子。供^ム紫頭巾。漁師^ム船屋被り。河童^ム覆布(おおい)。医師^ム中折帽子。娘^ム全被り(ぬいぐるみ)。

毛髪・他。 恵比須^ム黒の上毛(かしき)。河童^ム茶の上毛(かしき)。

面。 恵比須^ム赤須面。供^ム大笑。漁師^ム小笑。河童^ム河童面。医師^ム医筋面。恵比須^ム狩衣(かりぎぬ)衆たさき。供^ムチャンチャンコ(電子)。漁師^ムチャンチャンコ(電子)。河童^ム縫襦作。医師^ム五紋付羽織。娘^ム赤襦。

上衣・他。 恵比須^ム狩衣(かりぎぬ)衆たさき。供^ムチャンチャンコ(電子)。河童^ム縫襦作。医師^ム五紋付羽織。娘^ム赤襦。

足。 恵比須^ム紫差持(さしこ)。供^ム裁付持(たつけばかま)・赤手甲。漁師^ム裁付持・赤手甲。医師^ム差持(さしこ)。

全員^ム白足袋。医師^ム土の上では上演しない格式の証左。 恵比須^ム白足袋。医師^ム土の上では上演しない格式の証左。

持ち物。 恵比須^ム釣り竿・扇子・鉛。供^ム刀・扇子・道具箱。漁師^ム扇子・釣り竿・鉛。 恵比須^ム釣り竿・扇子・鉛。供^ム刀・扇子・道具箱。漁師^ム扇子・釣り竿・鉛。

小道具。 恵比須^ム大覆布。手拭い。蓋東。抜身。金の玉。銀の玉。木槌。御幣。 恵比須^ム大覆布。手拭い。蓋東。抜身。金の玉。銀の玉。木槌。御幣。

◎ 群馬県民俗芸能緊急調査・詳細調査。(追記分)
群馬県民俗芸能緊急調査・詳細調査。 時に、神楽殿から、軽やかな神楽囃子(五囃子)が開始される。

調査日 平成八年十月十二日 午後六時(九時四十分)

東部地区調査委員 平塚貞作

名 称・賀茂神社太々神楽。

通称・式内賀茂神社比講神楽。

演目。 妖子の舞一ひるこのまい。

演出時間。 約一時間四十分。

神楽連・宮比講神楽連中。桐生市指定重要無形民俗文化財。

演出台・本抄。

式舞に統いて狂舞の二座連演。

妖子の舞一ひるこのまい。

約一時間四十分。

神楽囃子。 雅楽一がく。鈴舞。仁羽一んば。鎌倉。カンカン。ねこじや。山寺。

妖子方。 笛^ム荻原和英・二十八歳。太鼓^ム岡部健一・五十八歳。締太鼓^ム一

け^ム歌 恒雄・五十八歳。板塚和男・五十歳。钲^ムしょく^ム石坂亥士・二

十五歳。荻野益男・七十六歳。

妖子方装束。 黒羽二重着(二葉葵日向五ツ紋付き)

着装・他。 着流し。角帯。白足袋。雪駄。

舞人・登場者。 東比須(妖子)・河内匡正・四十三歳。漁師^ム荻

野明雄・五十五歳。河童^ム稻木庸博・五十八歳。医師^ム荻野益男・七十六

歳。娘^ム稻木庸保・五十八歳(二役)。

◆ 恵比須・神座に進んだ恵比須は、正面して一礼二拍手一札する。供も斜め後方に正座して恵比須の眞似をして二礼一拍手一札する。恵比須は立ち上がり、後づさりで三歩下がって顎廻り、後づさり、対角線前進等で「四方固めの舞」を行う。

この時、四方固めの所作は、深々と一札の後に、かざした扇子を、左・右・左(さゆうさ)と御祓い様にして左右に振り、再び一札する。あたかも虚空を切

る」とくの所作は、祓え清めの感。

◇供

四方固めの真似事をおこなう。

（一礼）一拍手一礼の所作は、常人でなく神であることによる。

・恵比須の所作を覗き込んで、真似をしながら扇子を左右に振って、四方固めをするが、恵比須の所作が丁寧なため、供はすぐに抱きて胡座（あぐら）をかいて、扇子で悠然と扇ぎながら休む。再び恵比須の後方から四方固めの真似事をおこなう。

この時の足取りは、膝を折つて足をこまめに運ぶ。

舞台上では、観衆の視界を遮らないように恵比須と直線の位置に重ならないように、舞い振りの状況を大きく見せるように、自分の位置に配慮する。

◆恵比須・神座から鉈を採る。——鉈舞に入る。

釣り竿は左手に持ち左肩に担ぐ。鉈を右手に採つて立ち上がり、鉈舞が開始される。右手を大きく広げて天・中・地と三段階に振る。釣り竿を持つた左手も天・中・地と大きく振る。この時、両足も大きく踏み出して全身を屈伸させながらスケール大きく、オーバーアクション気味の舞い振りは、躍動的で神秘感がただよい、憑依（ひょうい）の陶酔状況が感じ取れる。

◆恵比須・四方固めの舞が済んで神座に戻り、鉈を置き、扇子をかざして舞台を一巡して上手（かみて）に座る。

◇供

——鉈を腰直前に、鉈を振ると同時に神楽囃子（雅美）。恵比須の斜め後方から中腹のまま真似をして、舞いながら下手にあぐらをかいて座る。

◇供

刀の柄（つか）を上にして下部を両手で握り、肘を張り、肩を怒らして恵比須の前に進んで正座し、誇らしく恵比須の面前に突き出しますように差し出す。

——狂舞開始。一般的な興舞とは言わないので、式舞終了。

◆恵比須・手を二回叩いて供を呼び、刀を持って来るように黙劇（ハントマイム）で指示をする。

◇供

刀の柄（つか）を上にして下部を両手で握り、肘を張り、肩を怒らして恵比須の前に進んで正座し、誇らしく恵比須の面前に突き出しますように差し出す。

——この時、笛と太鼓の効果音。

◇供

・差し出した刀を叩かれ驚いて尻餅をつくように後ろにノケゾリ、慌てて右手を支えにして、後ろに這いつらがら逃げるようにして、元の下手に戻り、何故叩かれたのか、刀を抱き抱えたりしながら逃げるようにして、元の下手に戻り、何故わかったのか、刀を抱き抱えたりしながら逃げるようにして、元の下手に戻り、刀の柄を下向きであつたためと思いつき、刀を一回転させて、柄を下に、柄部を両手で持つて、跨らしそうに頭をフリながら、得意満面で再び恵比須の前に進んでタイと差し出す。

◆恵比須

・さつきは柄を上にして叩かれ、今度は下にして叩かれててしまい、どうしてなのだろう、身振り手振りしながら思案する。ようやく考えがまとまったのか、両手を打つて確信の様子。埃を払う様に、着物で刀を丁寧に拭いた後、今度は横にして、両手に掲げて、頭を下に運んで正座し恭しく差し出す。

◆恵比須

・左手で当然の如く受け取り、左脇に置く。

◆恵比須・左手を腰にさして恵比須の前に進み、正座して深々と一礼する。

◆供

・一礼して喜んで戻り、満足した素振りであぐらをかいて悠然と扇子で扇ぐ。

◆恵比須

・天・中・地と大きく振る。この時、両足も大きく踏み出して全身を屈伸させながらスケール大きく、オーバーアクション気味の舞い振りは、躍動的で神秘感がただよい、憑依（ひょうい）の陶酔状況が感じ取れる。

◆供

・時おり、恵比須の舞い振りを覗き見しながら、天・中・地と、扇子と刀を探つた両手を抜けて舞う。足の運びは、つまり先でちよこちよこと滑稽な舞い振り。飽きるのか、時折扇子を抜けて、扇ぎながら休む。

——狂舞開始。一般的な興舞とは言わないので、式舞終了。

師が待機している。

○「そおうかあ旦那は漁師を呼んでこつて言うんだな、そーうか、わかつた、わかつたあ、じゃー漁師を呼んで来よー」
神楽囃子（仁羽）。

内容は日常会話的で、当地の方言も多用して、多少のアドリブ

が許されている。

——妙な手踊りは、「どこひよ舞」と称し、火男（ヒヨウトコ）を反転させた宮比神楽独特の俗称である開いた扇子で顔を隠す、供と向かい合って、手を取りながら軽快な手踊りで登場する。供は後ろ向きの姿勢。リズムに乗った両者の舞い振り、特に足の運びが絶妙。舞台正面まで進んで、中腹のままお互いに顔を見合わせて突然大きく笑いだす。

◆恵比須・怒った様に扇子で刀を大きく叩く。

□漁師

・開いた扇子で顔を隠す、供と向かい合って、手を取りながら軽快な手踊りで登場する。供は後ろ向きの姿勢。リズムに乗った両者の舞い振り、特に足の運びが絶妙。舞台正面まで進んで、中腹のままお互いに顔を見合わせて突然大きく笑いだす。

×二人

○「ワッハハハ…… ワッハハハ……」互いに腹を抱えて大笑いする。

◇供

○「漁師は扇子を使って、お供は腰鼓を打ちながら全身での爆笑が暫く続く。」

◇供

○「漁師お前えつきから俺の顔を見て笑っているようだが、何あにがそんなに可笑いんだい」

◇供

○「以下、身振り手振りよりろしく。扇子を巧みに使つて笑う。

◇供

○「おもしそれとーんで、笑つたんだよ」

◇供

○「こーんなあでえつけーんか、そーのがあもしろいんか」

◇供

○「互いに腹を抱えて、ワッハハハ……」

◇供

○「ところであー、お供、お前もさつきから笑っているけど、何がそんなに可笑いんだい」

◇供

○「漁師のなー、『がこーんなに小つちえーんでなし、そーのが可笑しくつてなあし、笑つたんだよ』」

◇供

○「お供は、漁師に向かつて、互いにワッハハハ……」

◇供

○「漁師漁師、実はなー、うちのなー、旦那があー、漁師用があるそうなんだ」

◇供

○「そーかい、お供んとこのなー、旦那があー、俺に用おーがあるつてんか」

◇供

○「ところであー、お供んとこの旦那はなーーん名前なんだい」

◇供

○「俺とこの旦那はなー、えびすつてんだあー」

◇供

○「ええー、えびづつーー」
声は下がり調子で言う。

◇供

○「そおーじやねえー、そおーじやねえー、え・び・す・つ・て・ん・だ・よー」

◇供

○「ああー、いびつかー」
声は下がり調子で言う。

◇供

○「いやあーちがう、ちがう、旦那の名前は、えびすつて言うんだ」

◇供

○指を折りながら「ああー、えびすつて言うんか」と首を大きく振る。

◇供

○「よーしょし、わかつたわかつた、ああーそおーか、お供んとこの旦那は、えーびーつてんか」

◇供

○「そおーおーだ、そおーだあよ

□漁師

○「あー、わかつた、わかつたー」ところでなーー旦那は何處に居るんだ」

◇供

○「うちの旦那はなーー、この先ちょっと行ったとこに居るんだがなーー」「ところであー、うちの旦那は、すーーおく偉えー人なんだよ」

□漁師

○「あー、そおかい」

○「漁師はなーー、うちの旦那の前で上手にお辞儀が出来るかなーー」

□漁師 ○「そーんなん、わきやあーねえー、いつもやつてることだ」

◇供 ○「あーそうかい、それじゃやあー俺がここ見ててやるから、ここでやつて見

てくんねーか」

○「ここまで会話は扇子を巧みに使う。

——ここまで会話は扇子を巧みに使う。

○「漁師、扇子を脇に差し中央で四つんばいになる。

神楽囃子・仁羽。

○「お供、リズムに乗って漁師を覗き込むようにして手踊りする。

——この時、笛のみの背景効果音で、仁羽くずしふう。

○「左手の振り——テンツクスティック——テンツクツ——左手は床に付けたま

・右手の振り——チケテンツク——チケテンツク——スティクテンツクツ——右手は

テケテンツク——チケテンツク——スティクテンツクツ——四つんばいのまま尻を

上げる。そのまま

テケテンツク——スティクテンツクツ——尻を下げる頭を上げる。

・左手を腰に差して「俺らがなーー、ちよーとなーー、やつて見せるからーー、

がら、扇子を腰に差して「俺らがなーー、ちよーとなーー、やつて見せるからーー、

見ててくれえー」

○「あーわかった、わかった、よしよー」

・漁師が下手に下がり、お供が正座して深々とお辞儀の見本をする。

・漁師は中腰で腰を込んで、扇子を叩いて納得する。

○「なーーんだ、そんな事か、そおーお辞儀ならいつもやつている」とだー

・正座して丁寧にお辞儀する。お供も横に並んで一緒にお辞儀する。

○お供の顔を覗くように「おいお供、これでいいだろー」お供首を振り納得。

○「よーー、それでは旦那の所へ行くか」

——神楽囃子・仁羽。

○「さあー行こおー

◇供

○「それじやあ、あそこに旦那が居るから、ちょっと挨拶して来いやあ」

□漁師

・恵比須の前に進んで深々と一礼して、恵比須の顔を覗きながら一度一礼して下手に下がり、お供の隣に胡座をかけて座る。—— 恵比須は無表情。

◇恵比須

・二回手を叩いて漁師を呼ぶ。

□漁師

・恵比須の前に進んで深く一礼する。
◆恵比須・釣り竿を握って、これから魚釣りをするから、側を探つて来なさい。と、黙つて指図する。

□漁師

・恭しく釣り竿を受取り下手下がる。

×二人

・自然に「あんなあ」「おー、どうもどうもどうも」立ち上がりたお供に漁師は恵比須の指示を報告する。

□漁師

・且那がなあ、魚を釣るのに餌を探れって言うんだよ

◇供

・あーそおか、俺とお、漁師と側を探れることなんだなあ、よーし、採らおう、とおー

・二人で側の採れそうな場所をさがす。恰好な場所が見つかれば神楽囃子・鎌倉

ーのリズムにのって、竿と扇子を巧みに使っての側取りが始まる。

テンテンドンドンドン ドドックドドック

スツテン ステンガントンドコドン テンテン

・竿と扇子を使って、手足の動きが、浅瀬での軽妙なしきど、二人の位置がお

離子のリズムに乗って上・下入れ代わりながら側取り無いを行う。

・三度目の時、漁師が竿でついた土が跳ねて、お供の目に入る。あわてて。

○「アーハタタタタターパーー！」目に泥が入った、早く取ってくれえ

・慌ててお供に近寄り、目を舐めるようにして泥を取るぐさ。

◇供

・「あー痛かったなあー」

□漁師

・「あいじょぶかあ

×二人

・再びリズムに乗つて側取りが始まる。お供は扇子を箸のようにして川虫を捕まえては腰の魚籠に入れるぐさ。

・漁師は釣り竿を川面に突き刺して搔き回したり、水面を叩いての側取り舞い。

・上下の位置に入れ代わった二三度目の時、

○「漁師、そろそろ側を竿に付けようじゃないかあ

◇供

・竿から糸をほぐし針を持つてお供に差し出す。

□漁師

・糸を漕そうとして、手の平で叩くと泥が飛んで漁師の鼻の中に入ってしまう。

□漁師

・大きなクシャミをする。

○「ハハハ、ハアツクショオーン」

◇供

・鼻をこする。

□漁師

・お供はびっくりする。
◆恵比須・右手に扇子、左手に竿を持つて立ち上がり、竿に巻かれた釣り糸をほぐしながら休む。

□漁師

・側を付けて下手下がつて胡座をかいて悠然と扇子で仰ぎながら休む。

◇供

・お供の隣に控える。

□漁師

・準備の整った竿を恭しくかざして恵比須に差し出し、一礼して下手下がつて指図する。

□漁師

・お供と漁師の二人は、遠くから恵比須の釣りかたを眺めて、物真似をする。

◇供

・恵比須が、片足を膝位置に折り曲げての片足立ちで釣る姿を見て、二人もよろけながら真似する。—— この時、三人の位置が重ならないようにする。

□漁師

・恵比須は釣り場所を上手に変える。この時、片足立ちで扇子を括げての姿勢。

◇供

・扇子は片手に持ったまま力強く振り降ろして瞬時に開く。

□漁師

・二人も真似して扇子を開いての片足立ちで、時折よける。

◇供

・二人も片足立ちで、上・下の前脚で、ヨロケながらの釣り真似。

□漁師

・恵比須・縫を釣り上げる。舞台中央に引き寄せて竿を大きく上げる。

◇供

・二人が驚き喜んで、嬉々とした声を発しながら縫を押さえ込むが、生きの良い縫が跳ね回つて中々捕まえられない。恵比須は竿を置き上手に座つて、お供と漁師が縫と格闘する様子を眺めている。

□漁師

・お供と漁師は、縫と格闘しながらも、握った指を巧みに使って、縫の元気の良さを表現する。

◇供

・ようやくに捕まえた縫を扇子の上に乗せて、お供に「旦那の所に置いて来るからなあー」

□漁師

・声を発しながら大きく額き、胡座をかいて扇子で扇ぎながら休む。

◇供

・扇子を開いて縫を受け取り右脇に置く。漁師は一礼して、下手のお供の所に戻つ

□漁師

・竿から糸をほぐし針を持つてお供に差し出す。

◇供

・糸を漕そうとして、手の平で叩くと泥が飛んで漁師の鼻の中に入つてしまつ。

□漁師

・糸を漕そうとして、手の平で叩くと泥が飛んで漁師の鼻の中に入つてしまつ。

◆ 恵比須・手を二回叩き漁師を呼ぶ。

□ 漁師・恵比須の前に進み、恵比須が竿を差し出し餌を着けるように黙劇で指図する

・恵比須から釣り竿を両手で差し出し餌を着けるよう黙劇で指図する

・始める。「舞うよう」。

□ 漁師・神楽囃子・鎌倉。

・ふたりの餌取り舞いは、上・下を適当に入れ替わりながら、跳ねるような舞い

振り。やがて、餌が取れたお供は、針に餌を着けようとする。この時、漁師は

右手で釣り糸の中程をもじ、右足の指先で竿の元を押さえて支点として、左足

を進めてその場で一回転しながら釣り糸をタグル。お供が餌を着けようと四つ

んばいになって針を追いかけながら一巡する。ようやく追いつき餌をつける。

漁師は、恵比須に恭しく差し出し、下手にさがる。

◆ 恵比須・やおら立ち上がり、しきりに釣り場を探して上手で釣り始める。片足立ちで扇

子を開いて胸前に置いての釣り姿勢。

×二人・上手、下手に別れてヨロケながら恵比須の真似をする。

◆ 恵比須・流れにまかせて糸を垂らすがなかなか釣れない。二三度場所を変えて、左出幕

奥に糸を投げて、竿を引いて前向きの釣り姿勢。この間、お供と漁師は、恵比

須の真似をするが、三者が重ならない位置に注意する。——観客への視界。

・恵比須が大きな網を釣り上げる。網が跳ねる様に竿を上下させて生きのよい様

子を表現する。

・前回同様、跳ねる網を押さえよう二人が競闘する。ようやく捕まえた網を漁

師が扇子に垂せて恵比須に差し出す。この時網の尾をピクピクさせながら、重

そうに腰を低くして進む。恵比須は、開いた扇子で網の上から押されて、受取

り右脇に置く。漁師は下手に戻って、扇子で扇ぎながらお供と談笑する。

◆ 恵比須・手を二回叩いて漁師を呼ぶ。漁師、恵比須の前に進み一礼する。

・私は帰るから、二人で魚を釣つて来なさい。と、手を大きく使っての、黙劇で

漁師に指図する。漁師、釣り竿を受取つて戻る。

○「おーいお供、旦那はなあ、あーんなでえつけえーのを釣つちやつたから、

もう帰るそだ、後は一人で釣つて来いって言うんだあー」

◇ 供

○「あーそうかあ」「じゃあなあ、俺は旦那を送つて来るから、漁師はここで

一服してくんねえーか」

□ 漁師

○「じゃあー頼むねえ」

○「供立ち上がる。恵比須は、扇子に載せた網を胸に抱えて立ち上がり、ゆづく

りと一巡して、左出幕から下がる。

・お供も、開いた扇子を胸に抱えて、恵比須の真似をしながら後に続いて出幕奥

に消える。

・直ちに出幕から飛び出す様に漁師の元に戻る。

○「おー、漁師漁師、且那を送つて来たからあ」

○「あーこ苦勞だつたなあー」

□ 供

○「じゃあー旦那でえつけえーのを釣つでつけえーのを釣るかあー」

□ 漁師

○「ひとつ、でえつけえーのを釣つでつけえーのを釣つて帰ろう」

○「ここはなあ、且那がさつきでつけえーのを釣つちゃつたから、もういねえー

から他で釣ろう」

○「さあー行こおー」

□ 漁師

○「そまだなあ、この辺もいけどあの辺も良さそうだな」

○正面で釣り始める。——片足立ちで扇子を開いてヨロケながら

・漁師は扇子を握りながら竿を握りながら、正面位置の、上・下で互いに

が釣り糸を垂れている側に投げたりして、邪魔をする。

○「お前え、なーにやつてんだよおー」大いに怒る。

○「お供、そんなに邪魔ちやあー、魚が釣れねえよおー」

○「そんなら俺に貸してみろ、でつけえーのを釣り上げて見せるからあ」

・扇子を胸に、片足立ちでヨロケながら釣り始める。

・今度は、漁師が同じよう邪魔をする。

○「おーい漁師、そんなに邪魔をしては釣れないよおー」

・時折、文句の言い合いをしながらも何度も度数か釣り場を変えて、左出幕奥に糸を垂

らして、前向きで片足立ちの釣り姿勢。

・このとき、漁師は上手で開いた扇子で扇ぎながらの手踊り。

・やがて大物が掛つた様で、一人では釣り上げられず、漁師を呼ぶ。

・漁師、急いでしなった竿の下に入つて手伝う。ようやく引き上げ正面に来る。

・得体の知れぬ物を釣り上げ悶えふためく。

×二人

・恐れおののきながらも、動く物体に、奇声を発しながら、近づいたり遠ざか

たりと一巡して、左出幕から下がる。

◇ 供

・釣り竿を使って、物体が被つた布を恐る怨々、尻から頭の方に取り外す。

○「わああー カッパだ、カッパだー」

・立ち上がりがつたり、腰になつたりしながら交互に二人を睨む。

△河童 ×二人

・河童が向いたり、寄つて来ると、二人は、手で追い払いながら悲鳴を発する。

○「あっちに行け」「向こうに行け」言いながら逃げまどう。

○「よー」、皿の水を拭いてやれえー

□漁師

・河童の皿の水を、被つていた布で拭く。

○水を拭き取られたカッパはおとなしくなる。

◇供

○感心した様子で「おとなしくなったなあー」

○河童に呼びかけるように「おい、カッパア」カッパがコックリする。

○「あれえー、漁師のカッパがコックリしたなあー」

□漁師

・驚いた様子で「へえ、話がわかるんみてえーだなあー」

○感心したのか、話しかけるように「カッパ、話がわかるんかあ」河童河童は大きくうなづく。

○「それでは、何か芸が出来るかあ」カッパは大きく頷く。漁師喜ぶ。

□漁師

・「おいかッパ、おまえ踊りが踊れるかあ」

△河童

・大きくコックリする。

□漁師

○「へえー、このカッパ踊りが踊れるんかあ、それじゃあカンカン踊れるかー」

△河童

・大きくコックリする。

□供

○「カッパがおどれるかあ」

□漁師

○「それではカンカン踊らうおー」

△二人

○「さああー踊らうおー」言いながら

・大きく踊り始める。

△河童

・お供は下手、漁師は下手、カッパが中央でのカンカン踊りが始まる。

・カッパ踊り二回目の時より、カッパは、踊りながら、しきりに頭のお皿に水を付ける仕種、何も知らずに陽気に踊り続ける二人を親ながらスキを狙う。

・踊りの途中、漁師の股間に飛びつき、漁師の金玉を抜いてしまう。

◇供

○「よーいわかった、すぐ医者を呼んで来るからな」

神楽囃子・カンカン。

△河童

・上手に座り、扇子で扇ぎながら息吹切らしたようす。

□供

○「よーいわかった、すぐ医者を呼んで来るからな」

△二人

○「よーいわかった、すぐ医者を呼んで来るからな」

△二人

○「よーいわかった、すぐ医者を呼んで来るからな」

△二人

○「よーいわかった、すぐ医者を呼んで来るからな」

△二人

○「よーいわかった、すぐ医者を呼んで来るからな」

△二人

○「よーいわかった、すぐ医者を呼んで来るからな」

・軽快なリズムにのって手踊りしながら医者を呼びに行くが、急いだあまり医者の家を聞くのを忘れていたことに気づき、漁師の元に引き返す。

△漁師

・倒れたまま少し頭を上げて「あーもう行つて来てくれたかあ」

○慌てて「実はなあし、医者の家を聞くのをつかり忘れてしまつたがなあー」

○医者の家はどこだあー

□漁師

・苦しそうに「本町のおー、横町のおー、曲がった角から三軒目だあー」

○「早くたのむよおー」

□漁師

・「本町のおー、横町のおー、曲がった角から三軒目だあー」「よーしわかつたあ、直ぐに連れて来るからな」

○慌てて「ずつくり『実はなあし、ついその先で石にけつまづいてしまつて、医者の家を忘れてしまつたんだあー、申おうし説ないが、もーいつかい教えて来れないだろーか』

□漁師

・「しょーがねえーなあし、あのなあ、本町のおー、横町のおー、曲がつて角から三軒目だあ、早く頼むよおー」

○「やあー、苦労さん、もう行つて来てくれたあんかあ」

○慌てて「ずつくり『実はなあし、ついその先で石にけつまづいてしまつて、医者の家を忘れてしまつたんだあー、申おうし説ないが、もーいつかい教えて来れないだろーか』

□漁師

・「しょーがねえーなあし、あのなあ、本町のおー、横町のおー、曲がつて角から三軒目だあ、早く頼むよおー」

○「やあー、苦労さん、もう行つて来てくれたあんかあ」

○慌てて「ずつくり『実はなあし、ついその先で石にけつまづいてしまつて、医者の家を忘れてしまつたんだあー、申おうし説ないが、もーいつかい教えて来れないだろーか』

□漁師

・「しょーがねえーなあし、あのなあ、本町のおー、横町のおー、曲がつて角から三軒目だあ、早く頼むよおー」

○「やあー、苦労さん、もう行つて来てくれたあんかあ」

○慌てて「ずつくり『実はなあし、ついその先で石にけつまづいてしまつて、医者の家を忘れてしまつたんだあー、申おうし説ないが、もーいつかい教えて来れないだろーか』

□漁師

・「しょーがねえーなあし、あのなあ、本町のおー、横町のおー、曲がつて角から三軒目だあ、早く頼むよおー」

○「やあー、苦労さん、もう行つて来てくれたあんかあ」

○慌てて「ずつくり『実はなあし、ついその先で石にけつまづいてしまつて、医者の家を忘れてしまつたんだあー、申おうし説ないが、もーいつかい教えて来れないだろーか』

○「よーいわかった、すぐ医者を呼んで来るからな」

○「よーいわかった、すぐ医者を呼んで来るからな」

○「よーいわかった、すぐ医者を呼んで来るからな」

○「よーいわかった、すぐ医者を呼んで来るからな」

○「よーいわかった、すぐ医者を呼んで来るからな」

○「よーいわかった、すぐ医者を呼んで来るからな」

○「よーいわかった、すぐ医者を呼んで来るからな」

○「よーいわかった、すぐ医者を呼んで来るからな」

○「よーいわかった、すぐ医者を呼んで来るからな」

◇供

○領き、漁師に近づき「漁師い、あのなあー先生がなあー、ちょっと腰を上げて見ろって言うからなあ、少し上げてみるやあ」

○「痛いだらうけど少し我慢しやあ」——漁師の腰に手をあてながら、腰を上げる。

○「お供も腰に手を添えて手伝う。」——お供も腰に手を添えて手伝う。

○「ああーそっかそっかあー」扇子を腰に差して立ち上がり漁師に近寄る。

○おもむろに座って漁師の尻をまくる。驚いた様子で顔を背ける。

○おもむろに座って漁師の尻をまくる。驚いた様子で顔を背ける。

○「うわあー、臭い、くさいくさい、臭くてだめだあー、うわあー」閉口した様子で悲鳴を発する。

○お供に向かって「こおーれつわなあー、だあめだあーくさくって、少し洗わなければダメだあー、臭くつて診察が出来ない」

○神座に歩んで机の東を持つて漁師に話しかける。

○この間、医者は、閉口した様子で、右手を大きく横に振って、鼻には扇子を当てる。「アクサイクサイ」と連発する。

○漁師を覗き込む様にしながら手を横に振って「漁師、漁師、あのなあ、ケツがなあ、臭くつて臭ああくつてなあ、しょおがないでなあー、今水で洗うからあ」

○「少しシミルかも知れねえーがなあ、我慢しよお」漁師頷く。

○後ろに廻って、両手で川から水をすくい上げて、掛け声を掛けながら漁師の尻に水を掛ける。三回ほど水を掛ける。

○四つんばいの姿勢で、痛みをこらえる様に体を前後に揺りながら「うううしめる、うしめる」悲鳴をあげる。

○「先生きれいになりましたからこんなことでどうでしょかねえ」医者に伺ひをたてる。

○「うん、そうか、良く洗ったかあ」「良おしい」漁師のもとに歩んで、尻を巻くつて股間を覗き込む。

○「うわあー痛ってええ」しきりに悲鳴を発する。お供も適当にいたわりの声をかける。

○「先生きれいになりましたからこんなことでどうでしょかねえ」医者に伺ひをたてる。

○「うん、そうか、良く洗ったかあ」「良おしい」漁師のもとに歩んで、尻を巻くつて股間を覗き込む。

○「うーん、なーるほどなあ」

○「うちがつて右手に持った差しを遠目に見る。」——客席側から見えるように。

○「うちがつて右手に持った差しを遠目に見る。」——客席側から見えるように。

○「左手で差ししながらうす法を読み取る。」——客席側から見えるように。

○驚いた様子で「ふううん、これは近年に無い大きな穴だなあ」

○「縫割り八寸五分五厘五毛ある」

○「縫割りがあ」驚いた様子。

○「上手に戻り、お供に向かって、漁師に説明するように扇子を使って黙劇で指図をする。

○「漁師、あのなあー、ええつけえ一穴がなあ、あいやつたそだあ」

○「縫割りがあ」八寸五分五厘五毛だつてさあー」「どおーするんだあ

○「漁師に寄り扇子を物差しにして見立てて尻にあてる。立ち上がって、物差しをかざして目盛りを読みよにして、大きく指さしながら領いて「へええー、横が七分七厘五毛だあ」お供に伝える。

○驚いた様子で「へええ、稀だなあ、稀だ」言ひながら座る。

○漁師に近づき話しかける「横がなあー、七分七厘五毛だつてよ」「どおーするう

○心配そうに。」——心配そうに。

○「よわったなあー」

○「よわったなあー、どおーするう、じやあーお医者さんに聞いてみるかあ」

○「よわったなあー、」

○医者の前に手をついて下から見上げる。「先生えーどおーにかなりませんかねえー」必死のおもむきでたずねる。

○領きながら「ううん大丈夫、なるなる」道具箱からしきりに何やら探る。

○やがて何やら搜し出して、手にして座ったまま膝を進めて一步進み寄る。

○「ややら先持つて、両手を大きく伸ばしながら、一語々々口上よろしく説明を始める。

○「実はなあー、ここに金の玉と、銀の玉がある。金の玉は、小さいけれど値が高い。銀の玉は、大きいけれど値が安いんだあ」「なあーあ、わかつたかあ」お供に納得させる。お供は大きく頭を振りながら「いいか、金の玉は長持ちする。これは一生お大夫だ。あの穴に入れても大丈夫だ、いつ生き長持ちする。銀の玉は、ちょおーくよく入れ替えなければ駄目なんだ」だから、よく

◇供

聞いてそ、どつちがいいかな、なあ」

「わかつた、わかりました」立ち上がりて漁師の元に行く。

○「漁師、漁師、はなあ、金の玉と、銀の玉があるそうなんだ、そおれでえ、金の玉はなあ高いけど一生持つそなんだ。それえでえ、銀の玉はなあ

安いけどちよおく替えなければなんねえーんだとお、どおーするってんだよ」

○痛さをこらえながらも「ううーん、それじや、一生持つ金の玉をお願いしま

すかねえ」

○「そーか、じゃわかった、じゃあ行つて来るからな」

◇供

「先生、金の玉でお願いします」

○「ふうーん、あーそうかそうか、それが間違いねえーなあ、よしよし」

・金の玉と木槌を持って漁師の尻に近づき、金の玉を尻にあてがう。

・寸法を確認するため何度かあてがう。

・「うーん、ちよと大きいかな、削らなければだめだ」

○「削つちゃんですか」——驚いた様子で。

◇供

・刀を抜いて金の玉を削り始める。

◇医者

・慌てて削りカスを扇子で受けるように「あーあもつたないもつたない

・しきりに、もつたない、と言ひながら開いた扇子を差し出す。

◇医者

・「ほんなんもんていやなあ」言ひながら刀を鞘に収める。

○削つた金の玉をあてがい「いまあちよいだなあ」刀を抜いて削り出す。

○「これで大丈夫だおー」尻にあてがう。

○「うん、これで大丈夫だおー」納得した後、お供にむかって「じゃあこれ

・入れるからなあー」木槌を持って、両袖を振り上げて打ちつけるしささ。

○笛の効果音のリズムに合わせて三回木槌で打ちつける「いかおあー、そおれええー」——神座囃子。カンカン。

○「よっしゃあー」

□漁師

・医者の掛け声とともに、少し前にめる。

△医者

・今一度、念を押すように、木槌をあてる。

□漁師

・すかさず前に突つ伏す。

△医者

○お供に向かって「これで大丈夫だおー」「なあー」「一生だいじょうぶだ」

◇供

○医者の顔を見ながら安堵の様子で「よかつたなあ」「一つ生だ丈夫」

○漁師に近づき「漁師、だいじょうぶだったなあよお、よかつたなあ」

○「大丈夫だあ、これで呪(まじな)いをしてやるから」

・両手で腰を少し起こせと言つぐさ。

◇供

・「呪いをして来れるそだから」言いながら漁師の腰に手を掛け腰を起こす

・うつ伏せのまま腰を上げる。

◇供

○医者の元に行き「お願いします」神座から御幣を下げて医者に渡す。

◇医者

・漁師の突き出した尻に向けて三回の御祓(おはらい)をし、顔正面で神掛かつ

◇供

・「呪いをして来れるそだから」言いながら漁師の腰に手を掛け腰を起こす

・うつ伏せのまま腰を上げる。

◇供

○医者の元に行き「お願いします」神座から御幣を下げて医者に渡す。

◇医者

・漁師の腰を捲き出したら尻に向け三回の御祓(おはらい)をし、顔正面で神掛かつ

◇供

・「なあーむくしゃくしゃくしゃくしゃくしゃ」

・神掛かつた様に御幣を素早くユスル。

○「おまけに九字を切つてあけよう」と、言ひながら御幣を脇に置きながら漁師

の着物の裾を捲きつて、両手を握り印契の仕種のまま、漁師の裾を被つて尻の

中に顔を埋める。

・呪文らしい言葉を発しながら、あたかも呪いをしているが如く、手と頭を微妙

にユスル。

◇供

・次第に静かになり、居眠りを始める。

・しばらく様子を見るが、有難い九字の動作とは異なる動きと氣づき、そつと着

物の裾を捲りながら。

◇医者

・「先生え、何あにをしてるんですか」

○びつくりしながら「うん、ああんまりいい気持ちでなあつうい、うとうとして

しまった」

○「でもなあ、まあ一ちよと不安だから、腰の具合を見るんで、少し起

こしてえ、踊りが踊れるかどうかちょっとやって見て来れ」

○「ねこじや、ねこじやをやりなさい」

○「はいハイ」言ひながら御幣を取扱ひに置き、漁師の腰に手をあてて。

◇医者

・刀を腰に差して、神座前で扇子で扇ぎながら二人の様子を眺めている。

◇供 ○「そおーとつ起こすからなあそおおーと」「どうだあ痛くないかあ」

○「腰を摩りながら静かに起き「なあーんだかこの辺がはばつてええなああ」

□漁師 ○「どおーし、大丈夫かあ」

○「ううーんなあーんとかあ大丈夫だあ」

△医者 ○「どれどれえ、それでは腰の具合を見てやるから猫じや猫じやをやりなさい」

○「さああ、やろおう」

△医者 ○「扇子を開いて一緒にねこじやを踊る。踊り終わつて二人に。」

○「ああーあ 成功だあ、これでえ大丈夫だあ、一、生おおもんだから」

×二人 ○「安堵の様子で首を何度も振りながら」

○「良かつたよかた」「ありがとうございました」

△医者 ○「やああ、俺はこれで、家に患者が来ているかも知れねえから、これで帰るからああ、なあ」

○「漁師に向かつて「それじやあ俺は先生を送つて来るからあ、そこで休んでてくれやあ」漁師領手下風に座る。――神楽囃子・仁羽。

△医者 ○「手踊りしながら一周して幕に消える。」

○「俺の後ろからの手踊りであるが、扇子で扇きながら診察鏡を小脳に抱えて、腰を屈めて顔を横に振りながらの腰旋としたい振りで消える。」

○「軽快に手踊りしながら登場し、「一遍舞つて。」

○「疲れた様子で、扇子で扇ぎながら「漁師漁師、先生を送つて来たぞお、ひでええめにあつたなあ」

○「立ち上がつて「どおーもどおおもー苦労だつたなあ」

○「じじやあひでえめにあつたから、進あ所に移動してもう一度釣り直しそおうかあ」上手の釣り竿を採り漁師に渡す。――神楽囃子・仁羽。

○「受取ながら「ここはひでえめにあつちやつたから進ああとところ行こう」

□漁師 ○「さあーいこおう」

×二人 ○「下手から手踊りしながら顔廻りで上手まで踊つて来る。」

○「閉じた右手の扇子で指しながら、お供に。」

○「あつれえ、おおおんなに川があるぞ、よし、向こおえ渡ろう」

△供 ○「不安そうに「そおおだなああ」

○「自信なさそうに「どおおだがなあ」

◇供 ○「供

□漁師 •「三歩さがつて、体を前後に揺すつて弾みをつけながら。」

○「じやあ俺は向こおえ飛ぶからなあ」「一、二の、三あんでなあ」

○「おえに合わせて軽く飛ぶ。」

○「おおおい、お供もこつちえ飛んで来いよなあ、一、二の三でなあ」

○「扇子を腰に差して、何度も体を揺すつて、リズムに乗つて飛ぼうとするが、ヨロケルだけで飛べない。」

○「よわつたなあ俺にはこの川は飛べないやあ」

○「右手を横に振りながら「おおおお、無理だなあ」

○「よわつたなあ」

○「川を覗き、全身で弾みをつけながら「もおお一回やつて見るかあ」

○「おおおよしよし」もおう一回やつて見るかあ」

○「だつあめだなあ」ガッカリした様子。」

○「笛の音ともに試みるが飛べない。」

○「だつあめだなあ」思案の様子。右手を拳骨にして左手の手の平

を打つて「よおお」といことがあるぞお」

○「俺がも「一回そちえ飛ぶからなあ」言ひながらリズムに乗つて弾みを付け

て離なく飛び越える。」

○「持つた釣り竿の糸をほぐし、糸の先をお供の首に巻きながら「いいかあこれを

なあ、首に巻いて俺が向こうに飛んで、一、二の三あんで引つ張るから、そ

したらお供が飛ぶんだおバアーと引っ張るからなあ、いいかあ」

○「あー良かつた、ううん」

○「リズムに合わせて離なく飛び越す。お供の首に巻かれた糸がビーンと張られて竿がしなる。」

○「リズムに合わせて飛ぶが「ドボン」と川に落ちる。」

○「わあい、助けてくれええ。」

○「下手から手踊りしながら顔廻りで上手まで踊つて来る。」

○「あつれえ、おおおんなに川があるぞ、よし、向こおえ渡ろう」

△供 ○「不安そうに「そおおだなああ」

○「自信なさそうに「どおおだがなあ」

◇供 ○「供

○「正面で、右足を折つて左膝に乗せ、右手で扇子を胸に抱えたながらの片足立ちで

ヨロケながら釣り始める。

◇漁師
・大きな石を抱えて来ては投げ、足で水を搔き回しては邪魔をする。
◇供
○釣り場を下手に移り、怒ったように「おおおおお、漁師いそおんなことしたらあ逃げちゃうじゃねえかあ」

◇漁師
・代わって釣り始める。何度も釣り場を変える。

◇供
・出来わらはずの片足立ちでの釣り姿勢。漁師の動きに合わせて場所を変える。

◇漁師
・出来奥に釣り糸を投げ、肩に竿を担いで正面を向く。やがて。

○「ああああ、お供お供おでえつけえんが掛かつたあ」
○「手を貸してくれええ」

◇供
○「よおーしいまつてろよお」

・駆け寄って漁師の後ろに廻って竿を担ぐ。漁師は扇子を腰に収めて、二人で獲物を中央に引き寄せる。

◇漁師
・弾みで竿を離してしまう。何やら得体の知れない物が釣れている。

◇供
・驚いた様に「おおおおお、なんだなんだ。なんだあこれは」震えながらも、興味あるように、ウロコロしながら遠巻きに様子を見る。

◇漁師
・大布をスッポリ剥って、ひざまで手を床にしてカスカに動く。

▽漁師
・始の後ろから、竿を使って恐る恐る大布を頭の方に捲りながら外す。
・竿に引っ掛けた大布を後方に寄せながら、すかさずノケゾル様にして三三歩しりぞく。

◇供
○驚いて「わああああタコだあ、タコタコ、タアコオだああ」

▽漁師
・膝をついたまま、驚いた様にお供と漁師を交互に睨むようにして、左右に体をひねる。時折頭を下げたり上げたり生きているかの如くに。

◇供
・タコの足は、頭や体を上下左右に躍動を付けると自然な動きになる。

◇供
○逃げまどうように「わあああつむけええ」「わああまつすぐむけええ」
・悲鳴を発しながら頭を起こす。

▽漁師
・竿を持つて「よおおしつ、叩いてやれえ、よいしょお」——笛の「羽」。
▽漁師
・叩かれて頭を下げる。直ちに頭を上げてキヨトンとした様子で左右に振る。

◇供
・驚いた様にのけぞりながらも恐る恐る近づき。
・悲鳴を発しながら頭を起こす。

▽漁師
・ひざまずいたまま頭を叩く。
・再び叩かれては、頭を下げる、直ちに頭を上げてキヨトンとした様子で左右に

振る。——漁師、供が二回ずつ行う。

◇漁師
○「お供、竿を貸して来れえ、もおいくん叩いて見らあ」
○竿を振り上げながら、話しかけるように「おいつ、タアコオ」

▽漁師
・頗いて大きくコックリする。

◇漁師
○「あれええ、このタアコオ、コックリしたぞお、言葉がわかるんかなあ」
○「そおおだなあ言葉がわかるどお」

◇漁師
・近づいて覗き込みながら「おい、タコ、何か芸が出来るかあ」
・頗いて大きくコックリする。

◇供
○「おおおお、芸が出来るかあ」
○「さあああ踊らおう」言ひながら三人で踊り始める。

◇供
○「よおおお、山寺が踊れるんじや一緒に踊らおお」——神楽囃子・山寺踊り。
○「ねぐるみ内の人間は、全カブリから抜け出て、違う様にして素早く出幕に現れる」とことにより、観客から後方の視線を遮る事が出来る。

◇供
・ねぐるみ内の人間は、全カブリから抜け出て、違う様にして素早く出幕に現れる。

◇漁師
○「いいのおおおつたから、そろそろ旦那所へ帰ろう」
○「そおおだなあ、それじゃこのタコを竿に説く」

◇供
・向き合つてタコの足を竿を握り、笛の音とともに竿を担ぎ上げる。

◇漁師
・歩こうとしたが背中合わせのため、引張り合いになりヨロケル。

◇供
○「あれええ、これでは駄目だあ俺はアツチツへ行くぞお」

◇漁師
○「ああああちだな」言いながら指を指して向きを変える。

◇供
・笛の合囃とともに竿を担ぐが今度は、二人が向き合つてしまふ。

◇供
・互いに歩もうとして押し合いになりヨロケル。

◇供
○互いに顔を見合せ「これでは駄目だ、ちゃんと向きを決めよう」言いながら

○「いいかあ漁師、あっちだどおあつちえ行くぞ」腕を伸ばして下手方向を指す

七草・ななくさ。右天
左天右ツ左ツ右天
左天右ツ左ツ右天
右天右ツ左ツ右天
左天右ツ左ツ右天
右天右ツ左ツ右天
左天右ツ左ツ右天

鈴舞・すずまい。右天
左テ右ツ左スツ右天
右天右ツ左スツ右天
左天右ツ左スツ右天
右天右ツ左スツ右天
左天右ツ左スツ右天
右天右ツ左スツ右天

三拍子・みつびようし。右天
左天右ツ左ケ右天
左天右ツ左ケ右天
右天右ツ左ケ右天
左天右ツ左ケ右天
右天右ツ左ケ右天
左天右ツ左ケ右天

六方・ろっぽう。右天
左テ右ツ左ク右ス
左テ右ツ左ク右ス
左テ右ツ左ク右ス
左テ右ツ左ク右ス
右天右ツ左ク右ツ
右天右ツ左ク右ツ
右天右ツ左ク右ツ
右天右ツ左ク右ツ
右天右ツ左ク右ツ
右天右ツ左ク右ツ
右天右ツ左ク右ツ

仁羽・にんぱく。右天
左テ右ツ左ク右ス
左テ右ツ左ク右ス
左テ右ツ左ク右ス
左テ右ツ左ク右ス
右天右ツ左ク右ツ
右天右ツ左ク右ツ
右天右ツ左ク右ツ
右天右ツ左ク右ツ
右天右ツ左ク右ツ
右天右ツ左ク右ツ
右天右ツ左ク右ツ

二度目から。右天
左テ右ツ左ク右ス
左テ右ツ左ク右ス
左テ右ツ左ク右ス
左テ右ツ左ク右ス
右天右ツ左ク右ツ
右天右ツ左ク右ツ
右天右ツ左ク右ツ
右天右ツ左ク右ツ
右天右ツ左ク右ツ
右天右ツ左ク右ツ
右天右ツ左ク右ツ

仁羽の鶯の振りかた。右天
左テ右ツ左ク右ス
左テ右ツ左ク右ス
左テ右ツ左ク右ス
左テ右ツ左ク右ス
右天右ツ左ク右ツ
右天右ツ左ク右ツ
右天右ツ左ク右ツ
右天右ツ左ク右ツ
右天右ツ左ク右ツ
右天右ツ左ク右ツ
右天右ツ左ク右ツ

ハヤの場合。右天
右ツ左ク右ツ左ク
右天右ツ左ク右ツ
右天右ツ左ク右ツ
右天右ツ左ク右ツ
右天右ツ左ク右ツ
右天右ツ左ク右ツ
右天右ツ左ク右ツ
右天右ツ左ク右ツ
右天右ツ左ク右ツ
右天右ツ左ク右ツ
右天右ツ左ク右ツ

コンコンチキチココ
ココチキスココン
ココチキスココ
ココチキスココ
ココチキスココ
ココチキスココ
ココチキスココ
ココチキスココ
ココチキスココ
ココチキスココ
ココチキスココ
ココチキスココ

鶯(かね)は本来シヨウであり、楽器名は
「ねすり」で、樂人は鶯(すりがね)と称する。
「ねすり」と称する。



宮比神楽
桐生市広沢町間の島、諏訪神社遷宮報告祭
依頼奉納上演 白翁・黒翁、淨めの舞



賀茂神社神楽殿



賀茂神社太々神楽、宮比神楽
稽古状況



賀茂神社太々神楽、宮比神楽
貴重演目 肩紙拾い三番叟



宮比神楽 依頼奉納上演
桐生市浜松町白山神社 種蒔きの舞



賀茂神社太々神楽
宮比神楽奉納上演前の五囃子演奏

生念仏

伝承地

桐生市浜松町二丁目、主として第五町会に伝承されている。当地は、桐生市街地の南部に接している。旧道沿いに商店が立ち並び街区が形成され、幹線市道沿いにスーパー・コンビニ・飲食店。東端は、桐生で、もっとも美しい道路と評されているコロナバス通りと、高架のJR両毛線が走り、高齢化社会を先取りした都市型公園の、新川バラ園も設置されている。市営高層住宅も集合し、過半は区画整理された住宅地で、景観も美しく、住環境に恵まれた地域である。

二 上演の時期及び場所

娘美事が微塵もなく、葬送儀礼に伴って、供養のみを念頭とした、伝統習俗で、葬儀発生時に行われる。

葬儀・告別式・出棺とともに、葬家の座敷には、後飾り祭壇が整えられる。納骨に立ち会った近親者の、お清め（精進落とし）が済むと、仏教儀式としての葬儀が終了し、自然散会となる。その後、四季にかかるわらす、六時半頃より生念佛が開始される。

約二時間の念佛申しは、葬儀当夜から七日（四十九日）前夜までの連夜たが、近年は、住宅事情や都市化などの社会的な変革から、初七日前夜までの連夜と、お棚上げ（三十五日と四十九日の場合がある）前夜の実施に変容している。しかし、組合参加でなく、葬家家族のみによる生念佛は、伝統どおりに、お棚上げ前夜まで、念佛を鳴らさず、静かに行う例が多いと聞く。このことは、鉦の音を聞きつけ、参加を促す結果となり、近隣者に迷惑がかからない奥ゆかしい配慮である。一周忌や三回忌前夜を行う町内もある。

三 行事の次第・構成・演目・芸態等

(1) 次第・構成 葬家の意向にしたがい、隣組の采配によって、生念佛が開始

されるが、生念佛の構成上、一般的な後念佛や、追かけ念佛は附の題である。念佛申しの集团や、講組織は存在しない。地域住民として「情・じょう」による「ユイ」的な葬送儀礼で、生念佛への参加そのものが、身近で自然な社会参加である。人生経験や地域への貢献が、この種の「格・箔付け」言い換えれば「枯淡の味」となって、早い人で四〇・五十歳代には「先達」格に認められる。また、ユイの参加とはいえ、単なる義理や返礼のつきあいから、一戸で一人の参加ではなく、故人の、生前の人柄と、地域や社会への貢献度によって、一家総出の参加も少なくない。したがって、全体的な念佛申しの規模は、四十人から八十人位で、葬家によつて差異が生じる。

後飾り祭壇前に先達役（導師と言ふ町内もある）が静座し、続いて念佛衆（先達格四～五人）が端座する。次いで遺族と隣組の者約二十人が正座する。座敷の関係から座れない近親者と、隣組の参加者は、庭先に立つて参加する。

(2) 演目 ① 称名念佛。② 娘婆と冥土。③ 西の山。④ 赤城山。⑤ 鷲。⑥ 白つじ。⑦ 葬界長者。⑧ 花和讀（初七日用）。⑨ 花和讀（四十九日用）。⑩ 賽の河原（子供用）。⑪ 賽の河原（男用）。⑫ 賽の河原（女用）。⑬ 玉椿。⑭ 高野山（初七日用）。⑮ 高野山（最後の念佛・十三仏直前用）。⑯ 御詠歌。⑰ 十三仏。

(3) 芸態 先達の打鉦（念佛鉦）とともに、一齊に全員の齊唱（申志）が開始される。つまり、先達役が詠題や句頭部を申して（小節歌つて）そのリズム・曲調に、他の者が、全ての調子を合わせるような洗練性はなく、旧行の様式がうかがえる。

念佛・念佛踊り、風流踊り…………多くの場合、宗教的な愉悦陶酔から、踊躍歡喜の乱舞状態が、風流性に発展して、彼岸や盆の行事と併合する。それらの本旨は、自らが助からんとする自己救済である。生念佛の場合は、供養と哀悼、そして追善のみが貫徹している。自己救済や娛樂の趣は微塵もない。

風流性が色濃い念佛は、純じて長時間をする場合が多いが、生态念佛は、それらの要部のみを選述して、ストーリー性を持たせた短い念佛を、一遍三遍繰り返し申して、遺族や参加者が、意味を理解出来るように工夫されている点が最大の特徴で、一種の「語り念佛」と意味付けられる。

かつては嫗念佛・翁念佛の痕跡も感じとれるが、現在は若手（四十五～五十歳代）の先達も大成しており、曲調に音楽性が加味されている。總的には女人念佛のおもむきであるが、男性（元老格）が先達を務める場合もまれにある。

四 組織

葬家の意向によって隣組長の采配による運営は、葬儀当夜のみで、翌日より、念佛の自主的で自然な「人情」による運営で行われる。参加者も、格別な取決めはないが、伝統習俗と言えども、あきらかに、宗教と密接な関わりが深いため、他の宗教や他宗派の無狂の信者は、自主的に参加しないし、また参加を呼びかけない自然な統制がとれている。

周囲から暗黙裏に認められて、先達役を務められる念佛衆は、すべての念佛を把握し、内容を熟知していなければ務まらない。念佛詠題（曲種）は各種あって、故人にあわせて詞章を変えたり、曲調を変化させることによって男性用、女性用、子供、幼児……さまざまな対応が、即座に、順応可能な知識が求められる。

地域社会における人望と統率力が必要で、その境地に達するには、なによりも経験が必須であるが、葬儀発生時の会得が、唯一の習得・伝承手段であり、個人差が顕著となる。現在、先達格の人は、四十歳代から七十歳代まで、女性を中心として十人ほど存在し、これらの中から、二人揃えば「生念佛」が成立する。

五 由来及び付近の類似芸能

江戸時代「太田大光院より習い覚えた」と、のみ伝承されているが、各地の念佛に比し、内容・実体において、あきらかに異質であり、地域性が色濃く加味されて定着した感が強い。

人の葬送という尊嚴な儀礼参加は、幼少期から自然な社会参加であり、地域の伝統を自然会得しながら成人し、やがて責任ある立場で、全体を差配できる先達に到達する。他に類例を見ない希有な習俗が、百年余りも変容ないまま、旧行の様式で伝承された現実は、人情豊かな地域性そのものである。

多くの民俗芸能は、昭和二十年を境に廃絶を余儀なくされた。当地は、昭和二十

一年、カスリン台風による大水害を蒙り、栄町に建設された水害罹災者住宅、四十六戸の被災者は初めとして、未曾有な災禍から速く復興された住民の、連帯意識と篤い人情のみが、伝統の継承に寄与している。今調査は旧栄町を主体とした。

台風災禍は、人命安否ばかりでなく、墓地も流出した。多くの場合、念佛は、講中を組織して、象徴的な石碑を造塔する例が多い。当地においても、かつて造塔されたが災禍によつて流出されたものと思われる。地域内に点在する墓地や路地、関係菩提寺も精査したが、それらは彼見できない。

六 記録文献

昭和三十年代までの念佛申しは、嫗・翁格の念佛衆が、聞き覚えた念佛を申して、いたが、変容を危惧した中島園吉氏は、書き留めた詞章を公表した。何人かがそれを書写して、さらにはコピーした念佛帳が散見できる。内容的に多少の差異があり、そのことが、町内ごとの地域性となつて定着しているが、あきらかに誤写によるもので、一行、一ページがそつくり欠落しているものも存在する。

七 特色・所見

葬儀後の、いわゆる後念仏・追かけ念佛は、十三仏・融通念佛・組合念佛など各地で習俗として行われている。しかし最近では、伝統を尊重する山間部で、最も簡単な十三仏すら、簡素化の大儀から中止する地域も少なくない。伝統習俗を軽んじる現況のなかで、生念佛における十三仏は、まったくのつけたりにすぎない。生念佛の内容は、「和讃」そのものであるが、各地の和讃特に地蔵和讃は、長文長時間で、なかには百番余にも達する例もある。生念佛は、それら和讃の要部のみを選述して、短く簡明なストーリー性にまとめて、二遍三遍繰り返す手法となつていて。そのため念佛の意味内容が、容易に理解できる。参加者、特に遺族・近親者の悲しみが頂点に達して、嗚咽の極地となる。單に、故人への追善供養ばかりでなく、残された者への、哀悼と励ましが、思いやりの隣人愛となつて、心丈夫に勇気づけられて、今後への立ち直りに直結する。しかも、葬儀当夜ばかりでなく、初七日前夜までの連夜に大きな意義がある。

価値観の変化、人情の希薄がもたらす弊害が叫ばれる現在において、近隣者の葬送に、夜にわたりて、生念佛が申される現実が貴重である。特に、新住民である市営住宅居住者も、地域の伝統習俗に、自然に参加する姿が印象的であった。

宗門や教団が、仏祖高僧の恩徳を讃えた和讃や御詠歌は、絶じて難解である。仏教歌謡に仕上げて、わかり易いとされる和讃が少なくないが、生念佛の和讃は、俗歌間に完成させている。曲調も音域が狭く単調なリズムで、歌詞カードさえあれば、俗謡でも自然参加が容易である。そのためか、唄格の哀愁ある枯れた響きが次第に薄れて、声量豊かな歌謡調念佛に、変容が危惧される。

（平塚 貞作）

平成七八年度群馬県民俗芸能緊急調査 ┗ 詳細調査票追記分
生念佛（なまねんぶつ）歌詞 東部地区調査委員 平塚貞作

◇ 家婆と冥土のその間に
接婆と冥土のその間に
錢でも金でも開門が三つござる
金六字でさらと聞く
南無阿弥陀

△西の山
眞命頂礼赤城山
西のお山の弥陀如来
雪には罪険はないけれども
吾身が罪険で拝めない
阿弥陀仏

△赤城山
眞命頂礼赤城山
西のお山の弥陀如来
雪には罪険はないけれども
吾身が罪険で拝めない
阿弥陀仏

△家婆と冥土のその間に
接婆と冥土のその間に
錢でも金でも開門が三つござる
金六字でさらと聞く
南無阿弥陀

△このお念佛は冥土に行く道開け念佛

△赤城山
眞命頂礼赤城山
西のお山の弥陀如来
雪には罪険はないけれども
吾身が罪険で拝めない
阿弥陀仏

◇ 墓頭
眞命頂禮
墓頭
お伊勢の御庭は霧けれど
梅の木小枝に宿をとり
梅の針から朝日さす
白つつじ
夜明けにほけきよう
△白つつじ
眞命頂禮
白つつじ
錢の針から朝日さす
夕日のさすのは母のため
母のためにと挙むれば
拝めば其の家は
南無阿弥陀
仏

△樂界の長者
眞命頂礼
天三の
六尺三分に欲かけて
六尺三分に見て渡る
糸より細くて渡れない
上には青鬼現れて
落れば否もうと舌を出す
向う河原を眺むれば
助けたまいや釈迦如來
汝の命まだたりぬ
南無阿弥陀仏

△花和讃
眞命頂礼花和讃
無情の風に誘はれて
明日は早くも一七日
余りの心の寂しさに
寺の書院に腰を掛け
開けし蓮華が散りもせず
佛の蓮華の散るを見て
想いは同じ蓮華草
空寂しく見上げれば
夜中にほけきよう
△白いつじにや錢が成る
朝日のさすのは父のため
母のためにと挙むれば
繁盛する
南無阿弥陀
仏

△花和讃
眞命頂礼花和讃
無情の風に誘はれて
明日は早くも一七日
余りの心の寂しさに
寺の書院に腰を掛け
開けし蓮華が散りもせず
佛の蓮華の散るを見て
想いは同じ蓮華草
空寂しく見上げれば
夜中にほけきよう
△花のようなる子を持ち
一日二日と日も過ぎて
日には過ぎても友もなく
村の寺に立ち寄りて
お池の蓮華を眺むれば
佛の蓮華の散るを見て
想いは同じ蓮華草
空寂しく見上げれば
夜中にほけきよう

鳥さえ鳴
に帰るのに

吾が身の帰る家もなく
一人寂しくとぼとぼ

余りの心の淋しさに
二足行つては振り返り

一足行つては振り返り
二足行つては立ち止まり

通りの野山を眺むれど
頬の子の声もなく

可愛い孫の声なし

假寝の宿も西車
巡礼して

吾家の安泰願います
南無阿弥陀仏

頬の子の声もなく
あまりの心の淋しさに

松の根元に腰下ろし
つくづく眺めてほろほろと

◇花和讃
花和讃

三十日でお棚上げの場合は印で明日は早くもお棚上げと申し
る印から省いて次の月日に進む。

落ちる涙をそおつと拭き
助けたまいや高野山

西のお山に手を合わせ
西のお山に手を合わせ

三十日も早すぎて
月日は立てども友もなく

寺の書院に腰を掛け
花のようなる妻を持ち

十三仏の直前に申す
最後に申す念佛

三十日か四十九日に申す念佛
南無阿弥陀仏

三十日でお棚上げの場合は印で明日は早くもお棚上げと申し
る印から省いて次の月日に進む。

十三仏の直前に申す
最後に申す念佛

三十日も早すぎて
月日は立てども友もなく

明日は早くも四十九日
あまりの心の寂しさに

△印～△までは、娑婆と冥土に同じ。
△印～△までは、玉椿と同じ。

三十日も早すぎて
月日は立てども友もなく

夕空静しく述上ければ
伊勢散り行く我が身とて

弘法大師の仰せには
願いばかなう安樂に

三十日も早すぎて
月日は立てども友もなく

開けし蓮華が散りもせず
伊勢散り行く我が身とて

何故に後生を願わない
とかく此の世は借りの宿

死ねば一夜も置かれないと
願いに冠頂いて

三十日も早すぎて
月日は立てども友もなく

夕空静しく述上ければ
伊勢散り行く我が身とて

死して冥土に行く時は
送りの人は多けれど

死ねば一夜も置かれないと
願いに冠頂いて

三十日も早すぎて
月日は立てども友もなく

夕空静しく述上ければ
伊勢散り行く我が身とて

死して冥土に行く時は
送りの人は多けれど

三十日も早すぎて
月日は立てども友もなく

夕空静しく述上れば
伊勢散り行く我が身とて

死して冥土に行く時は
送りの人は多けれど

三十日も早すぎて
月日は立てども友もなく

夕空静しく述上れば
伊勢散り行く我が身とて

死して冥土に行く時は
送りの人は多けれど

三十日も早すぎて
月日は立てども友もなく

夕空静しく述上れば
伊勢散り行く我が身とて

死して冥土に行く時は
送りの人は多けれど

歌詞内容からか好評な念佛で、葬儀の要領によつて、葬儀當初

初七日前の日の念佛。

△印～△までは、娑婆と冥土に同じ。
△印～△までは、玉椿と同じ。

△印～△までは、娑婆と冥土に同じ。
△印～△までは、玉椿と同じ。

△印～△までは、娑婆と冥土に同じ。
△印～△までは、玉椿と同じ。

△印～△までは、娑婆と冥土に同じ。
△印～△までは、玉椿と同じ。

三十日も早すぎて
月日は立てども友もなく

夕空静しく述上れば
伊勢散り行く我が身とて

死して冥土に行く時は
送りの人は多けれど

△印～△までは、娑婆と冥土に同じ。
△印～△までは、玉椿と同じ。

△印～△までは、娑婆と冥土に同じ。
△印～△までは、玉椿と同じ。

△印～△までは、娑婆と冥土に同じ。
△印～△までは、玉椿と同じ。

三十日も早すぎて
月日は立てども友もなく

夕空静しく述上れば
伊勢散り行く我が身とて

死して冥土に行く時は
送りの人は多けれど

△印～△までは、娑婆と冥土に同じ。
△印～△までは、玉椿と同じ。

△印～△までは、娑婆と冥土に同じ。
△印～△までは、玉椿と同じ。

△印～△までは、娑婆と冥土に同じ。
△印～△までは、玉椿と同じ。

五つとならない幼子が

死し出の旅路をとぼとぼ

河原の小石を寄せ集め

一つ積みては父のため

三つ積みては故郷の

念佛唱えて拌むれど

地獄の鬼が現れて

また積め積めと怒鳴られて

紅葉の様なる手を合わせ

あちらこちらと逃げまどい

父の声かと駆け登り

母の声かと駆け降りて

此娘や彼娘と捲すれど

捲し飛れた幼子は

落ちる木の葉で身を包み

泣く泣く見る見れさよ

南無阿弥陀仏

△玉椿

帰命頂礼

玉椿

七重に咲く花

八重に咲く

何も志願はなけれども

念佛勧めに八重に咲く

天から百代の花が降る

花では御ざら帝院六字

極楽淨土の蓮華花

△御詠歌

帰命頂礼

御当家の

一に香炉う二にお花

上げて念佛唱えれば

位牌の前を眺むれば

三にしきびの枝折りて

十三仏の御影さす

無情の風に誘はれて

賽の河原に立ち寄りて

是れにて向の塔を組み

二つ積みは母のため

兄姉我が身の向にして

日も暮れごとなるなれば

積みたる塔を押し崩す

余りの怖さに身を縮め

お許したまえと泣きながら

柳の吹く風音聞けば

谷間の小川の音聞けば

手足を血しおで染めながら

恋しい父母の影もなし

落ち葉の上に泣き崩れ

樹の根を枕にしくしくと

両親様には極楽江

導きたまえや地蔵尊

帰命頂礼御当家の

枝は九重花は八重

西に向かつてほうほけきよう

さぞや佛も樂しかろう

墓所に植えおく木木梅

中なる小枝に鶯が

も樂しかろう



生念佛



生念佛先達役と念佛衆



生念佛詠唱状況

龍舞賀茂神社萬燈

まんとう

太田市の賀茂神社に伝わる。賀茂神社は、太田市街の東に位置し、龍舞集落のはば中央に鎮座し祀られている。太田市金山祭跡公園山頂から東を望むと農村集落の中に杉木立の社があり賀茂神社の裏を見る事ができる。

上演の時期及び場所

祭日は「龍舞賀茂神社萬燈手引」によると旧暦四月酉の日であつたが、その後第二次世界大戦の戦中戦後を通じ約三十余年中止されていたが、昭和四十五年に復活以後四月十五日に制定され今日に至っている。

祭りの主役である萬燈は同日夕刻から賀茂神社参道から各耕地毎に社殿に向って振り込むもので、参道、神社境内と廣範囲な祭礼となる。尚附帯行事として「稚兒行列」と「代々神樂」も当日奉供される。

行事の次第・構成・演目・芸態等

(1) 祭礼行事全体の次第 賀茂神社春季大祭は、前夜祭と本祭りの二日間にわたる行事である。などを祭典の一週間前に「行司会議」を開催する。賀茂神社春季大祭に伴う萬燈行灯予定の詳細打合せ会議で、各耕地から二名の行司出席と計二十名による会議となる。

前夜祭

①午前六時 織り立て終了後解散

午前中に供物・宝物を本殿に運搬・飾付を行う。

②午後四時 各耕地で仕上った萬燈を神社拝殿前に奉納。

萬燈の奉納順序

(順序行動は祭事発祥の天保八年以降不動である。)

一、下耕地 二、上耕地 三、上宿耕地 四、原耕地 五、裏屋敷・神明・落

打耕地 六、石神耕地 七、高原耕地 八、龍舞一区 九、龍舞二区 十、中宿耕地 十一、権現耕地 十二、上屋敷耕地 十三、西原耕地 十四、大萬燈 全萬燈が集合すると神社總代・行司が祭りの無事を祈願賀茂神社宮司からお祓を受けれる。

③午後五時 前夜祭終了

④午後六時 各耕地毎に行司の指導により萬燈格納

⑤午後八時 泊番(總代一名 年番五名)翌午前七時迄本殿に詰める。

本祭り

①午前六時 足利市矢場より神楽道具一式運搬

②午前七時 泊まり番宿宅 社務所に一名残る

③午前八時 總代集合。神樂師迎え。受付、接待他各係準備

④午前十時 公民館に於て稚兒の支度、行列準備。神樂開始。

⑤午前十一時 公民館より稚兒行列出発。

⑥午前十二時 祭典。記念写真。神官、總代、来賓昼食。

⑦午後一時 萬燈十三基 入場。

⑧午後二時 萬燈神社より出発、公民館西通りの指定場所に展示、休憩、夕食

⑨午後六時 萬燈振込開始。一般車両等交通規制。

⑩午後九時 萬燈振込終了。萬燈実行委員長、總代長謝辞。

⑪午後十時 分担作業終了後、神樂師送りが戻った時点での手打ち。

毛三山を象った（はりこ）の島台を乗せ島台と燈籠の間から長い竹ヒゴを傘の骨のように四方に垂らし、島台の上に、桜の花の枝振り（造花）を配し島台の中に人形を飾り、また正面の柱と燈籠の間に扇形の額を掲げたもので、重さ凡そ大萬燈で六十キロ位 小萬燈で十五キロ位である。

萬燈の呼び方は大萬燈を大人萬燈とび、小萬燈を小供萬燈とよんでいる。大萬燈は重いため大人が担い、小萬燈は小学校五年生位、或は女子生徒でも担えるもので小供萬燈と云っている。

本祭りの日の午後一時各耕地の萬燈が賀茂神社境内に集合、午後三時神社を出発し休泊公民館西通りの指定場所に移動、一番下宿耕地から十三番西原耕地まで順次に萬燈をならべ待期、午後五時を過ぎると各耕地の役員（行司）と子供達が集まつてくる。午後六時一度実行委員長の合団で一番から神社へ向つて出発する。各耕地の行司は实行委員の指示に従い前進、停止などの行動を子供達に伝える。また行司は萬燈を担う子供達の順番と交代の指示と、他耕地の行列の接近しすぎた場合の制御、争いの仲裁など全て行司一人でさばいて行く。時折子供達は家族の声援を受け真剣に担う様はいじらしいくらいである。長い参道を二時間三十分かけて振込み鳥居に到着すると、神楽の囃子が一段と高く祭囃子にと代る。

萬燈十四基が賀茂神社境内に到着、これをもって萬燈振込終了となる。萬燈が境内を回るよう拡がると、その中央に大萬燈が進み出て参列の力持の人達が変る変る担つて力を競う。その頃になると祭り囃子が一段とええて来る。ようやく大萬燈の振込が終ると萬燈実行委員長と終代長の謝辞で萬燈の振込みを終了する。神社境内から萬燈が各耕地に引揚げ、足利矢場に神樂師を送つて行った係が戻ると役員全員参列の中お手打をして大祭終了となる。

芸能としては、萬燈の心棒を両手に持ち萬燈を振るよう回転させながら上に放り投げるようにしてから手元に引きもどす。「ヨイショ」という掛け声をかけながら一歩進むたびに動作と掛け声を繰りかえす。同じ耕地の子供同志で交代しながら振込みを行うのである。

(3) 役名・扮装・楽器 萬燈の振込みに於ては实行委員長と各耕地二名の行司が仕切る。实行委員長は午後六時の出発から午後九時神社拝殿到着までの制限時間内

に振込みを終了させるという重用な役目をもつ。制限時間内ということは神社拝殿までの到着を早過ぎず、遅すぎず誘導しなければならない。また行司は实行委員長の脇役に徹した役割を担うことで運営できる。

扮装は役職全て私服である。総代等は一応礼服であるが動きの激しい振込みの実行委員長、行司、担い手は軽装で足は運動靴である。

(4) 組織 龍舞萬燈保存会が中心になって行うが、その年の直接萬燈にたずさわる役員はカマ番・年番・子供会で形成される。

出演者は十三耕地を一区、二区、三区に分け、そこの住民であれば誰でも参加できる。

平成七年度に於ける保存会は、会長、丸山武三郎氏、副会長、須藤準三氏、小内賢一氏、小林一茂氏、实行委員長、中島仲次氏、会計、茂木盛二郎氏、武藤幸一氏、監査、中島幹二氏、森田茂氏、事務局、太田晋次氏である。

尚萬燈を製作する人を「萬燈屋」とよんでいる。列举してみると、

元祖 篠原喜太郎（天明四年～弘化四年）――二代 篠原志馬蔵
初代 津久井寅三郎――二代 津久井徳次郎

初代 近藤愛次郎――近藤千代次

初代 武藤佐一――二代 武藤競――三代 武藤源蔵

初代 飯島巳一郎――二代 飯島邦勇

中島仲次 森田茂 小林勝美

以上の人達が天明四年から平成まで萬燈屋として活躍した。

(5) 記録文献

龍舞萬燈制作伝統手順 丸山武三郎

龍舞萬燈 中島仲次 森田茂

(6) 特色・所見

賀茂神社大祭は昼と夜と異なる祭が行われるということである。夜の萬燈振込みをメインに午前の稚兒行列、そして午前から午後にかけて日中の神樂と多様な催しが奉供されるのは珍しい。しかしどの一つをとっても祭の奉供として成立する

のに三種共完全なまでの催しであることは祭りの内容として県下でも稀有なことで
あろう。第二次大戦後以降本格的な隆盛をみた龍舞加茂神社萬燈はやはり三位一体
となつての催しがあって初めて伝統が受け継がれて行くのであろう。

(川村
勝保)



萬燈神社境内入場展示 (PM 1:00~3:00)



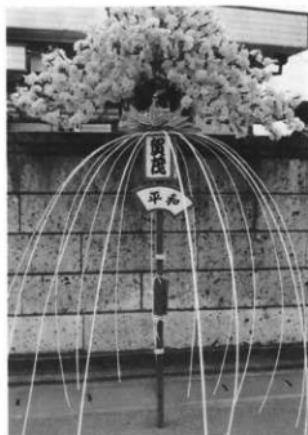
小萬燈参道集合町内毎 (PM 3:00~)



参道の大萬燈



大萬燈展示



参道の小萬燈



小萬燈と行司の提灯

かみみばらし 上二林のささら

一 伝承地

館林市上二林町の雷電神社に伝わる。

二 上演の時期及び場所

雷電神社の秋季例大祭が旧暦の八月十五日で、それに合わせてささらが奉納される。現在では大祭は旧暦の八月十五日に近い日曜日に行われる。

五穀豊饒に感謝し、厄除神を追い払う神事のため、不作の時は奉納されず、旧暦八月四日の初寄合により奉納するかどうかを決定する。奉納は、雷電神社の祭典式終了後の午後一時頃から行われる。最初に隣接する雷光寺で行列を整えて出発し、雷電神社の社殿前で奉納される。その後、地区内の八坂神社や村境の十九夜堂（現在は本郷集会所）をまわって奉納し、最後に雷光寺に戻つて奉納する。

三 行事の次第・構成・演目・芸態等

(1) 祭礼行事全体の次第　旧暦八月四日の夜に初寄合が行われ、ささらを行う若衆達が神社拝殿に集まり、ささらを奉納するかどうかを決める。奉納することが決まれば、若衆達は区長と氏子総代等村役達が集まっている神社社務所に使者を立てて「今年は豊作のようですから是非お祭りをさせてください。」等と言う。村役達から許可が出ればささらを奉納することが決定する。これを俗に「お祭りができた」と言う。そして俗にいう「フソロイの太鼓」を奉納し寄合を終了する。

若衆達はそれぞれささら方（獅子、笛）、棒方（花方）とに分かれ、旧暦八月五日より稽古や花造りを始める。祭礼の前日（十四日）は、早朝に四本の練を立て、夕方、若衆達は雷光寺に集合して神社拝殿前まで行列し、しめ飾りの中で棒・太刀等の剣術試合と獅子舞を奉納し、会祈りの儀を行う。祭礼当日（旧八月十五日）は祭典式終了後、行列を整えて雷光寺を出発する。行

列は区長、氏子総代を先頭に、若衆総代、棒方師匠、そして紅白粉、白鉢巻、緋ちりめんのたすきをかけた花棒（幼児）が八人棒太刀組に担がれ、その後に一般棒方、獅子方師匠の介添えを受ける獅子方、笛方、花基を一つずつ担ぐ花方、一般若衆が張られた四隅に花を置き、その中で棒・太刀等の試合と獅子舞を奉納する。奉納が終わると再び行列を整え、県道館林—熊谷線を通つて、地区内の八坂神社・村境の本郷集会所（昔は十九夜堂）で奉納し、新堀川沿いの道（県道大泉—矢島線）を回つて、夕方四時頃に雷光寺に戻り奉納する。奉納終了後は祭典神酒の儀が行われ、夜は師匠達による奉納（後庭）が行われて一切の行事が終了する。かつては祭礼当日（十五日）は神社社殿前の奉納のみで、翌十六日に厄神除の村廻りを行つていた。

(2) 設備・道具　棒方の道具は棒・太刀・鎌・扇子があり、獅子方の道具は獅子頭・太鼓がある。また、花方が担ぐ花は四基あり、二尺四方の台に約一メートルほどの高さの木を立て、それに桜紙で作った八重の桜花等を飾つたものである。花遣りは五日から十二日までに行われる。

(3) 役名・扮装・楽器　棒方、獅子方、笛方、花方に分けられる。棒方は花棒子、少年（少女）、若衆に分けられ、花棒子は幼兒四名で白鉢巻、ネルの長袖の着物に角帯、腰に印籠をさげ、緋ちりめんのたすき、白足袋にわらじ、顔に紅と白粉を付ける。少年（少女）は館林つむぎの浴衣、若衆はセルの角そで着物に角帯、黒足袋、わらぞうり（現在はビニール製ぞうり）である。獅子方はささらつ子（小学生の子供）三名と若衆三名で、浴衣に角帯、からさん（裁着け持）をはき、白足袋でわらじばきとなる。頭には前だれのついた獅子頭をかぶり、腹に太鼓手には手甲を着けてバチ棒を持ち、背中の角帯には神社祈福の色御幣を背負う。楽器は薩笛と獅子方の持つ太鼓のみである。

(4) 演目・芸態　①演目　イ、獅子舞の前に二人一組で「切り」と「受け」に分けれ棒や太刀等の試合が行われる。これが「棒振り」と呼ばれ、流派は柳生新陰流とか言われている。棒振りには、七・五・三・太刀・花棒（太刀と棒・棒と棒・鎌棒（鎌と太刀）、上げ下し（太刀と棒・新棒（太刀と太刀）、相譲（同）、平譲（同）、

(同)、ハタ)、(同)、両社中受(同)、両社(同)、唐棒(同)、青元(同)、

ツバ合せ（同）、石速（扇子と太刀）、正丈（太刀と太刀）、空抜（同）、御速（同）、
通り（同）、四人棒（太刀一人と棒二人）、八人棒（太刀四人と棒四人）の二十一演
目ある。

②芸恵 イ、棒振り 四人棒と八人棒を除き、他は一人組で行う。棒の仕上がり

た組が行う最高のものが「七・五・三」で、太刀と太刀を使って行う。掛け声はな
く、鞘から抜いた太刀を片手で七回、五回、三回と振り切る。最後に「ヤーハ」「エー

トー」と掛け声を掛け、相應形から上段切りを行う。花棒は幼児が行い、太刀と棒、
棒と棒の二種類ある。掛け声は「ニッ」「トハ」「エンエ」「ニッ」「トハ」「エ」「ニーッ

トハ」「エ」「ニイ」「エンエ」「ニイ」と掛け、型を作りながら試合を行なう。鎌棒、
上げ下しの掛け声は花棒に類似している。また、新棒の掛け声は「イヨー」「イヨイ

ヨ」「イヨーワ」「ヘヤ」「イヨーワヘヤ」「イヨー」「イヨーワ」「ヘヤ」「イヨ」「イ

ヨーワ」「ヘヤ」となり、相貫、平貫、非社唐棒、両社中受、両社、青元、空抜など
の掛け声がこれに類似している。この他、御速の掛け声は「イヨーオ」「ヤーエト」

「ハツ」「ドーロ」「ニツ」「ヤーフ」「エト」「ハツ」「トーロー」等と統一。棒
振りの最後は八人棒で締めくられる。

ロ、八人棒の終わりに近い唄、笛の音に誘われて獅子が躍り込む。獅子舞は一人立

ち三匹獅子舞で、前獅子（白髪まじりで雄）、中獅子（雌）、後獅子（若い雄）の三
匹で構成されている。演目は「雌獅子かくし」で、二匹の雄獅子が雌獅子をめぐつ
て争い、最後は仲直りする。十三切の内容から成り、入羽、渡り節、足舞、腰舞（は

やし言葉が入る）、なーは（唄が入る）、ちりー（唄が入る）、めじー（花が四方に
入る）、めじかくし（花の中に雌獅子がかくれる）、めじしたずね（二匹の雄獅子
が雌獅子を見つけ歩く）、めじおんだし（雌獅子を見つけんかとなる、唄が入る）、
ひーほー（はやし言葉が入る）、ちやーりー（はやし言葉が入る）、十三切（は
やし言葉が入る）で終わる。

四 組 織

昔は上三林地区に住む一家の長男（花棒つ子などを除き、十五六歳から数え年

四十二歳まで）により継承され、この年代の若者達を若衆と呼び、年長者が大統代
となつて統率し、祭り（ささら）の行事を取り仕切つてきた。

昭和五十六年に、三年か五年に一度の豊作の年だけでは忘れてしまうということ

で、上三林地区的区長を中心に「ささら保存対策研究会」ができ、翌五十七年に区
長を代表世話人として、上三林全戸を会員とする「ささら保存研究会」が発足。さら

に国の助成による少年地域活動の一環として子供たちに教えながら後継者育成を進
め、昭和五十九年には「上三林ささら保存会」に発展した。

平成五年七月十六日、館林市重要無形民俗文化財に指定され、獅子舞十名、棒振
り九名、笛方七名が文化財保持者に認定されている。

伝承方法としては芸の仕上がりった師匠が指導することになつており、指導部長以
下、獅子・笛・棒・花の各部門別に指導部体制ができていて、祭りが決定すると十
日頃前から練習をする。費用は会費制で、会則に則つて運営されている。

五 由来及び付近の類似芸能

江戸時代中頃、武州忍（現在の埼玉県行田市）の下中条より伝えられたといわれ
る。棒振りの形態をよく残したささらである。

七 特色・所見

館林市の民俗芸能第一集 「上三林のささら」

館林市教育委員会

ささら（獅子舞）は県内では最も多く伝承されている民俗芸能の一つであるが、
上三林地区に伝承されてきたささらの特色は、獅子舞の前に「棒振り」と呼ばれる
剣術の試合があることである。これは獅子の前に立ちはだかる惡靈を払い、露払い
的な役割とも伝えられ、県内でも数少ない形態の一つである。



上三林のささら 棒振り（花棒）



上三林のささら 棒振り（太刀と太刀）



上三林のささら 棒振り（八人棒）



上三林のささら獅子舞（めじしかくし）

大間々祇園囃子

一 伝承地

これは大間々町の市街地で行なわれる祇園祭りの風流伝統芸能で平成八年六月二十六日、町の民俗文化財に指定されたものである。大間々の祇園祭りは寛永六年(一六二九)六月二十六日から始まり、当初は神輿渡御の行列は神輿、かつぎ万灯、富士の巻狩りの装束と続いたとい。文政二年(一八一九)には「かつぎ屋台」が行列に加わる。これは台床上に簡単な屋根組みと旗鉾を立て、床上でお囃子を演奏し、師長がもどき舞いをする。これに合わせて観客も踊る。すなわち、この時点で既に大間々にお囃子が伝播してきたことが推定される。(もどき舞いとは神楽舞いを簡略化したもので獅子舞、あわ踊りの類。お囃子の曲は筋調舞、四丁目)

二 上演の時期及び場所

江戸時代は本町三丁目に牛頭天王を祀る八坂神社があつて、毎年旧暦の六月二十四日、二十五日、二十六日(今のは八月十日前後に相当)の三日間祇園祭りが行なわれて来た。明治元年(一八六八)神仏分離の通達により祭神の牛頭天王は素盞鳴命と改められ、八坂神社を郷社神明宮の境内社としてともに川塗に移した。同五年(一八七〇)新暦実施により毎年八月一日、二日、三日と定めて今日まで続いている。一日は宵祭り(夜祭り)、二日の午後は本祭り、三日を余興祭りという。各町ごとに仮設舞台をつくり江戸時代は本物の江戸歌舞伎を招くほか芝居、地踊をした。今は八木節、カラオケである。祭礼の場所は本町一丁目から七丁目までの約二キロである。

三 行事の次第・構成・演目・芸態等

(1) 行事の次第 祇園祭りは悪疫退散、五穀豊穣、商売繁昌を祈願するものであ

るから、この祈願から始まる。八月二日午後一時から当番町(天王町という)の仮宮前で町の役職、崇敬会(氏子)、祭典諸係が整列して祈願、修祓が行われる。次に

鞍に神幣を立てた神馬につないだ紅白燃りの長綱につかまる祭半天、短服の男女中

高生約百名が馬とともに本町通り往復四キロを高速で走って、祭りの開始をつげる。

これが仮宮に帰着すると、神輿渡御、山車巡行が始まる。行列順は①お払い(神官、錫杖)、②崇敬会長、③ふれ太鼓、④賽銭箱、⑤稚児行列、⑥当番町の屋台(神幣と

文政十一年町に昇格した記念の獅子頭を安置。屋台は大牛に牽かせる)、⑦天狗装束、大間々は台座)とかつぐので、大、重のため廃止。各地とも祭礼が大変お粗末になつてゐるが大間々はかなり古式を保つてゐる。

(2) 設備・道具 屋台が六台、山車一台。坂のある地区は山車をつくらないので少ない。平地で三台ふえると思う。どれも近年新調のため彫刻、金具、塗装が美麗である。屋台は勾欄つき台四輪に唐破風つき屋根のせた形のもので前半部は囃子場、後半部は格子障子囲いの神座で御幣と牛頭天王(角のある獅子頭)を安置。こ

ここに囃子の交替要員。山車は前半部は唐破風屋根つきの囃子場、後半部は二段せりあげ人形台である。勾欄と高欄がつき四輪である。

(3) 役名・扮装・楽器 お囃子連には役名はない。扮装は祭礼全般を記せば①町役職、祭礼役員、一般係員とも花笠、祭り用浴衣(町内)こと異なる)、兵兒帶、白襦袢、白足袋、白草履。②崇敬会は紺の和服、紺の袴、白足袋、白草履。③山車誘導は萬歳風の鉢巻、紺の筒袖。紺の腰引、地下足袋。役員は金銀赤青の刺し子の柄物(竜、牡丹)の法被。④囃子連は①と同じか③と同じ。若衆は祭半天、短袴、白靴。⑤神輿等は白の狩衣、白の鳥帽子。白靴。⑥みこしは萬歳風が祭半天。

樂器は殆ど新調され美麗である。大太鼓1(大胴、大皮)、小太鼓4(締太鼓)、擽り鉦1(中型の吊し鉦)。小さな八木節の手平鉦とは異なる)、笛1(五番調子七穴の縦笛。長四十五センチ、歌口1、指口7で八木節の六穴とは異なる)、敲打具は木製の撥棒、鰐ひれ骨をつけた細槌。

(4) 歌詞 なし

「さんてこ」など十四曲がある。①「さんてこ」は大間々では昔から山車が神社に行くとき演奏する曲といわれてきた。すなわち参詣するときの曲目であるから「參太鼓」と書くべきものであろう。手古舞がつかないので「參手古」ではない。太鼓を「てこ」と言うのは波佐の「鬼太鼓」の例がある。別に太鼓1、小太鼓2だから「三太鼓」で良いとの説もあるが太鼓1、小太鼓2の編成は川越と鹿沼だがここには「さんてこ」という曲目はない。②「きりん」は昔から山車が神社から帰るときの曲といわれてきた。すなわち「帰輪」と書くべきであろう。今回川越で屋台の折り返しを実見したが屋台の床下にジャッキを当て、屋台を僅か浮かせて廻した。尋ねるとジャッキのことを帰輪という。

③「おうま」は昔から山車が停止しているときの曲といわれてきた。「大間」と書くべきと思う。大間々は屋台の上では芝居をしないから幕間はない。歌舞伎で幕間を「しゃぎり」という。長浜は高山、秩父、川越と並んで四十万人出だが山車も山車の上での子供歌舞伎も立派である。幕間の曲のみならず山車巡幸の曲まで「さぎり」「しゃぎり」と教えてくれた。大間々の「大間」に相当する。④「昇殿」、⑤「神田ばやし」、⑥「鎌倉」は最も古い曲で享保十二年（一七二七）葛西神社（昔は葛西香取神社）で神樂のお囃子を編曲して祭り囃子を作ったときの曲である。「出ばやし」として「昇殿」、「本ばかり」として「屋台」、「締めばやし」として「鎌倉」の三曲がつくられ、「屋台」は神田祭りに使われて「神田ばやし」と名づけられた。「神田丸」、「神田くずし」はその亜流である。鎌倉は雪洞のことで「藏入り」すなわち「締めばやし」の意である。④⑤⑥が捕つているのは川越と大間々だけ。④⑥が捕つてるのは府中と境である。⑦「にんば」は神婆の転で川越ではおかめ踊りの曲である。府中と高崎は「みんば」という。⑧「ねんねん」は同じ曲を川越では「子守歌」といい、同じくおかめが踊る。惡靈を眠らせてしまう曲。これこそ祇園祭りの本旨である。⑨「にんばくずし」は「にんば」の亞流。⑩「かこまわし」は伊勢太神業系の丸一曲芸の曲。「かことまり」「かごまる」と言う土地もある。⑪「雨だれ」、⑫「がく」、⑬「皮ちがい」の三曲は意味不明。⑭「ばかばやし」があるのは県内では大間々ぐらいた。これは最古の曲で享保十二年（一七二七）葛西神社の神官の能勢理が和歌山で和歌詠み行事の音律を

修得、この音律で神樂のお囃子を編曲して最初につくった祭り囃子という。「和歌ばやし」と名づけて神樂の演目（座）のあい間（切）に演奏したので「きりばやし」ともいわれた。秋田県鹿角市の国重文「花輪ばやし」の一曲「露ばやし」として残つた。「和歌ばやし」、「ばかばやし」、「霧ばやし」は同類である。

四 組織

大間々町おはやし保存推進委員会（会長石原輝久）は各町内の「おはやし保存会」の連合会である。

五 由来及び付近の類似芸能

大泉原日記（旧郷社神明宮の日誌で文政二年から嘉永五年まで）によれば大間々の祇園祭りは寛永六年（一六二九）に始まる。文政二年（一八一九）六月二十四日「屋台である」。同十二年「かつき屋台である」とある（県内最初）。川越では文政九年（一八二六）一本柱人形台付唐破風屋根付山車である（埼玉最初）である。大間々が一本柱人形台付山車になるのは弘化三年（一八四六）六月二十四日「上三丁や」（県内最初）。赤坂山王では弘化四年（一八四七）には一本柱人形台をやめて「高欄付一段せり上げ人形台付山車」（今の形の山車）ができた。この山車は現在橋本市にある。大間々ではこの形の山車は明治初年にはあったが年次は不明である。元祖葛西ばやし（葛西神社）をとり入れた「神田ばやし」の神田明神祭りと「黒ばやし」の赤坂山王祭りは明治二十二年（一八八九）に廃絶し、赤坂の山車は板木に神田の諸物は川越に売られた。赤坂の諸物は府中市の大國魂祭りに売られた。川越の江戸ばやし（神田ばやし）は早くから熊谷うちわ祭りに伝播し、ここで楽器が大皮・小皮三、笛二（梅笛と桜笛）、大型摺り鉦三に増やされ、大音響の「地ばやし」を作つた。「地ばやし」は「武州ばやし」と改称された「チャツチキ、チャツチキ」と聞える音となつた。このタイプは県内では世良田、境、伊勢崎、横瀬、渋川へと伝播した。大間々の場合は江戸後期は幕府直領領のみを通つて検閲の厳しい銅街道は商人、遊芸、文士に敬遠され古戸（あこ）街道（大間々本町から太田高林）を通つた。古

戸河岸から間宿で江戸川に入り庄内（三郷）から中川に入り、鬼有（葛西神社社わき）から運河（今埋立て消滅）で荒川へ。堀切（運河）で隅田川へのコースを利用した。そのため「葛西ばやし」が最短コースで大間々に入ってきた。大間々の囃子は太鼓一、小皮四、篠笛一、中型の振り鉦一の編成のため太鼓音が強い。したがつて「チャッキ、チャチャチャキ…」は熊谷系、「ドンック、ドドック…」は大間々系とすぐわかる。大間々系の小太鼓四個は伊勢崎、玉村、波川の各一部の山車にみられる。

六 記録文献

大間々町誌資料編「大泉院日記」（平成八年）。「群馬県の祇園囃子」（平成七年、県教委）。「群馬の祇園信仰とその祭り」（昭和六十年、金子輝一郎）。「波川の祇園と郷土芸能」（昭和五十二年、宮川俊雄）。「CD群馬の祇園囃子（沼田、大間々）」（平成六年、県教委）。葛西、川越、長浜、鹿角、秩父、柄木等の資料。「大間々町の民俗」（群馬県教育委員会、昭和五十二年刊。萩原、都丸、近藤、根岸、金子輝、池田、井田安雄、関口正巳、板橋春夫。地元は五十嵐ほか数名）。

「群馬県老人クラブ連合会会誌（大間々まつりの項目）」（平成三年九月、五十嵐昭雄）

七 所 感

「祭り」については民俗学で古くから大いに研究されてきたが、その「お囃子」については極めて研究がおくれていて、まとまった本一つないことを知った。やむを得ず広範囲にとび歩くことになり「お囃子」の伝播経路について自説を持つようになつた。しかし「さんてこ」は各地ごとに皆ちがうのは悩みのたねである。川越の「さんてこ餅つき」を録画したが、これは三人杵のことであつた。

（五十嵐昭雄）



〔大間々紙園囃子〕

板倉の里神樂

いたぐら

一 伝承地

板倉町は昭和三十年二月一日に伊奈良村、西谷田村、大篠野村、海老瀬村の四村が合併し、板倉町となつた。里神樂は旧伊奈良村、現板倉町大字板倉字中三^{ナカミツ}耕地の一部後継者により伝えられている。

二 上演の時期及び場所

関東一円における雷電神社の總社とされる板倉雷電神社の祭礼日である五月一日。

二日・三日に、雷電神社境内にある神楽殿で演じられてきた。昭和五十年頃まで雷電神社の神楽殿で演じられていたが、その後しばらく中断し、平成二年に神楽殿が老朽化したことにより取り壊され、再建されなかつたことから、上演はまつたく定期となつてしまつた。

現在は町のイベントや郷土芸能大会等に出演する程度で、定期的に演じられる」とはなくなった。

三 行事の次第・構成・演目・芸態等

(1) 行事の次第 従来、雷電神社の祭礼日に「板倉のひよっこ」として演じられてきたが、もともとが雷電神社に伝わる代々神樂とは種類を異にする。

板倉町は平均標高十七メートル程度で、低地部分は十四メートルを割るところもある。加えて南を利根川、北を渡良瀬川の大河川に囲まれ、中央に谷田川が流れる輪中地形を形成しているため、長い間水害に苦しめられてきた。俗に「カエルがしょんべんしても水が出る」と言われる所以である。

こういった厳しい生活状況の中で唯一の娛樂とも言える里神樂は、地元や周辺の人達に支持され、「名人芸」と言われるまでのその技能を高めていたのである。

(2) 技術道具 里神樂の代表的な道具は、面十五、扇子、金鑼、日傘、羽子板、出刃包丁、ノコギリ、カミソリ、赤子、大徳利、鉄棒、弓、太刀(大小)、歎、軍扇、出刃包丁、ノコギリ、

カイなどがある。

(3)

囃子・楽器 囃子の原流は、東京の神田明神に伝わる「神田囃子」の系統を組むと言われる軽快なリズムのもので、それに栃木県佐野市に伝わる囃子を取り入れて、小気味のよい軽快なテンポの「ひよっこ囃子」が長い年月をかけて完成されたものである。

使用される楽器は太鼓一、付太鼓一、笛一、钲一である。

(4)

役名・扮装 演目が十二座あり、この演目によりひよっこ、おかめ、赤鬼、青鬼、神功皇后、翁、素戔鳴尊、安珍、清姫(以下略)など二十五に及ぶ役柄がある。

面や衣装特にひよっこ面などは役を兼ねる部分があるが、役柄に応じた面や衣装が備えられている。

里神樂を代表する「ひよっこ・おかめ」の衣装は、「ひよっこ」が頭巾をかぶり、ひよっこ面をつける。上衣は襦袢にチャンチャンコ、下衣はダツツケモノベで足袋を履く。手には扇子を持つ。「おかめは頭毛をかぶり、おかめ面をつけ、振袖を着る。足袋を履き、赤子を背負って登場する。以下二十五に及ぶ役柄に合わせた面や衣装が工夫されている。

(5) 演目・芸態 (1)演目、里神樂が演ずる演目は、「ひよっこ・おかめ、三韓征伐(神功皇后)、大蛇退治(出雲神説)、安達ヶ原(鬼婆)、道成寺(安珍・清姫)、葛の葉の子別れ、大江山、種播き、狐釣り、外道(鬼)の鼻とおし、鍛冶屋、三番叟の十二座である。(2)芸態 「ひよっこ・おかめ」について述べると、はじめに「おかめ」が子どもを背負って舞台に登場し、手踊りした後、扇子を使って舞う。

そこへ「ひよっこ」が出てきて「おかめ」の背負った子どもをあやす。この時に曲は軽快な囃子から郷愁を帯びた子守唄に変わる。子どもが眠ると「ひよっこ」と「おかめ」は羽子板を使って羽根つきをして遊ぶ。次に「おかめ」が「ひよっこ」のヒゲを剃る仕草に入る。最後は「ひよっこ」が子どもを背負って退場する。

この間、子どもにオシッコをされたり、「ひよっこ」がオシッコをしたり、その仕草は卑俗性も含め「ひよっこ」の仕草が実にユーモラスである。演技が終わつてみると、そのユーモラスな仕草の中におもしろいだけではない何かが観衆を魅了して離さないから不思議である。

四 組織

里神楽の組織は「親方」と呼ばれる代表者を中心に、「離子方」と「踊り方」に区別されているが、ほとんどの人達が両方をこなすことができる。現在のメンバーは

「親方」の荒井義男(6)、根岸庫司(6)、荒井菊市(6)、田部井卯一(6)、荒山昭次郎(6)、

荻原信三郎(6)、塩田平吉(6)、塩田熊治(6)、塩田次雄(6)、田部井勇(6)、増田洋(6)の

十一人で構成されている。構成員の高齢化が進んでおり、後継者に苦慮している。

現在、毎月曜日に小・中学生を対象にした「里神楽講習会」を開催し、後継者づくりを進めている。

組織の運営は、町指定文化財であるため六万円の補助があるが、他の収入はなく、構成員の負担によるところが大きい。組織名は「里神楽保存会」、代表は荒井義男である。

五 由来及び付近の類似芸能

文書や資料が遺されていないため詳細は不明であるが、古老の口承によると、明治十年頃、板倉の小林幸蔵、田部井太蔵、鈴木儀三郎、染谷三次郎、尾沢海老蔵、蓮見由蔵等が七~八歳頃、館林市羽附町字長竹耕地に伝承されている里神楽を見て非常に感激し、学校の帰り道にお互いに見よう見ま似で始めたのが最初と言われている。

芸の指導、特に太鼓と笛は板倉の塩田幸八があたり、踊りは埼玉県北埼玉郡三田ヶ谷村（現加須市三田ヶ谷）の「高須賀」と呼ばれる歌謡を全員で練習した。当時、歌舞伎が盛んに全国的に「地芝居」が普及してきた時期であり、里神楽もこれを取り入れた。一方、男形は邑楽町の小林溝一に、女形は東京の歌舞伎役者である中村福助を招いて、女形の所作を習得したと言われる、当時の流行はもとより、一流の所作事を導入して完成させたのが現在の里神楽である。

近くには里神楽の類似芸能はない。

六 記録・文献

里神楽に関する直接的な文書、資料は存在しない。

参考資料、板倉町史（資料編）別巻五「板倉の郷土芸能と水害闇の信仰」

七 特色・所見

板倉の里神楽は、板倉の少年達の感動が水害常習地帯にあって娛樂性に乏しい大人の共感を呼んで「名人芸」と言われるまでに成長していった。特に「ひょっこりおかめ」は道化と卑俗に満ちた踊りに会場は常に爆笑の渦と化すが、終了した後も、単なる笑いだけではない何かが残る。懸念されるのは後継者が高齢であるということである。この名人芸、いつまでも消えることのないよう願つて止まない。

（小荷田 武）



里神楽



里神楽



里神楽



里神楽



里神楽練習風景



里神楽練習風景

たかとり 高鳥の念仏踊り

（4）一 伝承地
　念仏踊りは、板倉町大字大高島字高鳥耕地に伝わるものである。同耕地内には名社「高鳥天満宮」も鎮座する。

（2）二 上演の時期及び場所
　昔は、毎月十七日の「觀音待」には、近くの觀音堂に老婆が集まり念仏を唱えた。板倉地方は純農村地帯で、豊作祈願や嘗亂除けとしての麦念仏等が盛んに行われた。高鳥の念仏踊りは、この念仏を唱えたあとに余興として踊られてきたようである。特に一月十七日には「初絆起し」といつて、「初念仏」がどこの集落でも唱えられたようである。高鳥耕地の念仏踊りも例外ではない。

三 行事の次第・構成・演目・芸態等

（1）行事の次第　高鳥の念仏踊りは、水害常習地帯にあって毎年のように洪水に苦しめられ、農業以外に生きる術を知らない人々にとって、豊作祈願は欠くことのできない祈りであり、加えて祖先の供養・現世から来世への極楽浄土を念仏にすがつた信仰背景がある。

一方で娛樂の少ない時代にあって唯一、楽しみの行事であったのかも知れない。繼者不足により活動を休止している。

（3）役名・扮装・楽器　念仏踊りは歌と踊りにより演じられるが、念仏踊りのための衣装は伝承されていない。普段着、または浴衣等を着て踊ってきたようである。樂器についても「たたき鉦」「風鈴」だけであり、附帶物として鉦をたたくための撞木と扇子踊りのための扇子があるだけである。ただし「風鈴」については、

現在の繼承者は使つて踊つたことがなく、「風鈴」も比較的新しいので実際に使つて踊られたものかは不明である。

（4）演目・芸態　念仏踊りの演目には「大日如庭」、「平井権八」、「葛の葉」、「高姫」、「高砂」、「乃木大將」、「田中正造翁報恩和讃」がある。純然たる念仏と段物と言われる歌舞伎にとり込んだり、「乃木大將」や地元で公害のため命を賄した「田中正造和讃」が加えられていて、当時の社会背景をうかがい知ることができる。

踊りは、左手に鉦、右手に撞木を持ち鉦を打ちながら踊るものと、両手に一つずつ扇子を持って踊るものがある。いずれも右手と右足、左手と左足を同時に出し、動作の隨所に床を蹴る仕草が入る。踊りはゆつたりとした单调なリズムで踊られる。両手と両足を同時に出す踊りの形態は、古い伝承形態であると言われる。また、床を蹴る動作は益踊りに見られるように、地下に眠る祖靈を呼びさます意味が込められているのかも知れない。

現在の後継者により演じられる演目は、歌を歌える人がいないこともあつて限られている。

四 組織

昔は高鳥耕地内の九人の主婦により歌と踊りが構成されていたが、高齢により中断していた。昭和五十六年頃、伝承されてきた家の中から小林ミイ、長谷川ふく、小野田つね、早川とも、矢崎良子の五名により復活したが、早川、矢崎の死亡により現在は中断している。

今は、町からの補助金一万円と自費で運営させていたが、中断により町からも補助は受けていない。組織名は「高鳥念仏踊り」、代表は小林ミイである。

五 由来及び付近の類似芸能

念仏講による念仏は各所で行われているが、念仏踊りは非常に珍しい。この念仏踊りの起源については、文書や古記録がないため不詳であるが、おそらく一遍上人めの撞木と扇子踊りのための扇子があるだけである。ただし「風鈴」については、流れをくんだ時宗の僧により広められたものと考えられる。

特に江戸増上寺の高僧で、館林善導寺に逗留していた祐天上人により普及したことも推測できる。祐天上人は榮職に就かず、權力者との結びつきを避け、庶民済度のために諸国を歩き、大衆の苦しみや悩みを聞き、法話をし念佛踊りを広めた高僧である。町内の石塚耕地には祐天堂があり、除川の田沼光夫宅には祐天上人から賜わったとされる大数珠があることからも、祐天上人の遺徳を偲ぶことができる。

六 記録・文献

念佛踊りに関する直接の資料は存在しない。

参考資料 板倉町史（資料編）別巻五一板倉の郷土芸能と水害圖の信仰

七 特色・所見

古い伝承形態を遺した念佛踊りとして貴重であり、ぜひとも伝承してもらいたいものである。現在、町教育委員会で念佛踊りが伝承されてきた家の主婦に働きかけて、後継者を育てるべく依頼中である。伝承者が高齢であるため早い時期の復活が望まれる。

（小荷田
武）



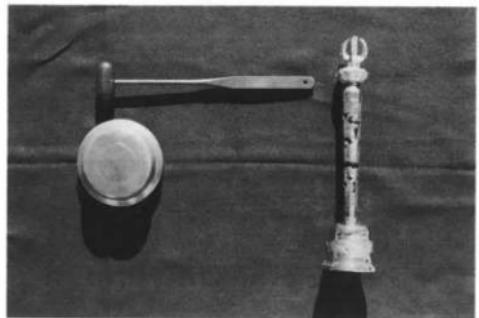
念佛踊り



「念佛踊り」扇子



「念佛踊り」扇子



钲・撞木・風鈴

吉田西里神樂

一 伝承地

邑楽郡大泉町吉田地区の白山神社に伝わる。

二 上演の時期及び場所

白山神社の大祭が四月十五日と九月十五日に行われ、その際、境内に仮設舞台が設営されて神樂が奉納される。十五年前までは、大祭で定期的に奉納されていたが、その後次第に行われなくなり、現在は、町や地区内の記念行事や近隣市町村で開催される大会等で舞われている他、町内の学校や幼稚園等でも披露されている。

三 行事の次第・構成・演目・芸態等

(1) 祭礼行事全体の次第 午前中に神社の大祭が行われ、神樂は午後一時三十分

頃から奉納される。途中のど自慢や舞踊なども行いながら夜十時頃まで舞われる。

この神樂は悪魔退散、五穀豊饒や室内安全などを祈願する舞であると同時に、演劇的な要素を取り入れた舞があり庶民の娯楽になっていた。

(2) 設備・道具 昔は大祭の一ヶ月前から保存会の人達によつて仮設舞台が丸

太で組み立てられたが、現在は、神社拜殿に向かって右手の倉庫に、組み立てられた舞台が収納されている。また、道具類は神社に隸属する吉田西公民館で保管されている。

(3) 役名・扮装・楽器 役は翁・住吉・手力男・ひよっこ・えさこう・狐・鍼治屋・おかめ・天照大神の九種ある。衣装は白襦袢・白袴・手甲・白足袋に草履を履き、それぞれの役に合わせた衣装を纏い、面をつける。

楽器は大太鼓一台、小太鼓一台、すり鉢一個、笛一管である。

(4) 演目・芸態 ①演目 七つの演目からなり、三番叟・岩戸開き・んば(種まき)・ひよっこ(ことえさこ)・えびすさま・刀鍼治屋・ねねこ踊り(おかめひよっこ)・狐つりがあるが、よく舞われるのは三番叟・岩戸開き・んば(種まき)。

ねねこ踊り(おかめひよっこ)・刀鍼治屋である。

②芸態 イ、三番叟は一番最初に舞われる舞で、白面を付けた翁(神官)と黒面

を付けた住吉の神との舞である。最初に白面の翁が登場し、刀を持って舞台の四方がためを舞いながら払い清める。そして、翁が拝みながら「西のみね あおが原の波間より」と言うと、舞台裏から「あらわれいでし住吉の神」と言いかがら、黒

面の住吉の神が現れ、翁と住吉の神が背を合わせて回つて座る。住吉の神は両手に扇子を持ちながら四方がための舞を披露し、神事のやり方を翁に授けて退場する。

翁は再び舞い、注連縄を天照大神に奉納する。翁は無事に注連縄が奉納されて願い事がかなえられたことを喜び、刀と鉾で神いさみの舞を舞いながら舞台を後にする。

この三番叟は里神樂の中でも莊嚴な舞の一つで、約二十分かかる。

口、岩戸開きは、手力男がたつきをして出てきて、両手に笛を持つて身体を清める笛おどりを舞う。岩戸を開くためにからだを鍛える舞で勇壮で力強い。手力男は天戸を開くと中にいる天照大神の手を取つてひっぱり出し、二人で舞う。手力男は天照大神が持つてきた注連縄を張つて舞は終わる。

ハ、んば(種まき)は稻荷(狐)・ひよっこ・えさこうの舞で一年の農耕作事を表現したものである。初めて兄貴分のひよっここと弟分のえさこう二人が歎を持つて出てくる。そして、「今日はいい天気だなあ、えさこう、今日はお稲荷さんに来い」と言わせて来たけども、何をするんだべなあ、お稲荷さんも人使いが荒いからなあ」とひよっこが話し始める。そこに稻荷が登場し、「一人を手招きして呼ぶひとひよっこ」とえさこうは「兄貴、お稲荷さんが呼んでいる」「お前は口がでかいのだから、お前がお稲荷さんのところへ行って聞いてこい」「兄貴の方が上なんだから、兄貴が聞いてくるのが順番だ」「よし、わかった」と言ってひよっこが用件を聞きに稻荷のところへ行くと、稻荷はひよっことに煙の耕し方を手真似で教える。その間、えさこうはたばこを吸つて、おどけた動作をしながら観客を笑わせている。戻つてきたりよっこは、「大変な仕事を仰せつかつたぞ、こんな広いところを耕せ」という指示だ。今日は白山神社のお祭りなのになあ、早く仕事を終わらせるよう、えさこうがんばるべえな」と言って、二人は歎を持って煙を耕す舞をユーモラスにはじめ。途中、えさこうはげる休みをしながら観客を笑わせるしぐさをする。煙を耕

し、土ならしとさく切の動作が終わると、「えさこう、ひとやすみすべえやねえか」「うふ、そうだな」と言いながら二人はそこで一服する。そこに福荷があらわれて種まきの舞をはじめる。福荷が舞台から下がると二人はまた休憩をしておしゃべりをはじめ、しばらくするとまた福荷があらわれて、今度は鎌を二人に手渡して福刈りをするように指示する。ひょっとことえさこうは鎌を渡されると、「おい、ひょっこり、こりやなんちゅうもんだ」「うん、これが、への字に曲がっているから、へまじゃないのか」「へマってなんだべな」と考えながら観客に聞くと、客の方から「それは鎌だ」と教えられる。えさこうが「お客様がこれは鎌だつて教えてくれたぞ」と言い、また二人は「どうやつて刈るんだい」「おれもよく知らねえけど、こうして刈るんだんべや」「切れるか?」「切れねえ」と会話をしながら、鎌の刃を研ぎはじめると、「おどけて刃の方を持って鎌の柄の部分を研いだために自分の手を切つてしまい、ひょっこりが幣束をちぎつてえさこうの手当をする。鎌研ぎが終わり、福刈りが終わると二人はまた一休みしておしゃべりをする。えさこうは「今日のお福荷さんは人使いが荒いけど、みんなはどう思う?」などと観客に話しかけたりする。

再び福荷が現れると、今度は臼と杵を持つてくるように指示する。二人は臼と杵がどんなものか分からず、あれこれ問答をしながら舞台裏から臼と杵を持つてきて、餅つきがはじまり、餅つきがあるとそれを福荷に渡して、福荷はそれを神前奉納する。その後でその餅を観客に振る舞つて舞は終了する。この舞の特徴は、福荷がひょっこりえさこうに指示を出して一連の農事を行わせるが、その合間にひょっこりえさこうのユーモラスな台詞やしぐさが入ることである。台詞はその時の客層に合わせてアドリブで行われ、特におとけ役のえさこうは観客と会話をしながら観客の笑いを誘い、ひょっこりえさこうの絶妙な呼吸は観客の目を舞台上に引き付ける。この舞だけで一時間はかかる。

二、ねんねこ踊り（おかめひょっこり）は、おかめが子供をおぶって出てきて、泣く子をあやすように舞う。おかめは子供を寝かしつけて化粧をし始めるが、そこになるとえさこうがやつてきて、おかめをくどきはじめめる。最初、おかめはえさこうを警戒していたが、やがていい仲になつて、おかめとえさこうが戯れる踊りをする。そして、えさこうが子供をおぶり、おかめとともに退場する。

木、刀鍛冶屋は鍛冶屋（金山彦命）が出てきて、小僧（ひょっこり）に刀を鍛えさせた舞である。

四 組 織

昔は吉田西地区に住む青年男子（二十二、三歳頃から）で、家を相続するものが継承してきた。伝承方法としては先輩が後輩を指導することになつており、祭りの一ヵ月前から練習をした。保存会が組織されたのは昭和二十六年頃である。

昭和五十九年十月十二日、大泉町の文化財に指定されている。

現在は会長は社寺總代長がつとめ、平成八年度は川島松五郎氏が会長で、他に副会長二名、会計一名、顧問七名が役員となつてある。師匠と呼ばれる指導者は川島浦次郎氏（ひょっこり他）、川島渡氏（笛他）、川島清八氏（笛吉）、えさこう他で、後輩の指導にあつてている。費用は昔は会費制であったが、今は町と区からの助成金と出演依頼料などで運営されている。

五 由来及び付近の類似芸能

江戸末期から明治初期に始められたと伝えられている。太々神樂と江戸神樂の要素を兼ね備え、特に台詞のある里神樂はこの近辺では数少ないものである。

六 記録文献

【大泉町誌】 上巻 自然編・文化編

大泉町誌編集委員会

七 特色・所見

出雲流神楽に演劇性の高い江戸神樂や神話的要素の強い岩戸神樂、太々神樂などの要素を取り入れたもので、「三番叟」と「種まき」の演目には台詞が入るのが特色となつていて、特に「種まき」では一連の農作事を行なうが、コント漫才のようなユーモラスな会話やしぐさをまじえるなど、五穀豊饒を願う中にても庶民の娯楽がふんだんに取り入れられている。

（岡屋 紀子）



吉田西里神楽〈種まき〉
仲ひょっこ 仲幅荷 佑えさこう



吉田西里神楽〈種まき〉
仲ひょっこ



吉田西里神楽〈おはやし〉

しのづかつばや 篠塚坪谷の豊年万作

一 伝承地

邑楽町篠塚坪谷地区に伝わる。

二 上演の時期及び場所

かつては神社の春秋の祭りやお寺の縁日など各種祭礼、おひまち、野上がり、農閑期、七五三、新築祝いなどで上演され、戦時中は出生兵士壮行会などでも上演された。場所は社寺の建物や舞台、小屋、よし張りの仮設舞台の他、家の縁側や座敷などを使った。明治時代から昭和初期まで盛んに上演されていたが、戦後は全く廃絶し、平成元年に「しののめ豊年万作踊り保存会」が結成されて、約五十年ぶりに復活された。現在では、公的行事や各種イベント、祭礼等に招かれて出演している。

三 行事の次第・構成・演目・芸態等

(1) 祭礼行事全体の次第

各種祭礼やお祝い事に合わせて、午後七時より十時頃まで上演された。

(2) 設備・道具 垂幕や背景幕の他、踊りは花（スダ）笠、扇子などを使い、

また段物にはそれぞれ使う小道具がある。

(3) 役名・扮装・楽器 役には踊り手と段物の配役がある。踊り手はできるだけ派手な長襦袢や浴衣を着た。頭には手ぬぐいでほつかむりをし、背中にたすきをかけ、腰には黄色い三尺を結び、手甲、白足袋を身につけた。さらに華々しく見せる

ために紫紺とビンク、朱色の着物を着たり、片腕をまくり、尻ばかりをした。顔には白粉を派手に塗った。段物の配役はそれぞれに合わせた扮装をした。

樂器は四ツ竹、すり鉢、太鼓、りん（仮具用、拍子木）、篠笛（手作り）である。

(4) 演目・芸態 ①演目 がんにんの豊年万作踊り、段物「お半・長右衛門」、段物「鬼神お松」の三つの演目がある。

②芸態 イ、がんにんの豊年万作踊りは、拍子木、口上、太鼓の後に「がんにん坊主」が登場し、がんにん坊主がお姫さん衆を呼び寄せ、万作踊りと唄が始まる。最初は豊年万作の唄と「花笠踊り」、豊年万作切りの唄と手踊り、「二つ目は伊勢音頭の唄と「扇子踊り」（阿国踊り）、四つ目はちゃん数え唄と踊り、三つ目は伊勢音頭の唄と「扇子踊り」（阿国踊り）、四つ目は粉屋の唄と踊り（船屋踊り）、五つ目は七福神の唄と「手拭い踊り」、最後に万作数え唄と踊りで終了する。口上の台詞は「東西～、この度次なる舞台をあい務めますのは、南大利根、北渡良瀬のあいに挟まる邑楽の郡は邑楽町、邑楽町は篠塚地区におきまして、今を去る事、二百三十年の昔より、私達の遠い祖先が、親から子へ、子から孫へと受け継がれてまいりました。『篠塚の豊年万作踊り保存会』の一に行なございます……。今回はその、豊年万作踊り、数々の番組の中より、本日の出し物、お祝い三番、篠塚の豊年万作踊りより、「がんにんの万作踊り」～～～の上演でござります……。」と言つて始まる。また最初の豊年万作の唄と踊りは、「そだよホイ 今年ナ～、ア、世が良で豊作だよコラ、万作だよ、早稻手も、ア、十分だよ～ 中手も、コラ、十分だよ～ 晩手も、ア、十分だよ～ 何もかも、コラ、十分だよ～ 桧葉で、ア、計り込む ャ、レーハサ、箕で、コラ、計り込む、……ヤ、レーハサ、箕で、ハハヨ、ハナ、ハハヨ、ホイナ、ハハヨ、ホイナハハヨ、ホイナハハヨ」と唄いながら花笠で踊る。しかりこちゃん数え唄は「一つとせうようのくえ ひしゃくにおいづるすけ笠を 巡礼姿で父母を尋のうかいな ちりん」と、しちりんこちゃんじや つんでんしちりこちゃん ア、つんでんしやん、 つんでんしやん」となる。また、最後の万作数え唄は、歌舞伎の「仮名手本忠臣蔵」を唄つたもので、日本で最初に踊られた古い手踊りと言われている。数え唄の一部は「二つとせ、人を見下ろす、師直は、ア、「かほよ」さ、御前に文をやる、二つとせ、二つ巴の定紋は、ア、主税に大星藏之助 三つとせ、眉間を三寸、切り離し、ア、上と下では、大麗ぎ、四つとせ、よくよくく運が、尽き果てた、ア、浅野匠守へと、ご切腹」と、十五まで数え唄が続く。

ロ、段物「お半・長右衛門」は、拍子木、口上、太鼓の後に豊年万作の唄と花笠踊りが披露され、次に百姓のそろ兵衛が登場し「お半・長右衛門」の芝居が始まる。百姓そろ兵衛の娘お半が、屋敷に仕える侍長右衛門と良い仲になる

が、長右衛門は屋敷の伴三九郎を殺め、二人は追われる身となる。お半と長右衛門

が唄いながら道を行きに出で、前編は二人が船乗りの唄、長太と名を変えるところ

で芝居は終了し、その後で太鼓の合図とともに出演者全員で伊勢音頭の唄と扇子踊り、七福音の唄と手拭い踊り、豊年万作切りの唄と手踊りが披露される。芝居の後編は、舞台は桂川の渡し場に変わり、船頭の兄弟が飛脚からお半と長右衛門の廻状を受け取る。船頭の兄弟はしちりこちん数え唄と万作数え唄で踊りながら渡しに来るお客様を待つ。そこへ船屋に化けたお半と長右衛門が登場し、船頭の兄弟から二人は疑いの目で見られるが、お半と長右衛門は船屋踊り（粉屋の娘の唄と踊り）を踊って、その疑いが晴れ、桂川を渡ることができて芝居は終了する。その後全員で再び伊勢音頭の唄と扇子踊り、七福音の唄と手拭い踊り、豊年万作切りの唄と手踊りが披露され、幕となる。

ハ、段物「鬼神お松」は、拍子木、口上、太鼓の後に豊年万作の唄と花笠踊りが披露され、次に侍の夏目彈正四郎三郎が登場し、万作数え唄かしらこちん数え唄のどちらかを踊り、鬼神お松の唄となる。芝居の内容は陸奥国八甲田山麓の奥入瀬が舞台で、旅の途中の四郎三郎が笠松神で女盗賊「鬼神お松」の手にかかつて殺されて前編が終了する。後編は四郎三郎の一子専太郎が父の仇討ちのために笠松神に行き、女盗賊「鬼神お松」の首を取つて父の仇討ちを果たして芝居は終了する。前編、後編とも芝居が終了した後に、全員で伊勢音頭の唄と扇子踊り、七福音の唄と手拭い踊り、豊年万作切りの唄と手踊りが披露される。

四 組 織

昔は坪谷地区に住む青年男子（十七八歳頃から）で組織され、明治中頃から昭和初期にかけての全盛期には二十有余名がいた。その頃の先駆的功労者として、千吉良安太郎氏、小川徳太郎氏、細谷萬吉氏、増尾浪三郎氏、金子清氏等の名があげられる。豊年万作踊りは戦後衰弱してしまったが、昭和五十八年に「豊年万作踊り愛好会」が八名で発足し、記憶のある経験者から教わりながら習熟に努めた。そして、平成元年には豊年万作踊りの三演目を五十年ぶりにほぼ完全な形で復活させ、会の名称を「しののめ豊年万作踊り保存会」とし、会員も十三名となっ

た。昔は男性のみであったが、現在は女性七名も参加している。

五 由来及び付近の類似芸能

豊年万作踊りは、江戸時代後期（明和・安永年間頃）には坪谷地区をはじめ関東一円に誕生した。伝播経路は伊勢参りの際に伊勢の古市で覚えた唄や踊りが披露されたり、歌舞伎の流れ、出雲・京滋地方の踊りや茨城県下妻地方に残る下妻踊りなどの流れと考えられている。埼玉県内では各地で盛んに行われていたが、群馬県内では篠塚の坪谷が唯一の伝承地と言われている。また、八木節の唄と踊りや里神楽のおかめひよとこ踊りとの共通点も多く、その源流とも考えられている。

六 記録文献

台本「がんにんの豊年万作踊り」

渡辺幾雄

台本「段物 お半・長右衛門」

渡辺幾雄

台本「段物 鬼神お松」

渡辺幾雄

七 特色・所見

豊年万作は、農作の祈願や収穫の喜びなど、農民の願いが込められた唄や踊りで明治時代から昭和初期にかけては庶民の娯楽として関東各地で流行した。この豫察坪谷の豊年万作踊りは群馬県内唯一の伝承地であり、省内でも貴重な民俗芸能の一つである。しかし、時代の流れとともに全く廃絶してしまったが、平成元年に渡辺幾雄氏を中心とする「しののめ豊年万作踊り保存会」によって、豊年万作踊りの三演目がほぼ完全な形で復現されたことは、地域文化の継承に大きく貢献するものである。

（岡屋
紀子）



がんにんの豊年万作踊り



〈段物〉お半・長右衛門



〈段物〉お半・長右衛門



〈段物〉鬼神お松

[篠塚坪谷の豊年万作]

きたえびせ 北海老瀬大杉囃子

を迎えるための曲で始まり、辻固めや道中、毎戸訪問等、それぞれの場所にあった曲が笛のリードにより演じられる。

一 伝承地

板倉町大字海老瀬字北海老瀬耕地に伝わる。耕地内に賀茂神社があり、末社として大杉神社がある。この大杉神社に御輿、お獅子と共に大杉囃子も伝承されている。

二 上演の時期及び場所

祭礼日については、昔は春祭りが二月十一日、夏祭りが七月十八日に変更された。が、昭和二十六年から春祭りが四月十一日、夏祭りが七月十八日に変更された。

春祭りはお獅子が主役であり、大杉様御輿と大杉囃子は脇役である。このため、春祭りには大杉囃子は演じられない。一方、夏祭りは大杉様御輿と大杉囃子が主役となる。

まず耕種守の賀茂神社の前で大杉様御輿をもみ、大杉囃子で囃す。次に村境で辻固めをして、毎戸訪問をして回る。道中も含めて大杉囃子は演奏される。

三 行事の次第・構成・演目・芸態等

(1) 祭礼行事全体の次第 賀茂神社の祭礼も含め、祭りの運営は当頭により運営される。この当頭は四人であり、毎年四人の内一人が順に当頭となり一年間の祭祀が運営される。当頭は原則として世襲制となっているが、十二年に一度、大改選が行われる。特別の理由があればこの時に改選される。毎年四月十一日には「祭例當引繼式」が行われるが、この儀式は町の無形民俗文化財に指定されている。

(2) 役名・扮装・楽器 大杉囃子は当頭が祭り全体の運営にあたり、囃子の指導には、伝承者である指導員がある。実際の演奏は会員が演じる。使用される楽器は太鼓一、付太鼓一、鼓五、笛四、鉦一である。

(3) 演目・芸態 現在、演奏できる演目は①太刀、②昇殿、③社切、④がく、⑤祇園、⑥山王、⑦そこやれ、⑧新囃子である。廃絶には至らないが、難解等により継承されない演目として「雷」「二遍がえし」「三遍がえし」がある。

大杉囃子は、最初に賀茂神社社殿前で演じられるが、「太刀」「昇殿」といった神

四 組織

大杉囃子は四人の当頭が中心になって組織されているが、祭りと異なり囃子は関しては練習も含め伝承者である指導者がリーダーになって運営されている。運営費については、祭典と併せて行われるため、現在は耕地地主から祭典費を徴収して運営費としている。昔は毎戸訪問をしていたため、訪問先からの御賛金により賄われていた。

組織の名称は「北海老瀬大杉囃子愛好会」、代表者は北村春雄である。

五 由来及び付近の類似芸能

大杉囃子の起源については不詳であるが、賀茂神社に遺されている「賀茂大明神御祭礼氏子人名簿」(明治二十四年正月十一日)に御獅子と御輿が初見していることから、それ以前より行われていたと考えられる。昔は賀茂神社で囃したあと、道中も含め毎戸訪問して演奏した。この際、当頭は紋付、袴で正装して絆を持ちお供をつけて毎戸の接待を受けた。接待の間、囃子は演奏されていて、当頭が席を立つまでも囃子を止めるとはできない。

大杉様御輿は、昭和二十二年に焼失して以来再興されていない。大杉囃子も御輿がないこともあって、昭和三十二年頃から中断していた。お獅子についても損傷が激しく、毎戸訪問もなくなっていたが、平成元年にお獅子が修理された。

これを契機に、大杉囃子も平成二年から復活したものである。大杉囃子は、現在、毎戸訪問は廃止され、四人の当頭と行政区長の家だけを訪問して演じられている。類似芸能として近くに「山口の大杉囃子」がある。

六 記録・文献

〔賀茂明神祭礼組合帳〕(宝永三年)一一七〇六、「正一位賀茂大明神御祭礼氏子人名簿」(明治二十四年)一一八九一、「板倉町史(資料編)別巻五 板倉の郷

七 特色・所見

北海老瀬の大杉唯子は、比較的ゆったりとした演奏であるが、活気のある唯子である。繼承者によると、現在の唯子はまだ百パーセントの出来ではないとのことだが、週一回の練習を続けてるので、後継者の存続も含めて将来へ期待できる郷土芸能である。

(小荷田 武)



〔北海老瀬 大杉唯子〕

悉皆調查一覽表

悉皆調査一覽

番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	1 前橋市	
					市指定	備考
1	産泰神社太々神楽	下大屋	産泰神社太々神楽保存会	四月一七日・一八日		
2	二之宮赤城神社太々神楽	二之宮	二之宮町無形文化財保存会	一月一日・四月一五日		
3	片貝神社太々神楽	西片貝	片貝神社太々神楽保存会	一月一三日・四月一三日	市指定	
4	大塙神社太々神楽	嶺	大塙神社太々神楽保存会	五月一日		
5	春日神社太々神楽	上佐鳥	春日神社太々神楽保存会	五月三日		
6	植野稻荷神社太々神楽	總社	植野稻荷神社太々神楽保存会	四月第一日曜		
7	飯玉神社太々神楽	後閑	後閑町飯玉神社御神楽保存会	一月一日・四月第一日曜		
8	總社神社太々神楽	元總社	總社神社太々神楽保存会	三月一五日		
9	雷電神社太々神楽	上新田	雷電神社神楽保存会	四月八日		
10	駒形太々神楽	駒形	駒形町太々神楽保存会	四月一五日・一〇月一七日		
11	泉沢の獅子舞	泉沢	泉沢町無形文化財保存会	四月一日		
12	上裏の獅子舞	上裏	上裏獅子舞保存会	七月一七日	市指定	
13	野良犬の獅子舞	清野	清野町野良犬獅子舞保存会	四月一六日・一〇月八日	市指定	
14	立石の獅子舞	總社	立石獅子舞保存会	一〇月第一土日曜		
15	總社神社上宿町獅子舞	元總社	總社神社上宿町獅子舞保存会	三月一五日		
16	江田の獅子舞	江田	江田町獅子舞保存会	三月一九日・一〇月九日		
17	西善の獅子舞	西善	西善町獅子舞保存会	七月		
18	東善の獅子舞	東善	東善町獅子舞保存会	一月一五日・七月二十五日		
19	堤町の獅子舞	堤	堤町自治会	七月第三日曜		
20	富田の紙團	富田	富田町屋台保存会	三月三一日・四月一日・一〇月一六日		
21	片貝の紙團	東片貝	東片貝自治会	七月第四土日曜		
22	駒形の紙團		若獅子会	八月第一日曜		

番号	民俗芸能の名称												伝承地	伝承団体名	上演期日	備考									
47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	
ナンマイダンボ	二子山由来和讃	囃子	囃子	囃子	囃子	囃子	囃子	囃子	囃子	若宮町一丁目の祇園	雷電神社祭典	新前橋祭りばやし	元總社町いなば祭り囃子	若宮	平和	城東	大手町	紅雲	表町二丁目	表町二丁目	表町二丁目	表町二丁目	表町二丁目	表町二丁目	
日輪寺	東大室	朝日	三河	三河町	朝日町	最善寺梅花講	日輪寺町親と子のふれあいの会	八月一七日	四月一日・一〇月二〇日	日輪寺	日輪寺町親と子のふれあいの会	八月第一土曜	八月第二土曜	八月第一土曜	八月第一土曜	八月第一土曜	八月第一土曜	八月第一土曜	八月第一土曜	八月第一土曜	八月第一土曜	八月第一土曜	八月第一土曜	八月第一土曜	
青柳の祇園	上佐鳥の祇園	六供町囃子組	日枝神社秋祭	山王	山王町自治会(中斷中)	元總社	總社神社祭太鼓保存会	總社神社祭太鼓保存会(中斷中)	野馬自治会(中斷中)	石倉町中部自治会	住吉町二丁目愛宕神社	住吉町二丁目おはやし保存会	住吉町二丁目おはやし保存会	上泉町四区保存会	上泉	大手町二丁目の祇園	上大島の祇園	上大島	大手	お囃子爱好者会	お囃子爱好者会	一〇月	七月二五日	一〇月	
青柳	上佐鳥	六供	山王	山王町自治会(中斷中)	元總社	總社	總社神社祭太鼓保存会	總社神社祭太鼓保存会	野馬自治会(中斷中)	石倉	石倉	石倉	石倉	上泉	住吉町二丁目の祇園	上泉の祇園	住吉町二丁目の祇園	住吉町二丁目の祇園	住吉	住吉	住吉	一〇月	八月七日・八日	五月二日・一〇月一七日	
青柳町郷土芸能保存会	上佐鳥町自治会	六供町囃子組保存会	山王町自治会(中斷中)	山王	山王町自治会(中斷中)	元總社	總社神社祭太鼓保存会	總社神社祭太鼓保存会	野馬自治会(中斷中)	石倉町中部自治会	住吉町二丁目愛宕神社	住吉町二丁目おはやし保存会	住吉町二丁目おはやし保存会	上泉町四区保存会	上泉	大手町二丁目の祇園	上大島の祇園	上大島	大手	お囃子爱好者会	お囃子爱好者会	一〇月	三月一五日・一〇月九日	-	-

72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	西光寺和讃	
上青梨子の盆踊り	かつぎ地蔵	立石の鳥追い	かつぎ地蔵	山王の鳥追い	渡御行列	裸みこし	裸兵衛踊り	野郎万歳	芝居弥次喜多道中記	雅楽	二之宮式三番叟	下長崎	木遣唄	栗島の百万遍	百万遍念仏	伊勢音頭	石投げ踊り	花和讃	稻荷藤節	花和讃	百万遍念仏	百万遍念仏	天道念仏	天道念仏	上佐鳥	
上青梨子	箱田	箱田	總社	總社	總社	南	泉沢	泉沢	泉沢	泉沢	泉沢	泉沢	泉沢	泉沢	泉沢	泉沢	泉沢	泉沢	泉沢	泉沢	大友	元總社	東上野	東上野町自治会	前橋南部詠歌和讃の会	
上青梨子町自治会	東箱田・後家町地蔵様保存会	立石子ども会	江田町子供育成会	植野自治会	水神社氏子	水神社氏子	泉沢町郷土芸能保存会	泉沢町郷土芸能保存会	泉沢町郷土芸能保存会	二之宮町無形文化財保存会	二之宮町無形文化財保存会	下長崎	前橋吉幸木遣保存会	栗島百万遍保存会	栗島町山王自治会	總社	總社	總社	總社	總社	大友町百万遍保存会	阿弥陀寺町	東上野町	四月一五日	七月一六日	前橋市
一一月	八月一三日	一月一五日	八月一四日	一〇月第二日曜	七月一四日	不定期	不定期	不定期	不定期	四年一五日	四年一六日	七月二二日	七月二二日	七月二二日	七月二二日	七月二二日	七月二二日	七月二二日	七月二二日	七月二二日	七月二二日	七月二二日	七月二二日	七月二二日	每年	

2 高崎市

番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
21	八幡八幡宮太々神楽	八幡	八幡	毎年・春・秋	市指定
20	並榎町の獅子舞	並榎	並榎町獅子舞保存会	四月二日・三日	
19	西貝沢の獅子舞	西貝沢	西貝沢獅子舞保存会	三月一九日・一〇月九日	
18	羅漢町の獅子舞	羅漢	羅漢町獅子舞保存会	不定期	
17	下流町の獅子舞	下流	下流町獅子舞保存会	三月一五日・九月九日	
16	大八木町の獅子舞	大八木	大八木町獅子舞保存会	三月二六日・二七日・一〇月八日・九日	
15	阿久津町の獅子舞	阿久津	阿久津町獅子舞保存会	一〇月一五日	
14	下小塙町北野神社獅子舞	下小塙	下小塙町獅子舞保存会	三月二五日・一〇月九日	
13	倉賀野町の獅子舞	倉賀野	倉賀野町獅子舞保存会	毎年	
12	貞沢町旧東組獅子舞保存会	貞沢	貞沢町旧東組獅子舞保存会	一〇月	
11	小八木町の獅子舞	小八木	小八木町獅子舞保存会	三月・一〇月	
10	寺尾町の獅子舞	寺尾	寺尾町獅子舞保存会	隔年	
9	飯塚獅子舞	飯塚	飯塚町獅子舞保存会	四月八日・一〇月一九日	
8	清水の獅子舞	石原	石原町清水獅子舞保存会	毎年	
7	台新田町の獅子舞	台新田	台新田町獅子舞保存会	一〇月九日	
6	上中居町の獅子舞	上中居	上中居町獅子舞保存会	三月二七日	
5	劍崎町の獅子舞	劍崎	劍崎町獅子舞保存会	一〇月一五日	
4	野附町の獅子舞	野附	野附町獅子舞保存会	每年・春・秋	
3	南大類の獅子舞	南大類	南大類町獅子舞保存会	三月一八日・一九日	
2	浜川町の獅子舞	浜川	浜川町獅子舞保存会	三月一五日・一〇月一五日	
1	萩原獅子舞	萩原	萩原町獅子舞保存会		

3 桐生市

番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
23	賀茂神社の太々神業	広沢	賀茂神社太々神業比講社	四月一四日・一五日・一〇月一五日	市指定
22	白瀧神社の太々神業	川内	白瀧神社太々神業保存会	八月六日・七日	市指定
21	常祇稻荷神社浦安の舞	仲町	常祇稻荷神社	毎年	
20	火伏荒神の巫女舞	天神	三宝大荒神社崇敬会	一〇月未土・日曜	
19	ひょっこ踊り	梅田	(中斷中)	五月第一日曜	
18	桐生祇園踏屋台・鉢進行	本町	桐生祇園祭典委員会	八月第一金土日曜	
17	川施餓鬼灯籠流し	西久方	法経寺精靈祭奉賛会	八月一六日	
16	日枝神社の渡御風流	梅田	日枝神社祭典委員会	七月末土・日曜	
15	西の市出開帳稚児行列	梅田	大鷲宮祭典委員会	一一月第一日曜	
14	奉納地火花	西久方	半僧坊大祭世話人会	四月第二日曜	
13	百万遍大数珠操り	本町	淨蓮寺檀信徒会	一〇月一八日	
12	生念仏	浜松			
11	土用念仏	梅田			
10	小友の地唄風習	菱町	梅原薬師堂保存会	七月下旬日曜	
9	皆沢地区の百万遍念仏	梅田	地唄風習保存会	毎年	
8	桐生祇園囃子	本町	桐生町皆沢地区	八月一七日	不定期
7	桐生木遣		桐生木遣保存会	八月	
6	謡曲(宝生連)		桐生宝生会	五月	
5	謡曲(綱世連)		桐生観友会		
4	賀茂神社御簾拂事		桐生木遣保存会		
3	賀茂神社御簾拂事				
2	御詠歌	広沢			
1	御詠歌	梅田			
御詠歌	御詠歌	宮本	光明寺梅花講	一月一五日・二月一四日	
御詠歌	御詠歌	広沢	鳳仙寺梅花講	二月一一日・四月二九日	
御詠歌	御詠歌	大雄院	光明寺梅花講	四月八日・八月一五日	

番号	民 俗 芸 能 の 名 称		伝 承 地	伝 承 团 体 名	上 演 期 日	備 考
7	中根の獅子まわし	米沢の獅子まわし	太田市	伊勢崎市	伊勢崎市	伊勢崎市
6	御嶽神社の節労神事	御嶽神社の節労神事	太田市	伊勢崎市	伊勢崎市	伊勢崎市
5	千本木神社龍頭神舞	千本木神社龍頭神舞	太田市	伊勢崎市	伊勢崎市	伊勢崎市
4	倭文神社の田遊び	倭文神社の田遊び	太田市	伊勢崎市	伊勢崎市	伊勢崎市
3	下道寺町田植唄	下道寺町田植唄	太田市	伊勢崎市	伊勢崎市	伊勢崎市
2	上之宮	上之宮	太田市	伊勢崎市	伊勢崎市	伊勢崎市
1	南千木	南千木	太田市	伊勢崎市	伊勢崎市	伊勢崎市
	千本木神社龍頭神舞保存会	千本木神社龍頭神舞保存会	太田市	伊勢崎市	伊勢崎市	伊勢崎市
	大善寺サルナートの集い	大善寺サルナートの集い	太田市	伊勢崎市	伊勢崎市	伊勢崎市
	天王院詠讀会	天王院詠讀会	太田市	伊勢崎市	伊勢崎市	伊勢崎市
	淨蓮寺吉水講	淨蓮寺吉水講	太田市	伊勢崎市	伊勢崎市	伊勢崎市
	祥雲寺梅花講	祥雲寺梅花講	太田市	伊勢崎市	伊勢崎市	伊勢崎市
	泉龍院梅花講	泉龍院梅花講	太田市	伊勢崎市	伊勢崎市	伊勢崎市
	二月末日・四月八日	二月末日・四月八日	太田市	伊勢崎市	伊勢崎市	伊勢崎市
	四月八日・八月一二日	四月八日・八月一二日	太田市	伊勢崎市	伊勢崎市	伊勢崎市
	八月一五日・一〇月一八日	八月一五日・一〇月一八日	太田市	伊勢崎市	伊勢崎市	伊勢崎市
	一〇月九日	一〇月九日	太田市	伊勢崎市	伊勢崎市	伊勢崎市
	一〇月二十四日	一〇月二十四日	太田市	伊勢崎市	伊勢崎市	伊勢崎市
	愛宕神社祭典委員会	愛宕神社祭典委員会	太田市	伊勢崎市	伊勢崎市	伊勢崎市
	不定期	不定期	太田市	伊勢崎市	伊勢崎市	伊勢崎市
	一月一日	一月一日	太田市	伊勢崎市	伊勢崎市	伊勢崎市
	八月二十五日	八月二十五日	太田市	伊勢崎市	伊勢崎市	伊勢崎市
	市指定	市指定	太田市	伊勢崎市	伊勢崎市	伊勢崎市
	備考	備考	太田市	伊勢崎市	伊勢崎市	伊勢崎市
	備考	備考	太田市	伊勢崎市	伊勢崎市	伊勢崎市

番号	大島岡里神代神業	大島	大島岡里敬神講
民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日
備考	市指定		
1 大島岡里神代神業			四月一五に近い日曜
2 大島			
3 大島岡里敬神講			

7 館林市

番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
1 大島	薄根太々神業	磯田	薄根太々神業磯田保存会	三月二五日・四月八日・四月一八日	市指定
2 大島岡	薄根太々神業	宇楚井	薄根太々神業宇楚井保存会	四月二九日	市指定
3 大島岡	岡谷の獅子神業	岡谷	岡谷民芸保存会	四月三日	市指定
4 大島岡	榛名神社の太々神業	榛名	中斷中	四月八日	
5 大島岡	発知新田の太々神業	発知新田	廢絶		
6 大島岡	沼田祇園羅子	沼田	沼田祇園はやし保存会連合会	八月三・五日	
7 大島岡	野郎万才	岡谷	岡谷民芸保存会	四月三日	市指定
8 大島岡	沼須人形芝居		沼須人形芝居保存会	四月三日	市指定

6 沼田市

9 東別所	東別所の獅子まわし	東別所	四月一八・一九日
10 龍舞萬燈	沖之郷祇園羅子	沖之郷	七月
11 土用念仏(吉万遍)	龍舞	沖之郷	四月第二日曜
12 伊勢神社の弓引き	龍舞萬燈保存会	龍舞萬燈保存会	市指定
13 岩瀬川の浅間神社初山参り	内ヶ島	内ヶ島	市指定
14 長手の浅間神社初山参り	岩瀬川	岩瀬川	市指定
15 古戸の浅間様火祭り	太田	太田	七月七日
16 茂木の浅間様火祭り	古戸	古戸	七月二十四日
17 梅若稻荷大祭	茂木	茂木	八月
	金山	金山	八月
			五月二二日

番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
2	里神楽	館林	館林神楽保存会	七月一五日・一月一五日	
3	足次太々神楽	足次	足次神楽保存会		
4	羽附太々神楽	糖	中断中		
5	大山祇神社太々神楽	高根	中断中		
6	羽附のささら	羽附旭	羽附ささら保存会	三月一五日・六月一五日	
7	上三林のささら	上三林	上三林ささら保存会	八月一五日	市指定
8	木戸獅子舞	木戸	木戸獅子舞保存会	七月第四日曜	
9	下三林のささら	下三林	中断中	八月一五日	
10	足次獅子舞	足次	中断中		
11	ささら獅子舞	日向	中断中		
12	入ヶ谷の山車	入ヶ谷	中断中		
13	目車町の山車	仲	中断中		
14	正儀内の農村歌舞伎	大島	廃絶	三月一九日・九月一九日	
8	猿田彦神社の大和神楽	石原	大和神楽保存会	四月一二日	
7	諏訪神社太々神楽	八木原	諏訪神社太々神楽	四月一五日	
6	太々神楽	入沢	八幡宮神楽講	一〇月九日	
5	川島の獅子舞	川島	川島獅子舞保存会	行幸田	市指定
4	行幸田の獅子舞	行幸田	行幸田獅子舞保存会	行幸田	
3	太々神楽			四月一七日・一〇月九日	
2	諏訪神社太々神楽			市指定	
1	猿田彦神社の大和神楽				
川原	山車まつり	裏宿	元町	隔年	隔年
	山車まつり	渋川まつり	渋川まつり	渋川まつり	渋川まつり
	山車まつり	渋川まつり	渋川まつり	渋川まつり	渋川まつり
	山車まつり	渋川まつり	渋川まつり	渋川まつり	渋川まつり

9 藤岡市					
番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
1	大戸町太々神樂	大戸	大戸町太々神樂組	四月八日	
2	宮本町太々神樂組	宮本	宮本町太々神樂組	四月一日	
3	下栗須代々神楽組	下栗須	下栗須代々神楽組	三月一五日	
4	上大塚太々神樂	上大塚	上大塚太々神樂組	四月三日	
5	本郷下郷太々神樂	本郷	本郷下郷太々神樂組	三月一九日	
6	立石太々神樂	立石	立石太々神樂組	一月一〇日・四月一〇日・二月一〇日	
7	中栗須太々神樂	中栗須	中栗須太々神樂組	四月七日	
8	白石太々神樂	白石	白石太々神樂組	四月三日	
9	鹿島代々神樂	上日野	胸留・尾根組	一〇月一〇日	
10	地守神社太々神樂	西平井	鹿島神社里神樂保存会	四月一日	
11	西平井太々神樂	東平井	東平井太々神樂舞子	一月八日	
12	東平井太々神樂	細谷戸組		一月二五日	
13	細谷戸神樂獅子				

9	山車まつり	上之町	渋川まつり山車まつり	隔年	
10	山車まつり	中之町	渋川まつり山車まつり	隔年	
11	山車まつり	下之町	渋川まつり山車まつり	隔年	
12	山車まつり	新町	渋川まつり山車まつり	隔年	
13	山車まつり	寄居	渋川まつり山車まつり	隔年	
14	山車まつり	長塚	渋川まつり山車まつり	隔年	
15	山車まつり	坂下	渋川まつり山車まつり	隔年	
16	渋川歌舞伎	下郷	渋川歌舞伎	定期	
17	半田歌舞伎	半田	渋川歌舞伎阪東座	不定期	

番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
37	田本神楽獅子	上日野	田本神楽組	一〇月一〇日・一月九日・二九日	
36	森新田神楽獅子	森新田	森新田中組	一月一日	
35	高井戸神楽獅子	下日野	高井戸組	四月三日・七月五日・一〇月九日	
34	上平獅子舞	上日野	上平獅子組	一〇月一〇日	
33	小柏獅子舞	上日野	小柏獅子組	一〇月一〇日	
32	鹿島獅子舞	上日野	鹿島獅子舞組	一〇月一〇日	
31	印地獅子舞	上日野	印地獅子舞組	四月三日・一〇月一九日	
30	塙平獅子舞	下日野	塙平獅子舞組	四月三日・一〇月一九日	
29	中倉獅子舞	下日野	中倉獅子舞組	一〇月一五日	
28	鮎川獅子舞	下日野	鮎川獅子舞組	一〇月一五日	
27	上大塚獅子舞	上大塚	上大塚南組	三月一五日・一〇月一九日	
26	中栗須獅子舞	中栗須	中栗須獅子舞組	一月一七日・一八日	
25	下大塚獅子舞	下大塚	下大塚獅子舞組	一〇月一九日	
24	鮎川獅子舞	森	鮎川獅子舞組	三月一五日	
23	上大塚獅子舞	神田	保美獅子舞保存会	四月一五日	
22	中栗須獅子舞	山崎	寺山獅子舞保存会	一〇月一九日	
21	下大塚獅子舞	山崎	山崎獅子舞保存会	一〇月一九日	
20	鮎川獅子舞	神田	神田獅子舞保存会(中斷中)	四月一五日	
19	上平獅子舞	立石新田	砂原獅子舞組(中斷中)	三月一五日	
18	小柏獅子舞	立石新田	綠壁獅子舞組(中斷中)	二月一日・一〇月一九日	
17	鹿島獅子舞	馬渡戸	馬渡戸獅子組(中斷中)	一〇月一〇日	
16	高井戸神楽獅子	宮本町	緑町屋台獅子保存会	七月一五日・一〇日	
15	上平獅子舞	宮本町	宮本町祭りばやし保存会	七月一五日・一〇日	
14	田本神楽獅子	鷹匠町	鷹匠町屋台ばやし(紙團)	七月一五日・一〇日	

6	5	4	3	2	1	番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考		
神楽	神楽	太々神樂	神楽	太々神樂	太々神樂								
一ノ宮	黒川	十日市	藤木	神成	丹生神社太々神樂保存会								
神楽	神楽	太々神樂	藤木神楽保存会	宇芸神社太々神樂保存会									
一ノ宮賀前神社神樂保存会	黒川地区	蛇宮神社太々神樂保存会	一月一四日	一月三日	一月二七日	三月二日	一〇月一四日	一〇月一九日	一〇月一九日	四月三日	四月三日～九日		
53	岡本屋台ばやし	上日野	岡本組										
49	駒留屋台ばやし	下日野	駒留組										
50	高山御靈ばやし	高山	高山御靈ばやし保存会										
51	田本屋台ばやし	上日野	田本組										
52	鹿島屋台ばやし	上日野	鹿島組										
39	仲町屋台ばやし（祇園）	仲町	仲町祭りばやし保存会										
40	七丁目屋台ばやし（祇園）	七丁目	七丁目子供会										
41	六丁目屋台ばやし（祇園）	六丁目											
42	五丁目屋台ばやし（祇園）	五丁目											
43	四丁目屋台ばやし（祇園）	四丁目											
44	三丁目屋台ばやし（祇園）	三丁目	三丁目お囃子保存会										
45	二丁目屋台ばやし（祇園）	二丁目											
46	一丁目屋台ばやし（祇園）	一丁目											
47	大戸町屋台ばやし（祇園）	大戸町	大戸町子供会育成会										
48	芝平屋台ばやし	芝平組											
49	駒留屋台ばやし	下日野	駒留組しゃぎり連										
50	高山御靈ばやし	高山	高山御靈ばやし保存会										
51	田本屋台ばやし	上日野	田本組										
52	鹿島屋台ばやし	上日野	鹿島組										

10 富岡市

番号	民俗芸能の名称			伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
30	獅子舞	上丹生	神成	浅香入神楽	浅香入神楽保存会(中止)	一月二八日	
29	獅子舞	中断中	中断中	南後園	南後園	廃絶	
28	獅子舞(柳葉流)	桑原	桑原獅子舞保存会(中止中)	下高瀬	下高瀬	廃絶	
27	獅子舞	桑原	一〇月一五日	星田	星田獅子舞保存会	隔年・一〇月一五日	
26	獅子舞	岡本	一〇月一四日	稻荷	稻荷流宇田獅子舞保存会	隔年・一〇月一五日	
25	獅子舞	野上	三月一五日	宇田	宇田獅子舞保存会	隔年・一〇月一五日	
24	獅子舞	藤木	不定期	中高瀬	中高瀬獅子舞保存会	隔年・四月一日	
23	獅子舞	南蛇井	内匠	内匠獅子舞保存会	一〇月一五日		
22	獅子舞	相野田	原	山口	山口獅子舞保存会	一〇月一四日・一五日	
21	青葉流獅子舞	南蛇井	下丹生	下丹生	下丹生獅子舞保存会	一〇月一五日	
20	御殿流獅子舞	相野田	上丹生	上丹生	上丹生下組獅子舞保存会	一〇月一四日・一五日	
19	獅子舞	南蛇井	原	南蛇井	南蛇井原組獅子舞保存会	一〇月一四日・一五日	
18	佐久良獅子舞	上南蛇井	下丹生	上南蛇井	上南蛇井獅子舞保存会	一〇月一四日・一五日	
17	獅子舞	相野田	上丹生	下丹生	下丹生獅子舞保存会	一〇月一五日	
16	獅子舞	南蛇井	原	南蛇井	南蛇井原組獅子舞保存会	一〇月一四日・一五日	
15	福柳金湯流あばれ獅子舞	内匠	原	内匠	内匠獅子舞保存会	一〇月一五日	
14	中高瀬獅子舞	中高瀬	中高瀬	中高瀬	中高瀬獅子舞保存会	隔年・四月一日	
13	稻荷流宇田獅子舞	星田	星田	星田	星田獅子舞保存会	隔年・一〇月一五日	
12	星田獅子舞	稻荷	稻荷	稻荷	稻荷流宇田獅子舞保存会	隔年・一〇月一五日	
11	奉納神楽	曾木	曾木	曾木	曾木神社御神楽(中止中)	一月二八日	
10	神楽	君川	君川	君川	君川	廃絶	
9	神楽舞						
8	神楽						
7	浅香入神楽						

1	番号	11 安 中 市	31
野殿白山神社の太々神樂	民俗芸能の名称	富岡お囃子	富岡お囃子保存会(富若)
野殿	伝承地	富岡	富岡
中斷中	伝承団体名	上州浅香入八木節	上州浅香入八木節保存会
高瀬歌舞伎	高瀬	西上州八木節	西上州八木節保存会
藤木歌舞伎	藤木	宮崎八木節	宮崎八木節保存会
高瀬歌舞伎	高瀬	黒岩歌舞伎	黒岩歌舞伎
	廃絶	黒岩	黒岩
		曾木	曾木
		中高瀬	中高瀬
		中沢	中沢
		南蛇井	南蛇井
		中断中	中断中
		上丹生	上丹生
		世話人会	世話人会
		高瀬	高瀬神社凶事流し保存会
		後質	東小野神社氏子
		大島	大島火まつり保存会
		下黒岩	大島火まつり保存会
		蘿	鳴沢不動尊燈籠祭
		上丹生	神農原百八燈
		神成	新堀百八燈
		大島	新堀百八燈
		茅の輪くぐり	茅の輪くぐり
		鳥追い	鳥追い
		百万遍	百万遍
		凶事流し	凶事流し
		百八燈	百八燈
		燈籠祭	燈籠祭
		奉納相撲	奉納相撲
		式三番	式三番
		みこし	みこし
		拳骨踊り	拳骨踊り
		曾木郷土芸能保存会	曾木郷土芸能保存会
		廃絶	廃絶
		不定期	不定期
		定期・四月一日	定期・四月一日
		七月二〇日	七月二〇日
		一〇月一五日	一〇月一五日
		八月二七日・二八日	八月二七日・二八日
		八月一六日	八月一六日
		七月二十四日	七月二十四日
		七月二四日	七月二四日
		一月一五日	一月一五日
		八月一六日	八月一六日
		八月一七日	八月一七日
		四月第二土曜	四月第二土曜

番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
2	豊宮秋前神社太々神楽	豊宮	豊宮太々神楽保存会	四月一日	市指定
3	下秋間中組獅子舞	下秋間	下秋間中組獅子舞保存会	四月三日	
4	上磯部赤城神社獅子舞	上磯部	上磯部赤城神社獅子舞保存会	一〇月一五日	
5	岩井獅子舞	岩井	岩井獅子舞保存会	一〇月一四日	
6	小俣獅子舞	小俣	小俣獅子舞保存会	八月又は一〇月	
7	嶺獅子舞	嶺	嶺獅子舞保存会	八月第一日曜	
8	後小峰獅子舞	下間仁田	後小峰獅子舞保存会	四月三日・一〇月一五日	
9	中野殿獅子舞	野殿	中野殿獅子舞保存会	一〇月一二日	
10	東上秋間車神社獅子舞	東上秋間	東上秋間東神社獅子舞保存会	一〇月一二日	
11	下秋間上組獅子舞	下秋間	下秋間上組獅子舞保存会	一〇月一二日	
12	下後閣威德神社獅子舞	下後閣	下後閣威德神社獅子舞保存会	一〇月一二日	
13	豊宮獅子舞	豊宮	豊宮獅子舞保存会	一〇月一二日	
14	中野谷神社獅子舞	中野谷	中野谷	一〇月一二日	
15	中秋間大森神社獅子舞	中秋間	中秋間	一〇月一二日	
16	板鼻開口の獅子舞	板鼻	板鼻	一〇月一二日	
17	外城の獅子舞	中秋間	中秋間	一〇月一二日	
18	安中中宿の燈籠人形	中宿	中宿	一〇月一二日	
19	秋間人形芝居（助たか人形）	下秋間	中宿系操燈籠人形保存会	不定期	
3	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
2	下南室の太々御神楽	下南室		四月四日	
1	箱田獅子舞	箱田		四月一五日	
3	天王さんの獅子	上箱田		七月一五日	

12 北橘村

13 赤城村

番号	番号	民俗芸能の名称	民俗芸能の名称	伝承地	伝承地	上演期日	上演期日	備考	備考	番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承地	上演期日	備考
1	カド付けの獅子舞	三夜沢赤城神社神楽	三夜沢	武井	新里村	18	新里村	中断中	中断中	1	年丸の獅子舞	勝保沢	勝保沢	四月一五日	村指定
2	大前田諏訪神社獅子舞	大前田	大前田	赤城神社氏子	宮城村	16	宮城村	大前田諏訪神社氏子	大前田	3	三原田の獅子舞	年丸若衆組(中斷中)	勝保沢太々神楽保存会	勝保沢太々神楽保存会	村指定
1	津久田の獅子舞	津久田	津久田	津久田仲組	津久田	4	津久田の獅子舞	津久田	津久田	4	津久田の獅子舞	津久田仲組	津久田	八月一日	村指定
2	盆踊り(手踊り)	満呂木	満呂木	満呂木若衆組(中斷中)	満呂木	5	盆踊り(手踊り)	満呂木	満呂木	6	ナンマイダンボ(地蔵廻し)	上三原田	上三原田	八月一三日・一四日・一五日	村指定
3	三原田獅子舞	三原田	三原田	三原田獅子舞保存会	三原田	7	宮田祇園	宮田	宮田	7	宮田祇園	宮田	宮田	八月	村指定
4	津久田の獅子舞	津久田	津久田	津久田仲組	津久田	8	猫祇園	敷島	敷島	8	津久田の獅子舞	第20区(宮田)	第20区(宮田)	七月二七日	村指定
5	盆踊り(手踊り)	満呂木	満呂木	満呂木若衆組(中斷中)	満呂木	9	棚下紙園	棚下	棚下	9	津久田の獅子舞	第5区(敷島)	第5区(敷島)	七月二七日	村指定
6	ナンマイダンボ(地蔵廻し)	上三原田	上三原田	上三原田日向子供会	上三原田	7	宮田祇園	宮田	宮田	10	津久田の獅子舞	第10区(棚下)	第10区(棚下)	七月最終日曜	村指定
7	宮田祇園	宮田	宮田	上三原田日向子供会	上三原田	8	猫祇園	敷島	敷島	11	津久田の獅子舞	第12区(満呂木)	第12区(満呂木)	七月最終日曜	村指定
8	津久田の獅子舞	津久田	津久田	津久田人形仲組保存会	津久田	9	棚下紙園	棚下	棚下	12	津久田の獅子舞	上三原田	上三原田	八月二七日	村指定
9	南雲祇園	永井小川田	永井小川田	上三原田歌舞伎舞台	上三原田	10	津久田	津久田	津久田	13	津久田の獅子舞	津久田	津久田	八月二七日	村指定
10	津久田の獅子舞	津久田	津久田	津久田人形仲組保存会	津久田	11	満呂木	満呂木	満呂木	14	地芝居	村内一円	赤城村文化協会古典芸能部	一〇月・一一月	村指定
11	満呂木	満呂木	満呂木	上三原田歌舞伎舞台操作委員会	上三原田	12	津久田	津久田	津久田	13	津久田の獅子舞	津久田	津久田	不定期	村指定
12	津久田の獅子舞	津久田	津久田	津久田人形仲組保存会	津久田	13	津久田	津久田	津久田	14	地芝居	村内一円	赤城村文化協会古典芸能部	一〇月・一一月	村指定
13	津久田の獅子舞	津久田	津久田	津久田人形仲組保存会	津久田	14	津久田	津久田	津久田	15	津久田の獅子舞	津久田	津久田	不定期	村指定
14	津久田の獅子舞	津久田	津久田	津久田人形仲組保存会	津久田	15	津久田	津久田	津久田	16	宮城村	宮城村	宮城村	七月最終日曜	村指定

番号	民 俗 芸 能 の 名 称	伝 承 地	伝 承 团 体 名	上 演 期 日	備 考
番号	民 俗 芸 能 の 名 称	伝 承 地	伝 承 团 体 名	上 演 期 日	備 考
3	1 棣名神代神楽	1 番号 棣名山	1 番号 小中獅子舞	1 番号 前田原獅子舞(ささら)	1 番号 下田沢
2	2 神戸戸様名神社の神楽	2 神戸 戸	2 満丸獅子舞(ささら)	2 新川前田原獅子舞保存会	2 上田沢
1	1 駒寄一五沢獅子舞	1 中断中	1 小中獅子舞保存会	1 九月第一日曜	1 九月二四日
21	21 棣名町				
20	20 東村(勢多郡)				
19	19 黒保根村				
5	5 鎌木の数珠念仏	5 新川	6 若衆の謡初	6 新川	6 中断中
4	4 新川八坂神社の紙面囃子	4 新川	7 アヤメ踊	7 野	7 中断中
3	3 山上宿の紙面囃子	3 山上	8 大久保の淨瑠璃	8 大久保	8 中断中
2	2 山上粟防神社の紙面	2 山上	9 新川の淨瑠璃	9 新川	9 中断中
			10 新川菅原神社の狂言	10 新川	

1	番号																4	上神麻平獅子舞	上里見	上神麻平獅子舞保存会	
	精名神社の神業	民俗芸能の名称	番号	精名神社太々神業	民俗芸能の名称	伝承地	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考							5	神山下町新井田中獅子舞	上里見	神山下村新井田中獅子舞保存会	
	西明屋	伝承地		水沼獅子舞	水沼獅子舞	椎田	椎田	椎名神社太々神業保存会	四月三日・二月二三日							6	中里見獅子舞	中里見	中里見獅子舞保存会	四月一五日・一〇月九日	
	中断中	伝承団体名		川浦獅子舞	川浦獅子舞	川浦	川浦	川浦獅子舞保存会	一〇月一八日							7	三ツ子沢獅子舞	三ツ子沢	中里見獅子舞保存会（中斷中）		
	四月一五日	上演期日		花若連八木節保存会	花若連八木節保存会	川浦	川浦	宮本町山車保存会	四月二〇日	不定期						8	斎渡北野神社獅子舞	斎渡	斎渡北野神社獅子舞保存会		
		備考														9	宮谷戸獅子舞	宮谷戸	宮谷戸獅子舞保存会		
																10	上大島念佛講	上大島	上大島		
																11	上里見神山下町山車	上里見	上里見神山下町山車保存会		
																12	上里見神山上町山車	上里見	上里見神山上町山車保存会		
																13	上里見仲町山車	上里見	上里見仲町山車保存会		
																14	下室田中町山車	下室田	下室田中町山車保存会		
																15	下室田中町山車	下室田	下室田中町山車保存会		
																16	宮本町山車	下室田	宮本町山車保存会		
																17	下室田下町山車	下室田	下室田下町山車保存会		

番号	民 俗 芸 能 の 名 称	伝 承 地	伝 承 团 体 名	上 演 期 日	備 考
2	東明屋諏訪神社の獅子舞	東明屋	東明屋諏訪神社氏子	不定期	町指定
3	生原北野神社の獅子舞	生原	生原北野神社獅子舞保存会	八月一四日・一五日	町指定
4	中善地の盆おどり	中善地	中善地盆おどり保存会	不定期	町指定
5	十二階松くずし扇子踊り	柏木沢	十二階松くずし扇子踊り保存会	八月一三日・一四日・一五日	町指定
6	上芝の八木節	上芝	上芝八木節保存会	八月一三日・一四日・一五日	町指定
7	今宮の地蔵祭	柏木沢	今宮地区	七月一七日	町指定
8	百萬遍	白川		一月二二日～一〇月二二日	
9	二十二夜様				
13	群馬町				
12	民 俗 芸 能 の 名 称	伝 承 地	伝 承 团 体 名	上 演 期 日	備 考
11	金古諏訪神社太々神楽	金古	金古諏訪神楽保存会	三月二七日	
10	保渡田諏訪神社の獅子舞	保渡田	保渡田獅子舞保存会	四月一二日・一〇月九日	町指定
9	金古諏訪土俵獅子舞	金古	金古諏訪土俵獅子舞保存会	三月二七日・一〇月九日	
8	三ツ寺獅子舞	三ツ寺	三ツ寺獅子舞保存会	三月二七日・一〇月九日	
7	棟高の獅子舞	棟高			
6	劍舞				
5	保渡田棟名神社の獅子舞	保渡田			
4	三ツ寺獅子舞	三ツ寺			
3	金古諏訪神社の獅子舞	金古			
2	保渡田諏訪神社の獅子舞	保渡田			
1	金古諏訪神社太々神楽	金古			
13	人形芝居（かい芝居）				
12	足門の地芝居				
11	三ツ寺の地芝居				
10	金古上宿台				
9	祭太鼓				
8	稲荷台の獅子舞				
7	稲荷台獅子舞				
6	稲荷台				
5	稲荷台				
4	井出				
3	金古祭太鼓保存会				
2	金古上宿台保存会				
1	金古上宿台保存会（中断中）				
13	西国分	町指定			
12	足門				
11	中 断 中				
10	三ツ寺				
9	中 断 中				
8	三月一五日・一〇月九日				
7	一〇月九日				
6					
5					
4					
3					
2					
1					

1	番号	民俗芸能の名称	村上太々神楽
	村上	伝承地	村上太々神楽保存会
	每年	上演期日	八月一～八月三日
	村指定	備考	

26 小野上村

番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
1	神明宮太々神楽	中郷	神明宮太々神楽保存会	四月一六日～五月一日	
2	諏訪神社太々神楽	上白井	諏訪神社太々神楽保存会	四月二二日～四日・五月一日	村指定
3	諏訪神社獅子舞	上白井		四月二二日～四日・五月一日	
4	八幡宮獅子舞	中郷		四月二二日～四日・五月一日	
5	地蔵まわし	前田向他		四月二二日～四日・五月一日	
6	伊熊歌舞伎	上白井	中断中	八月一～八月三日	

14	福島地芝居	観音寺芝居	冷水寺芝居	北原の芝居	北原	足門	足門	中斷中	中斷中	中斷中	福島
15				稻荷台の回り舞台	稻荷台	中斷中	中斷中	中斷中	中斷中	中斷中	
16				足門の村芝居と能面		中斷中	中斷中	中斷中	中斷中	中斷中	
17				金古見世物	金古	中斷中	中斷中	中斷中	中斷中	中斷中	
18				中里の火渡り	中里	中里火渡り保存会					
19				棟高の花火	棟高						
20				中泉の花火	中泉						
21				觀音寺の謡曲	觀音寺						
22											
23											
24											
25											

番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
2	中尾獅子舞	村上		毎年	村指定
3	小野子獅子舞	小野子	上小野子獅子舞保存会	毎年	村指定
4	八木節	小野上	上州小野上温泉太鼓	休止	
5			上州小野上温泉太鼓保存会	上州小野上温泉太鼓保存会	

番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
1	常将神社太々神楽	山子田	常将神社太々神楽部	四月一五日・一〇月九日	村指定
2	聖宮神社太々神楽	広馬場	聖宮神社太々神楽部	四月一五日	村指定
3	新井八幡宮太々神楽	新井	八幡宮太々神楽部	四月一五日	村指定
4	大宮神社獅子舞	長岡	大宮神社獅子舞保存会	四月一五日・一〇月九日	村指定
5	新井獅子舞	新井	新井獅子舞保存会	四月一五日・一〇月九日	村指定
6	宿福荷神社獅子舞	広馬場	宿福荷神社獅子舞保存会	二月九日	村指定

29 吉岡町

番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
1	太々神楽	大久保	太々神楽三楽講	四月第一日曜	
2	南下八幡獅子舞	南下	南下八幡獅子舞保存会	四月一〇日	
3	溝祭獅子舞	溝祭	溝祭獅子舞保存会	四月第一日曜	
4	大祓獅子舞	南下	吉岡町獅子舞保存会大祓獅子組	二月三日・四月第二日曜	
5	屋台獅子	大久保	大久保屋台獅子舞保存会		
6	大久保青年会盆踊り	大久保			
7	おくんち	大久保			
8	道祖神七小屋参り	大久保			
		中筋中			
				一月七日～三日	一〇月八日・九日・隔年

番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
1 太々神樂	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
2 山車囃子	柄本太々神樂	万場	四月二九日	八月一五日	
3 横樽三段落し	柄本太々講社 おはやし保存会	黒田	不定期		
11 平氏ノ宮獅子舞	三波川平清	平滑の氏子(中断中)	一〇月九日		
12 八坂神社獅子舞	三波川大奈良	八坂神社氏子連(中断中)	一〇月一五日		
13 熊野皇大神宮獅子舞	三波川雲尾	熊野皇大神宮氏子(中断中)	一月九日		
14 日枝神社獅子舞	紙園囃子	淨法寺宇塙	四月九日		
15 紙園囃子	紙園囃子	日枝神社獅子舞保存会			
16 紙園囃子	紙園囃子	鬼石	七月一四日・五日・一月三日		
17 紙園囃子	紙園囃子	鬼石	七月一四日・五日・一月三日		
18 紙園囃子	紙園囃子	鬼石	七月一四日・五日・一月三日		
19 三杉太鼓	三杉太鼓	鬼石	七月一四日・五日・一月三日		
20 精進太鼓	精進太鼓	鬼石	七月一四日・五日・一月三日		
21 長根	坂原	仲町区	七月一四日・五日・一月三日		
		上町区	七月一四日・五日・一月三日		
		鬼石三杉太鼓	七月一四日・五日・一月三日		
		中斷中	十月十五日に近い日曜		
			不定期		
			町指定		

2	八倉獅子舞	平原	中里村芸能保存会	九月第一日曜
3	尾附獅子舞	尾附	中里村芸能保存会	九月第四日曜
4	橋倉獅子舞	平原	中里村芸能保存会	九月第一日曜
5	オンマラサマ	間物		一月一四日

35 上野村

番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
1	野栗太々神楽	新羽	野栗神楽保存会	八月一日・一〇月第一日曜	村指定
2	乙母太々神楽	乙母	野栗神楽保存会	九月最終日曜	村指定
3	川和獅子舞	川和	野栗神楽保存会	一〇月二日	村指定
4	野栗沢獅子舞	野栗沢	野栗沢獅子舞保存会	九月二日	村指定
5	塙ノ沢獅子舞	塙原	野栗沢獅子舞保存会	九月二日	村指定
6	須郷獅子舞	檜原	野栗沢獅子舞保存会	九月二日	村指定
7	黒川獅子舞	中斷中	塙ノ沢獅子舞	九月中旬日曜	村指定
8	カンカンノー	乙父	カンカン踊り保存会	不定期	備考

36 妙義町

番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
1	高太神社神楽	下高田	高太神社神楽保存会	一〇月・一一月三日	
2	菅原神社太々神楽	菅原	菅原神社太々神楽保存会	三月二十五日・一一月三日	
3	岩戸かぐら	中断中	菅原神社獅子舞保存会	一〇月二十五日	
4	一人かぐら	中断中	菅原神社獅子舞保存会	一一月三日	
5	菅原神社獅子舞	中里	中里獅子舞保存会	一一月三日	
6	中里獅子舞	下高田	高太神社獅子舞保存会	一〇月一五日・一一月三日	
7	高太神社獅子舞				

番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
8	三人獅子舞	八木連	八木連郷土芸能保存会(中断中)	不定期	
9	獅子舞	行沢			
10	獅子舞	下高田	中断中		
11	獅子舞	妙義	中断中		
12	道化万歳	八木連	八木連郷土芸能保存会(中断中)	不定期	

37 下仁田町

番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
1	清水沢の太々神楽	西野牧	中断中		
2	鎌田獅子舞	鎌田	鎌田獅子舞保存会	不定期	
3	よ村組獅子舞	よ村組	よ村組獅子舞保存会	一〇月一四～一六日	
4	若宮獅子舞	若宮	若宮獅子舞保存会	一〇月一六～一七日	
5	藤田獅子舞	藤田	藤田獅子舞保存会	一〇月	
6	白山獅子舞	白山	白山獅子舞保存会	一〇月	
7	下小坂獅子舞	下小坂	下小坂郷土芸能保存会	一〇月	
8	芦の平獅子舞	芦の平			
9	根小屋獅子舞	根小屋	根小屋獅子舞保存会	一〇月	
10	野栗神社の獅子舞	二岩			
11	桑本獅子舞	桑本	中断中		

38 南牧村

番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
2	竈天之岩戸神楽	萱			
1	竈天之岩戸神楽	底瀬	底瀬獅子舞保存会	五月五日	
				九月一五日	
					備考

39 甘 楽 町			3 大日向の火とぼし	大日向	大日向区	八月一四日・一五日	県指定
番号	民 俗 芸 能 の 名 称	伝 承 地	伝 承 团 体 名	上 演 期 日	備 考		
1	轟の神楽獅子	轟	轟神楽獅子保存会	四月一五日・一〇月一五日		町指定	
2	天引の神楽舞	天引	天引神楽舞保存会	一〇月第三日曜			
3	下平組神楽舞	天引	天引獅子芸能保存会	一〇月一四日・一五日		町指定	
4	日向組神楽舞	国峰	日向組(中断中)				
5	大山組神楽舞	白倉	大山神楽保存会				
6	小幡八幡宮の神楽獅子舞	小幡	大下神楽保存会				
7	田口組神楽舞	天引	田口組神楽舞	五年毎	不定期		
8	小舟組神楽舞	上野	小舟組(中断中)	一〇月一四日・一五日		町指定	
9	下町組神楽舞	福島	中断中				
10	笛組神楽舞	福島	中断中				
11	上野組神楽舞	上野	上野組(中断中)				
12	川久保組神楽舞	善慶寺	中断中				
13	恩田組神楽舞	国峰	恩田組神楽舞(中断中)				
14	下井組神楽舞	善慶寺	下井組神楽舞(中断中)				
15	善慶寺南組神楽舞	善慶寺	南組神楽舞(中断中)				
16	原組神楽舞	秋畠	原組神楽舞(中断中)				
17	裏根組神楽舞	中断中					
18	引田組岩戸神楽舞	甘楽町23区	(中断中)				
19	久保組神楽舞	金井	久保祭り組(中断中)	毎年			
20	金井組神楽舞	白倉	原子供神楽(中断中)				
21	白倉原組の神楽舞						

番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
22	22区の神楽舞	白倉	22区神楽保存会	一〇月一五日	
23	批杷ノ木組神楽舞	秋畠	社久司大明神氏子	不定期	
24	稲荷太々神楽	秋畠	稲荷太々神楽連	一月八日・五月三日・四日	町指定
25	笛森稻荷神社の太々神楽	福島	笛森稻荷神社伶人会	一〇月一六日	町指定
26	白倉神社の太々神樂	白倉	白倉神社太々神楽	四月第三日曜日・一〇月一五日	町指定
27	那須の獅子舞	秋畠	那須獅子舞保存会	一〇月	町指定
28	天引の獅子舞	天引	天引獅子舞保存会	一〇月一五日	町指定
29	来波組獅子舞	秋畠	来波組獅子舞	不定期	
30	峰・荻ノ久保組獅子舞	秋畠	峰・荻ノ久保組獅子舞(中斷中)	不定期	
31	造石の獅子舞	造石	造石獅子舞保存会	不定期	
32	白倉組獅子舞	白倉	白倉	中斷中	
33	町谷組獅子舞	小幡	町谷組(中斷中)	毎年	
34	赤谷平組獅子舞	秋畠	中組獅子舞(中斷中)		
35	国峰組獅子舞	国峰	中組獅子舞(中斷中)		
36	城組獅子舞	秋畠	城組獅子舞(中斷中)		
37	12区下組の獅子舞	秋畠	12区下組(中斷中)		
38	第9区の獅子舞	梅ノ木平	梅ノ木平獅子舞保存会(中斷中)	不定期	
39	二ツ石組獅子舞	天引	二ツ石組獅子舞	一〇月一五日	町指定
40	庭谷の獅子舞	庭谷	天引麦供え保存会	一〇月一四日・一五日	町指定
41	東訪神社の麦供え	28区		一月七日	町指定
42	稲荷神社のお商粥神事			八月二六日	
43	小幡八幡宮の屋台囃子				
44	白倉人形芝居	白倉	羽衣会		
善慶寺					
45	腰曲				

番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
1	土壤太神楽	土壤	土壤太神楽保存会	一〇月一五日	
2	神楽	上増田	神代太々舞神楽保存会	一〇月中旬	
3	新田獅子舞	松井田	新田獅子舞保存会	不定期	
4	黒田獅子舞	行田	行田獅子舞保存会	一〇月一四日	
5	国衛獅子舞	国衛	国衛獅子舞保存会	一〇月一五日	
6	土壤獅子舞	土壤	土壤上組獅子舞保存会	一〇月一五日	
7	高森魔雲龍獅子舞	土壤	土壤中組獅子舞保存会	一〇月中旬	
8	新井獅子舞	新井	新井諏訪神社獅子舞保存会	一〇月一五日	
9	上増田獅子舞	上増田	上増田獅子舞保存会	一〇月一五日	
10	五料獅子舞	五料	小竹獅子舞保存会(中斷中)	一〇月一五日	
11	横川獅子舞	横川	横川諏訪神社獅子舞保存会	一〇月一五日	
12	稻荷流下り演しの葉獅子舞	那須	大王寺獅子舞保存会(中斷中)	一〇月一五日	
13	高梨子獅子舞	高梨子	高梨子獅子舞保存会(中斷中)	一〇月一五日	
14	仲町お囃子	仲町	仲町祭り囃子保存会	一〇月中旬	
15	森崎お囃子	新堀	森崎おはやし保存会	八月一〇日	
16	八城人形芝居	八城	八城城若座保存会	一〇月一五日	
17	義太夫	松井田	松井田義太夫保存会	一〇月一四日	
1	西中之条太々神楽	西中之条	柴宮神社芸能保存会	三月一九日	
2	山田太々神楽	山田	吾嬬神社郷土芸能保存会	四月八日・九月一五日	
3	岩本太々神楽	折田	岩本芸能保存会	三月二七日	

41 中之条町

備考

番号	民 俗 芸 能 の 名 称	伝 承 地	伝 承 团 体 名	上 演 期 日	備 考
4	中之条町伊勢宮太々神楽	中之条	中之条町伊勢宮太々神楽保存会	九月一七日	
5	五反田親都神社太々神楽	山田	五反田親都神社太々神楽保存会	五月五日	
6	下澤渡太々神楽	山田	下澤渡太々神楽保存会	四月第二日曜	
7	高津太々神楽	西中之条	高津太々神楽保存会	四月一日・九日・九月一五日	
8	折田太々神楽	折田	折田太々神楽保存会	九月二七日	
9	伊勢町太々神楽	西中之条	伊勢町太々神楽保存会	四月三日	
10	四万太々神楽	西中之条	四万太々神楽保存会	四月一日・一月上旬	
11	熊野神社太々神楽	四万寺社平	熊野神社太々神楽保存会	四月四日	
12	西中之条獅子舞	下沢渡	下沢渡獅子舞保存会	三月一九日	
13	山田獅子舞	山田	山田獅子舞保存会	四月八日・九月一五日	
14	大岩獅子舞	下沢渡	下沢渡獅子舞保存会	九月一九日	
15	反下獅子舞	上沢渡	上沢渡獅子舞保存会	九月二七日・二八日	
16	駒岩獅子舞	四万	四万	四月二九日	
17	折田獅子舞	五反田	五反田	四月一日	
18	岩本獅子舞	岩本	岩本	四月二八日・九月二七日	
19	蟻川獅子舞	蟻川	蟻川獅子舞保存会	九月二七日	
20	岩本獅子舞	鐵川	岩本芸能保存会	九月第一日曜	
21	大道獅子舞	大道	大道	九月第一日曜・五月三日	
22	平獅子舞	平	大道獅子舞保存会	三月二二日・四月一日・九月一五日	
23	大塚獅子舞	大塚	平獅子舞保存会	四月一日・九月一五日	
24	中之条	中之条	大塚獅子舞保存会	七月三一日・八月一日	
25	中之条	中之条	大塚獅子舞保存会	七月三一日・八月一日	
26	上之町	上之町	大塚獅子舞保存会	七月三一日・八月一日	
27	紙園獅子	仲之町	大塚獅子舞保存会	七月三一日・八月一日	

28	紙園聯子	中之条	志茂之町	七月三一日・八月一日
29	紙園聯子	中之条	豊町	七月三一日・八月一日
30	紙園聯子	中之条	王子町	七月三一日・八月一日
31	紙園聯子	中之条	上之町	九月第一土曜
32	紙園聯子	伊勢町	伊勢町	九月第一土曜
33	紙園聯子	伊勢町	中之町	九月第一土曜
34	紙園聯子	山田	下之町	九月第一土曜
35	紙園聯子	伊勢町	下山田区	九月一五日
36	伊勢町鳥追い	伊勢町	上ノ町・中ノ町・下ノ町	一〇月七日・八日
37	山田大竹鳥追い	山田	山田大竹地区	一月一四日
38	沢渡の鳥追い	上沢渡		一月一四日
39	岩本天道念佛	岩本		三月二一日・九月二三日

42 東村(吾妻郡)

番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
1	五町田の太々神楽	五町田	神楽連中	四月一〇日・一〇月一〇日	村指定
2	新巻の太々神楽	新巻	新巻太々神楽講中	三月二五日・九月二九日	村指定
3	榛名神社の獅子舞	岡崎	獅子舞保存会	四月八日・九月二九日	村指定
4	新巻の人形芝居	新巻	新巻の人形芝居	不定期	
5	高橋平五良の百万遍	五町田	高橋平五良地区	七月一九日	
1	大宮嚴姫神社の太々神楽	原町	大宮嚴姫神社太々神楽保存会	五月五日・九月九日	
2	川戸神社の太々神楽	川戸	川戸神社太々神楽保存会	四月一九日・一〇月九日	

43 吾妻町

番号	民俗芸能の名称			伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
3	株名神社の太々神楽			郷原	株名神社太々神楽保存会	四月二〇日	
4	鳥頭神社の太々神楽			矢倉	鳥頭神社太々神楽保存会	四月一九日・一月九日	
5	菅原神社の太々神楽			岩下	菅原神社太々神楽保存会	四月二五日・一月二十五日	
6	松谷神社の太々神楽			松谷	松谷神社獅子・太々神楽保存会	一月一四日・三月一五日	
7	能野講社の太々神楽			三島	無野講社太々神楽保存会	五月八日	
8	鳥頭神社の太々神楽			三島	鳥頭神社太々神楽保存会	四月二五日・一月三日	
9	吉岡神社の太々神楽			本宿	吉岡神社太々神楽保存会	四月八日・一月八日	
10	須賀尾鹿訪神社太々神楽			須賀尾	鹿訪神社太々神楽保存会	四月二七日・一月二七日	
11	佐奈神社神楽			大柏木	佐奈神社獅子舞太々神楽保存会	四月一日・一月一日	
12	泉沢獅子舞			泉沢	泉沢獅子舞保存会	四月第三日曜日・九月一五日	
13	松谷神社獅子舞			松谷	松谷神社獅子太々神楽保存会	三月一五日・一月二三日	
14	四戸の獅子舞			三島	四戸獅子舞保存会	一月三日	
15	古賀良神社獅子舞			大戸	古賀良神社獅子舞保存会	一月十九日	
16	畔宇治神社獅子舞			大戸	畔宇治神社獅子舞保存会	四月一日・一月一八日	
17	浅間神社獅子舞			萩生	浅間神社獅子舞保存会	四月一五日・一月二十四日	
18	道泉谷戸の鳥追い獅子舞			本宿	道泉谷戸獅子舞保存会	一月一四日	
19	佐奈神社獅子舞			大柏木	佐奈神社獅子舞太々神楽保存会	四月一日・一月一日	
20	新井の獅子舞			原町	原町新井獅子舞保存会(中斷中)	四月一日・一月一日	
21	太田神社の雅楽			厚田	太田神社雅楽保存会(中斷中)		
22	坂上地区の雅楽			本宿	坂上地区雅楽保存会(中斷中)		
23	人形芝居			三島	人形芝居遊楽座(中斷中)		
24	原町祇園囃子			原町	原町地区	七月二五日・二六日	
25	岩下祇園囃子			岩下	七月一九日・二〇日	一月一四日	
26	須郷沢の鳥追い			須郷地区			

5	4	3	2	1	番号	民 俗 芸 能 の 名 称	伝 承 地	伝 承 団 体 名	上 演 期 日	備 考								
長野原	長野原文化会	川原湯神社太々神楽保存会	川原湯	川原湯														
羽根尾獅子舞	王城山神社氏子会	与喜屋蓑蚕神社太々神楽	林	王城山神社太々神楽	40	本宿字宿・田代の悪魔払い	大柏木	本宿	中 断 中	一月一四日	須賀尾獅子舞保存会	須賀尾	須賀尾獅子舞保存会	須賀尾	須賀尾	須賀尾	須賀尾	須賀尾
羽根尾獅子舞	羽根尾獅子舞保存会	与喜屋蓑蚕神社太々神楽	羽根尾	川原湯神社太々神楽	39	萩生田谷の悪魔払い	大柏木	本宿	中 断 中	一月一四日	古谷の悪魔払い保存会	古谷の悪魔払い	古谷の悪魔払い保存会	古谷の悪魔払い	古谷の悪魔払い	古谷の悪魔払い	古谷の悪魔払い	古谷の悪魔払い
長野原文化会	長野原文化会	王城山神社氏子会	林	王城山神社太々神楽	38	本宿字宿・田代の悪魔払い	大柏木	本宿地区	萩生地区	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日
					37	萩生田谷の悪魔払い	大柏木	本宿地区	萩生地区	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日
					36	大戸宿の悪魔払い・鳥追い	大柏木	本宿	大 戸	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日
					35	長藤・大谷沢・平惡魔払い	大柏木	本宿	大 戸	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日
					34	鳴瀬・稻田の悪魔払い	大柏木	本宿地区	大 戸	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日
					33	原田兵庫の悪魔払い	大柏木	本宿地区	大 戸	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日
					32	三島生原の鳥追い	大柏木	本宿地区	大 戸	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日
					31	松谷の鳥追い	大柏木	本宿地区	大 戸	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日
					30	郷原古谷の悪魔払い	大柏木	本宿地区	大 戸	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日
					29	原町の鳥追い	大柏木	本宿地区	大 戸	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日
					28	須賀尾の悪魔払い鳥追い	大柏木	本宿地区	大 戸	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日
					27	須賀尾	大柏木	本宿地区	大 戸	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日	一月一四日

45 嬢恋村

番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
1	鎌原獅子舞	鎌原	鎌原獅子舞保存会	四月三〇日・九月九日	
2	大笛獅子舞	大笛	大笛青年会丸一團	九月一六日・一七日	
3	袋倉獅子舞	袋倉	鎌原獅子舞保存会	五月一日・二日	
4	大前獅子舞	大前	大前獅子舞連中	八月五日	
5	和讃	田代	田代和讃会	毎年	
6	浅間山噴火大和讃	鎌原	念仏講	毎月七日・十六日	
7	鎌原の念仏	赤岩	前口獅子舞保存会	四月一五日・一月一日	

46 草津町

番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
1	前口獅子舞	赤岩	赤岩地区	毎月一八日	
2	前口の和讃	赤岩	赤岩地区	四月一二日	
3	赤岩神社の乙女の舞	赤岩	日影	四月五日	
4	小雨生須鳥追い太鼓	生須	日影獅子舞保存会	一月一四日・一五日	
5	日影獅子舞	日影	日影獅子舞保存会	四月五日	
6	小雨生須鳥追い太鼓	生須	小雨生須鳥追い太鼓保存会		
7	鎌原の念仏	赤岩	前口獅子舞保存会		

47 六合村

番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
1	日影獅子舞	赤岩	赤岩地区	四月五日	
2	小雨生須鳥追い太鼓	赤岩	日影獅子舞保存会	一月一四日・一五日	
3	赤岩神社の乙女の舞	赤岩	日影獅子舞保存会	四月五日	

48 高山村

番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
1	太々神樂	太々神樂	太々神樂保存会	四月一日・四月二五日	
2	太々神樂	折田	尻高神社太々神樂保存会	九月一五日	
3	太々神樂	中山	三島神社太々神樂保存会		
4	太々神樂	太々神樂	太々神樂保存会		

1 番号	獅子舞	民俗芸能の名称	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
2 番号	民俗芸能の名称	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考	
3 番号	猿追い祭り	猿追い祭り	花咲	猿追い祭り保存会	旧暦九月中の申	一一月三日	備考

52 川場村

1 番号	獅子舞	民俗芸能の名称	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
2 番号	鉄砲祭り	鉄砲祭り	花咲	猿追い祭り保存会	旧暦九月中の申	八月二七日	備考
3 番号	にぎりつくら祭り	にぎりつくら祭り	越本	猿追い祭り保存会	第5区	三月一九日	備考
4 番号	萩室	伝承地	伝承団体名	猿追い祭り保存会	九月一〇日	二月一一日	備考

51 片品村

1 番号	武尊神社獅子舞	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
2 番号	大国神社獅子舞	伝承地	穴原	生枝獅子舞保存会	毎年	村指定
3 番号	八木節	伝承地	高平	平出歌舞伎保存会	毎年	
4 番号	八木節	伝承地	尾合	高平八木節保存会	毎年	

50 利根村

1 番号	生枝神社獅子舞	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
2 番号	白沢村平出歌舞伎	伝承地	生枝	生枝獅子舞保存会	毎年	
3 番号	八木節	伝承地	平出	平出歌舞伎保存会	毎年	
4 番号	八木節	伝承地	尾合	尾合八木節保存会	毎年	

49 白沢村

1 番号	稻荷様祭囃子	見沢地区	役原獅子(役原公民館)	八月二七日	村指定
2 番号	尻高人形	尻高	錦松会	二月一日	
3 番号	獅子舞	尻高		毎年	県指定
4 番号	春駒				

番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
4	念仏講踊り	川場湯原	川場湯原	毎年春秋の彼岸	二月初午
3	春駒	春駒保存会	春駒保存会		

53
月夜野町

番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
1	小高諏訪神社の太々神楽	後閑	小高諏訪神社太々神楽保存会	一〇月一日	
2	小松八幡宮の太々神楽	竹改戸	竹改戸太々神楽保存会	四月一日	
3	村主八幡神社の太々神楽	村主	村主八幡神社御神楽保存会	四月三日	町指定
4	小川神社里神楽	小川	小川神社里神楽保存会	四月一日	町指定
5	小高諏訪神社の獅子舞	後閑	小高諏訪神社の獅子舞保存会	一〇月一日	
6	月夜野囃子	月夜野	月夜野囃子保存会	八月一・二・三日	
7	月夜野祇園祭り	下牧	祇園祭り実行委員会	八月一・二・三日	
8	古馬牧の人形淨瑠璃	小川島	古馬牧人形保存会吉田座	四月一五日	町指定
9	やつさ祭り	小川島区		九月二九日	県指定

54 水上町

番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
1	大峰神社太々里神楽	小仁田	大峰神社太々里神楽保存会	五月三日	
2	富士浅間神社太々神楽	谷川	富士浅間神社太々神楽保存会	四月一九日	
3	栗沢武尊神社太々神楽	栗沢	栗沢武尊神社太々神楽保存会	五月五日	
	藤原の獅子舞		藤原の獅子舞保存会	八月一七日	町指定

番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
1	神道修成派代々神楽	猿ヶ京	神道修成派代々神楽講保存会	四月一六日	村指定
2	布施福荷神社太々郷神樂	布施	布施福荷神社太々郷神樂保存会	四月三日	村指定
3	新巻日枝神社太々郷神樂	新巻	新巻日枝神社太々郷神樂保存会	四月五日	
4	羽場日枝神社獅子舞	羽場	羽場日枝神社獅子舞保存会	五月三日	
5	永井十二神社獅子舞	永井	永井十二神社祭典保存会	四月一二日	
6	新治村盆踊り	村内一円		八月一三・一六日	村指定
1	永井箱根神社の太々神楽	澤平	永井太々神楽保存会	四月一五日	
2	義太夫	糸井	義太夫二代目鶴沢元助	毎年	
1	国定赤城神社獅子舞	下測名	国定赤城神社獅子舞保存会	四月一〇日	
2	上矢島の獅子舞	上矢島	下測名獅子舞保存会	一月三日	町指定
3	東新井の獅子舞	東新井	上矢島獅子舞保存会	一〇月一七日	
4	女塚祭礼囃子	女塚	東新井獅子舞保存会	一月・土曜	町指定
5	栄町祭礼囃子		東新井獅子舞保存会	八月第一土曜	町指定
		八月第一土曜			町指定

番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
6	三ツ木祭礼獅子舞	三ツ木	三ツ木祭礼獅子保存会	八月第一土曜日	町指定
6	60玉村町	60玉村町	60玉村町	60玉村町	60玉村町
番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
1	稻荷神社獅子舞	上新田	上新田稻荷神社獅子舞保存会	二月一日	町指定
2	祇園囃子	上新田	上新田区	七月第四土曜日	町指定
3	祇園囃子	下新田	下新田区	七月四日	町指定
4	祇園囃子	角測	角測区	七月中旬	
5	春鉾祭り	五料		二月一日	
6	水神祭り麦わら舟	穂石	麦わら舟保存会	七月二十五日	
7	地蔵祭り	飯塚	飯塚地区	七月二四日	
8	惡魔払い	下之宮	火雷神社氏子	一月一三日・七月二三日	町指定
9	麥蒔御神事	上福島		一〇月末の丑の日	
10	すみつけ祭り	南玉	南玉横だる音頭保存会	二月二五日	町指定
11	横樽音頭			一〇月十六日	町指定
6	阿久津の稻荷神社獅子舞	阿久津	阿久津獅子舞保存会	一一月一八日・一九日	町指定
5	堀口賀茂神社獅子舞	堀口	堀口獅子舞保存会	一一月一四日	町指定
4	八木節	前小屋	上堀口八木節研究会	七月二五日・一月	町指定
3	八木節	二ツ小屋	前小屋八木節愛好会	七月二三日・九月二十四日・二十五日	
2	八木節	世良田	尾島町八木節保存会	一一月	
6	八木節				

番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
1	小金井太々神楽	小金井	小金井太々神楽保存会	四月一八日・一〇月一八日	
2	赤堀の獅子舞	赤堀	赤堀獅子舞保存会	一〇月第二・三日曜	
3	村田祇園囃子	村田	村田祇園囃子保存会	八月上旬	
4	市祇園囃子	市	市祇園囃子保存会	七月第三日曜	
5	木崎音頭	木崎	木崎音頭保存会	八月上旬	
6	鍋矢祭り	市野井	市野井鍋矢保存会	五月八日	

63 蔽塚本町

番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
1	神楽	寺下	神楽保存会	毎年	
2	大原祭り囃子	大原	八坂神社お囃子保存会	毎年	
3	横町神代神楽	阿佐美	横町神代神楽保存会	四月第一土日曜	

64 笠懸町

番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
1	横町神代神楽	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
2	大間々祇園囃子	大間々	大間々おはやし保存会	八月一~三日	
3	神馬	神馬の会	神馬の会	八月二日	
4	大間々	大間々			
5	小平	小平折ノ内			
6	数珠念仏	八月一六日			

65 大間々町

番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
1	大間々祇園囃子	大間々			
2	神馬	神馬の会			
3	大間々	大間々			
4	小平	小平折ノ内			
5	数珠念仏	八月一六日			

番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
1	里神楽	板倉	板倉里神楽保存会	不定期	町指定
2	神代神楽	板倉	雷電神社太々神楽(中斷中)		
3	神代神楽	大高嶋	高島天満宮太々神楽(中斷中)		
4	獅子舞	朝谷	朝谷上獅子舞保存会	七月下旬	
5	獅子舞	下高嶋	島獅子舞保存会	三月	
6	獅子舞	飯野	飯野待辺の獅子舞日・(中斷中)		
7	獅子舞	飯野	飯野中新田の獅子舞(中斷中)		
8	獅子舞	飯野	飯野新村の獅子舞日・(中斷中)		
9	獅子舞	飯野	飯野本村の獅子舞日・(中斷中)		
10	獅子舞	飯野	北海老瀬大杉囃子保存会		
11	大杉囃子	海老瀬	山口大杉囃子保存会	七月	
12	大杉囃子	下五箇	横之口大杉囃子	不定期	
13	大杉囃子	中妻の大杉囃子	(中斷中)	町指定	
14	大杉囃子	峯大杉囃子			
15	大杉囃子	下高嶋	高島念仏講	不定期	
16	念仏踊り	斗合田地区	斗合田	七月二三日・二四日	
1	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	
2	斗合田の獅子舞	斗合田			
3	下江黒の獅子舞	下江黒地区			
4	千津井の獅子舞	千津井			
5	江口の獅子舞	江口			
6	江口獅子舞保存会			七月二六・二八日	
7				七月二四日	
8					

番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
1	社氏の稻荷様の神楽	石打	吉田	吉田西里神楽保存会	不定期
2	大神樂獅子舞	蘇原	仙石	仙石ささら保存会	毎年
3	蛭沼の百万遍	中野	井上加納	町指定	町指定
4	八坂神社の紙團扇子	中野地区	第11区青少年健全育成協議会	七月一四日	七月二二日

70 邑 樂 町

番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
1	吉田西里神楽	城之内	吉田西里神楽保存会	四月一八日・七月二八日・一〇月一八日	
2	仙石の獅子舞	仙石	仙石ささら保存会	七月二四日	
3	盟神祭湯神事	井上加納	川施鐵鬼保存会	八月一八日	

69 大 泉 町

番号	民俗芸能の名称	伝承地	伝承団体名	上演期日	備考
1	太々神樂	瀬戸井	中断中	四月一五日・一〇月一五日	
2	獅子舞	上五箇	愛宕神社氏子	六月一四日・一五日	
3	赤岩の川施鐵鬼	赤岩	川施鐵鬼保存会	七月九日・一〇日	

68 千代田町

5	梅原の獅子舞	梅原	梅原地区(中断中)		
6	川俣の獅子舞	川俣	川俣地区(中断中)		
7	須賀の獅子舞	須賀	須賀地区(中断中)		
8	南大島の提灯船	南大島	(中断中)	四月一五日・一〇月一五日	
9	大輪の山車	大輪	大輪観和会	六月一四日・一五日	
10	中谷の山車	中谷	中谷地区(中断中)	七月一四日・一五日	

		番号
6	5	民俗芸能の名称
狸塚馬頭観音の八木節	坪谷の豊年万作	伝承地
狸塚	坪谷	伝承団体名
狸塚地区	坪谷豊年万作保存会	上演期日
八月一九日	九月五日	備考

群馬県民俗芸能緊急調査

調査委員

調査員名簿

○調査委員

会長 副会長 委員会員 委員会員 委員会員 委員会員

小都 森井 金井 久 阿井 金井 小谷 森井 金奈 平

丸島 田田 田島 良坂 井

美十九 安安 竹秀 貞竹

一子 雄策 德作

○西部地区 (十九市町村)
調査委員

森井 金井 久 阿井 金井 小谷 森井 金奈 平
田島 丸島 田田 田島 良坂 井

田子 野子 野子 友宗 宗修 緯安 宽友

雄一郎 一郎 雄次 二郎 二郎 孝江 己策

○中部地区 (二十一市町村)
調査委員

○利根地区 (八市町村)
調査委員

奈丸 若坂 原金 小金 小金 市原 金平 川川 小川 五十十 荷屋 嵐屋 村坂 沢井 野井 井野 寄月 山山 良夫 重夫 眼夫 重夫 不二富士 太也 治也 太也 竹信 庫宣 倍也 太郎 郎德

	62	61	7	5	3	No.	市町村名
(東部)	新田町	尾島町	館林市	太田市	桐生市		
	6	6	14	17	31	件数	
	1	0	5	0	5	神楽	
	0	0	0	2	1	田楽	
	3	2	8	15	9	風流	
	0	0	0	0	0	語り物	
	0	0	0	0	0	延年	
	0	0	1	0	2	舞台芸	
	0	0	0	0	0	大道芸	
	2	4	0	0	14	その他	
						備考	

	56	55	54	53	52	51	50	49	6	No.	市町村名
合計	昭和村	水上町	月夜野町	川場村	片品村	利根村	白沢村	沼田市			(利根)
	42	2	6	4	9	4	3	2	4	8	件数
	16	1	3	3	4	0	0	0	0	5	神楽
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	田楽
	11	0	2	1	3	1	0	2	1	1	風流
	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	語り物
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	延年
	5	1	0	0	1	1	0	0	1	1	舞台芸
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	大道芸
	9	0	1	0	1	2	3	0	2	0	その他
											備考

	48	47	46	45	44	No.	市町村名
合計	高山村	六合合村	草津町	嬬恋村	長野原町		
	107	6	3	2	7	5	件数
	30	2	1	0	0	3	神楽
	0	0	0	0	0	0	田楽
	67	2	2	1	4	2	風流
	0	0	0	0	0	0	語り物
	0	0	0	0	0	0	延年
	3	1	0	0	0	0	舞台芸
	1	1	0	0	0	0	大道芸
	6	0	0	1	3	0	その他
							備考

	70	69	68	67	66	65	64	63	No.	市町村名
合計	邑楽町	大泉町	千代田町	明和村	板倉町	大間々町	笠懸町	蔽塙本町		
	18	6	3	3	10	16	3	1	2	件数
	19	1	1	1	0	3	0	1	1	神楽
	3	0	0	0	0	0	0	0	0	田楽
	65	2	1	1	10	12	1	0	1	風流
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	語り物
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	延年
	3	0	0	0	0	0	0	0	0	舞台芸
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	大道芸
	28	3	1	1	0	1	2	0	0	その他
										備考

群馬県民俗芸能緊急調査悉皆調査票

市町村名		整理番号		群馬県教育委員会
1 民俗芸能の名称				
2 芸能の種類	<input type="checkbox"/> 神楽 <input type="checkbox"/> 田楽 <input type="checkbox"/> 風流 <input type="checkbox"/> 語り物、祝福芸 <input type="checkbox"/> 延年、おこない <input type="checkbox"/> 渡来芸、舞台芸 <input type="checkbox"/> 大道芸、見せ物 <input type="checkbox"/> その他			
3 伝承地	市、郡 (旧村) 町、村(字))			
4 伝承団体名				
5 団体代表者名	氏名・ 住所・ 電話・			
6 伝承の状況	(1) 近年の変容・ <input type="checkbox"/> 旧行のまま <input type="checkbox"/> 変容あり <input type="checkbox"/> 中断中 (2) 中断中の場合・ <input type="checkbox"/> 復活の可能性あり <input type="checkbox"/> 可能性なし (3) 今後の見通し・ <input type="checkbox"/> 廃滅の危機あり <input type="checkbox"/> 廃絶の危機なし			
7 指定の状況	<input type="checkbox"/> 国指定 <input type="checkbox"/> 県指定 <input type="checkbox"/> 市町村指定 <input type="checkbox"/> 未指定			
8 上演の期日	定期 (<input type="checkbox"/> 毎年 <input type="checkbox"/> 隔年 <input type="checkbox"/> 年毎) <input type="checkbox"/> 不定期 (月 日 () ~ 月 日 () の時)			
9 上演の場所	機会・ <input type="checkbox"/> 祭礼 <input type="checkbox"/> 法会 <input type="checkbox"/> 年中行事 <input type="checkbox"/> その他 場所・ <input type="checkbox"/> 寺社境内 <input type="checkbox"/> 神楽殿 <input type="checkbox"/> 仮設舞台 <input type="checkbox"/> 街路 <input type="checkbox"/> 民家の座敷 <input type="checkbox"/> 民家の庭先 <input type="checkbox"/> 山車 <input type="checkbox"/> 屋台			
10 行事次第 芸能の構成 演目 楽器 芸能の概要	<p>(概要の要旨)</p>			
11 記録の所在	文献記録 (<input type="checkbox"/> 伝書 <input type="checkbox"/> 歌本 <input type="checkbox"/> 台本 <input type="checkbox"/> 型付 <input type="checkbox"/> 楽譜 <input type="checkbox"/> 上演記録) 参考文献 (<input type="checkbox"/> 市町村誌 <input type="checkbox"/> 調査報告書 <input type="checkbox"/> 民俗芸能誌 <input type="checkbox"/> 単行本) 映像 (<input type="checkbox"/> 映画 <input type="checkbox"/> 8ミリ <input type="checkbox"/> ビデオ) 録音 (<input type="checkbox"/> 録音テープ <input type="checkbox"/> レコード <input type="checkbox"/> CD) ※具体例			
12 作成者	氏名 連絡先 電話			

群馬県民俗芸能緊急調査詳細調査票

設置・設営・道具(個数)									
役	名	人数	年齢	性別	役	名	人数	年齢	性別
道具									
役	名	班・被り物	面	上衣	下衣	腰物	披り物	その他	
楽器(名称、最小員数)・音楽等									

芸能の種類		市町村名	文化財指定の有無(指定年月日)
			有・無 昭和 年月日
ふりがな	名 称		通・異称 例・旧称
1. 名 称	(旧町村名)		社寺名
2. 伝 承 地			地区名
振り・行番名			
3. 上演の時期			
過去の時期 旧・新番			
・場所 定期・不定期 定期(毎年・隔年・一年ごと)・不定期			
場 所			
時 間			
行事次第			
4. 芸能の構成 楽目			
項目・芸想			
廃絶した項目			

6. 古来等									
7. 附近に懸記									
無 有 名 称									
の芸能の有無									
市町村名									
文書記録									
著者・年代									
所在・所有者									
映像記録									
所在・所有者									
録音記録									
所在・所有者									
参考文献									
著者・発行所									
氏名・役職									
調査協力者 住所・電話番号									
氏名・役職									
調査協力者 住所・電話番号									
氏名									
調査実施者 調査年月日 平成 年月日一月日									
作成者 作成年月日 平成 年月日									
写真、取扱、調査、資料等別添付									

芸能(舞いぶり・しぐさ・歌い方・演奏法)									
5. 施設・他									
行事の運営組織									
出演者の資格									
出演者の職業									
時 期									
稽古始めの年齢									
費用(伝承・公演経費の分担法)									
保存会名 設立 昭和 年月日									
所在地									
代表者									
構 成									
規 約									

群馬県の民俗芸能

—群馬県民俗芸能緊急調査報告書—

発行日 平成九年三月三十一日

発行集 群馬県教育委員会

〒371群馬県前橋市大手町一一一

印刷 朝日印刷工業株式会社
〒371群馬県前橋市元総社町六七